

605-38

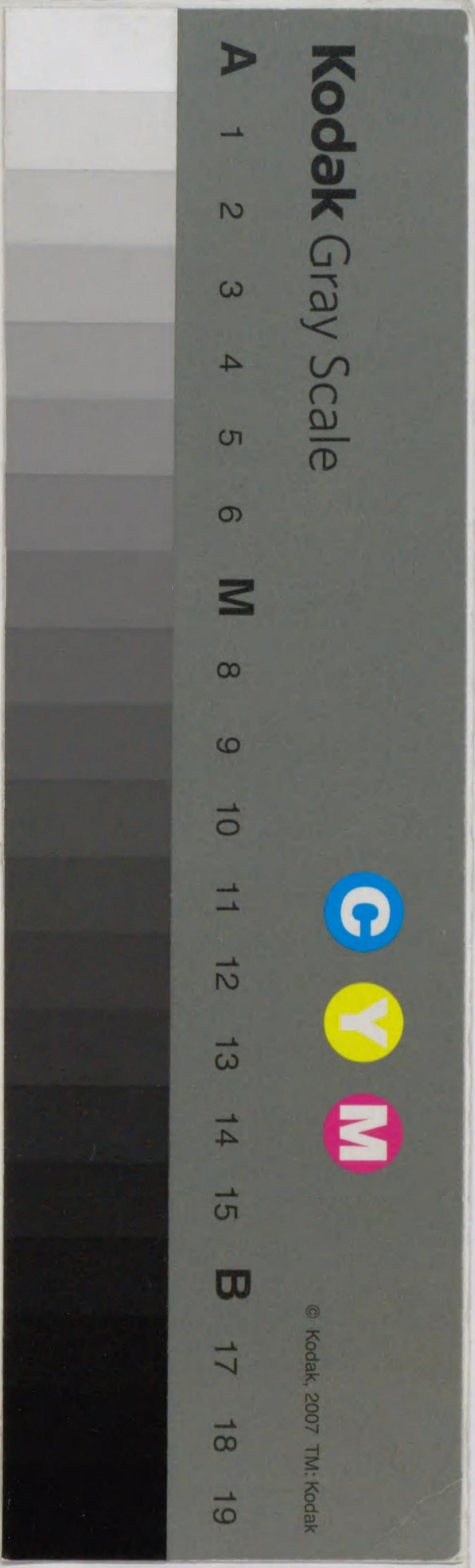


1200501531973

5
38

三宅博士
古稀祝賀会
記念誌

同祝賀会編

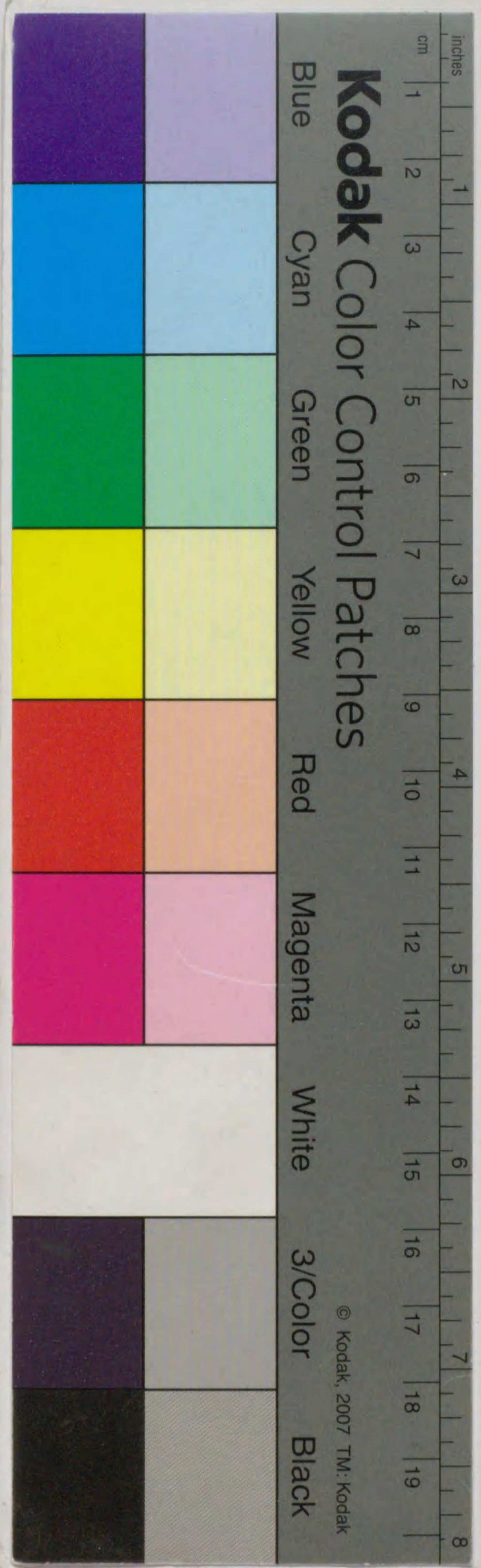


Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

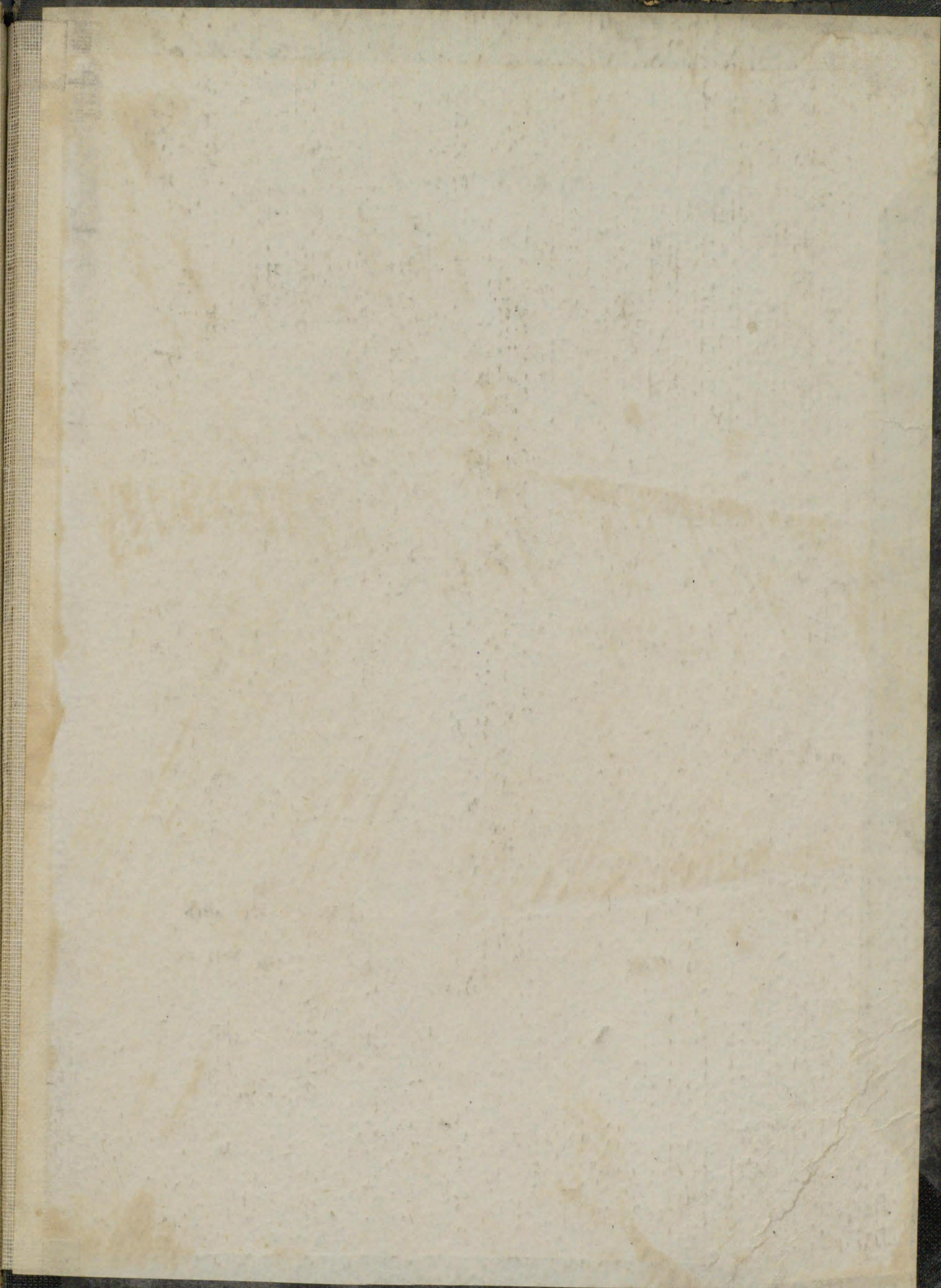


Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

三宅博士
古稀祝賀會
記念誌





目次

先生御肖像 (口繪一) 三九

大禮服の先生 (口繪二) 四七

各時代の御寫眞 (口繪三) 六三

先生書畫と祝賀式當日の御一族 (口繪四) 七三

祝賀式光景 (口繪五) 九八

賀宴光景 (口繪六) 一〇三

三宅博士小傳 一〇五

年譜 一〇五

著作年表 一〇五

祝賀會經過報告 一〇五

祝賀會概況 一〇五

祝電 一〇五

會計報告 一〇五

祝賀會賛成者名簿 一〇五



東京高師
大塚史學會
寄贈本





三宅先生御肖像

和田英田作画伯筆



影 撮 の 近 最

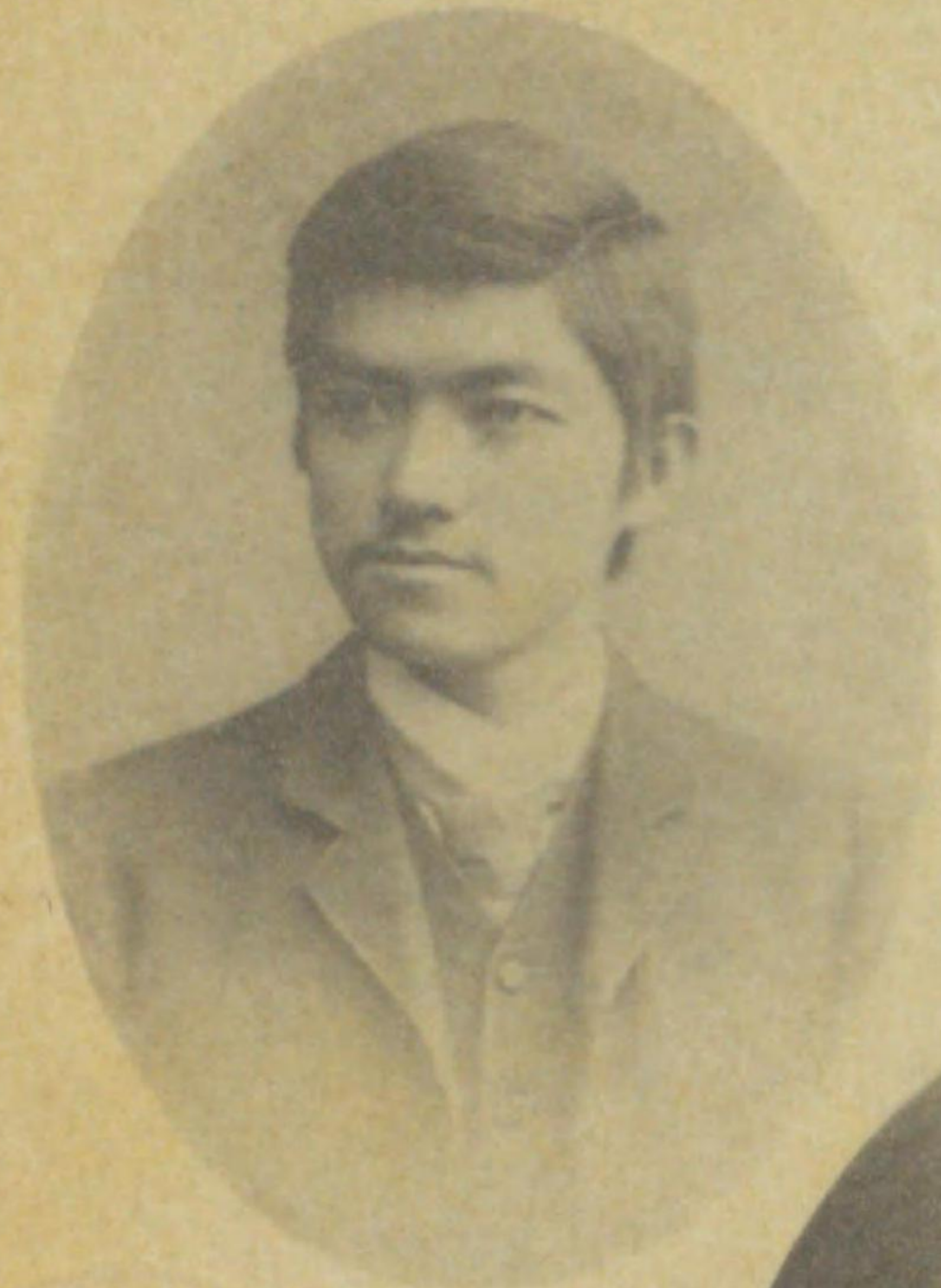
(日九十二月四年四和昭)





影 撮 の 近 最

(日九十二月四年四和昭)



倫敦在留當時の攝影
(明治二十年二十八歲)



新鴻學校在勤當時の攝影
(明治十年十七歲)



東京高等師範學校
在職二十五年祝賀
會當時の攝影
(大正二年五十四歲)

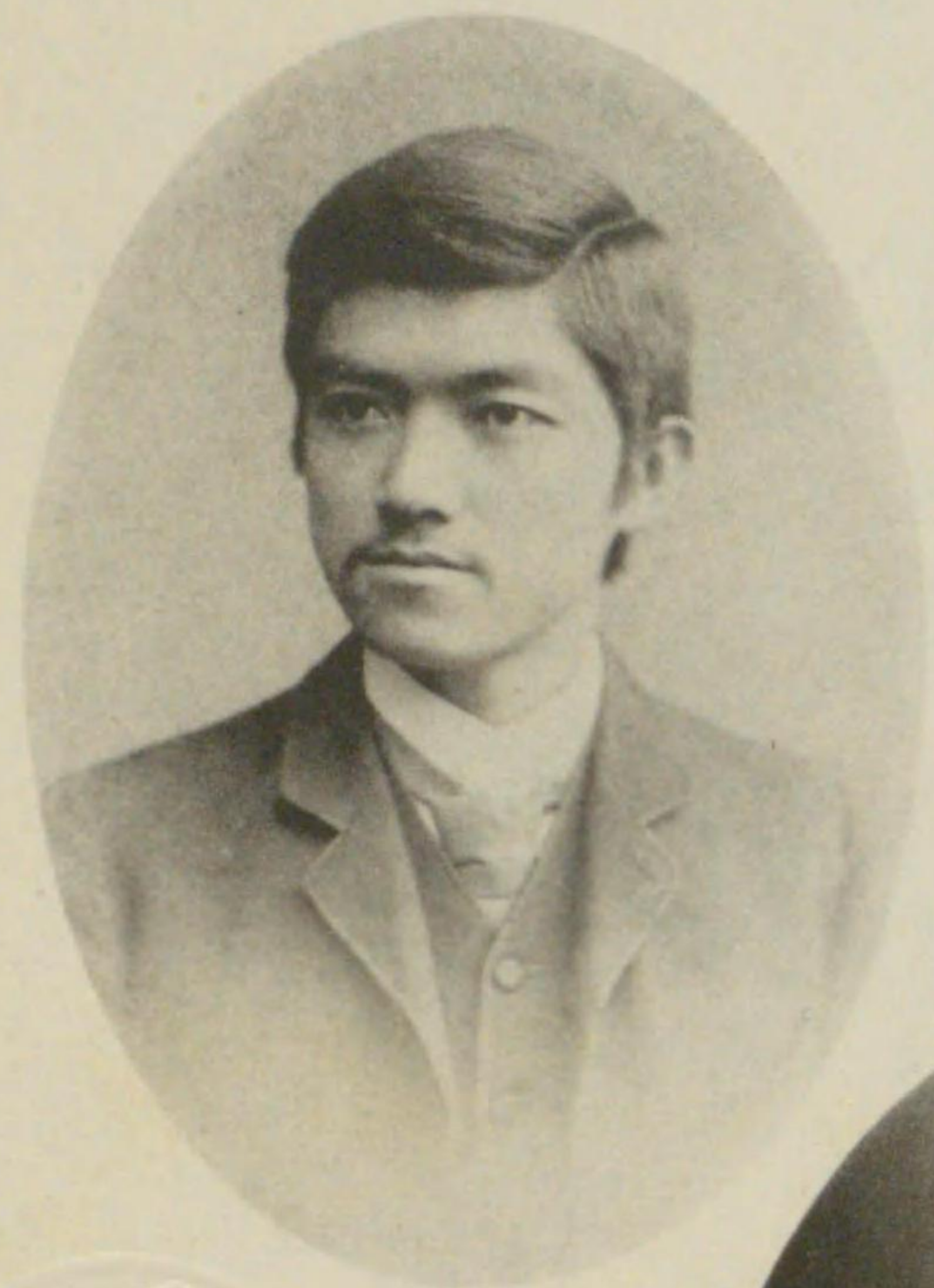


影攝の時當歲九十四
(年一十四治明)

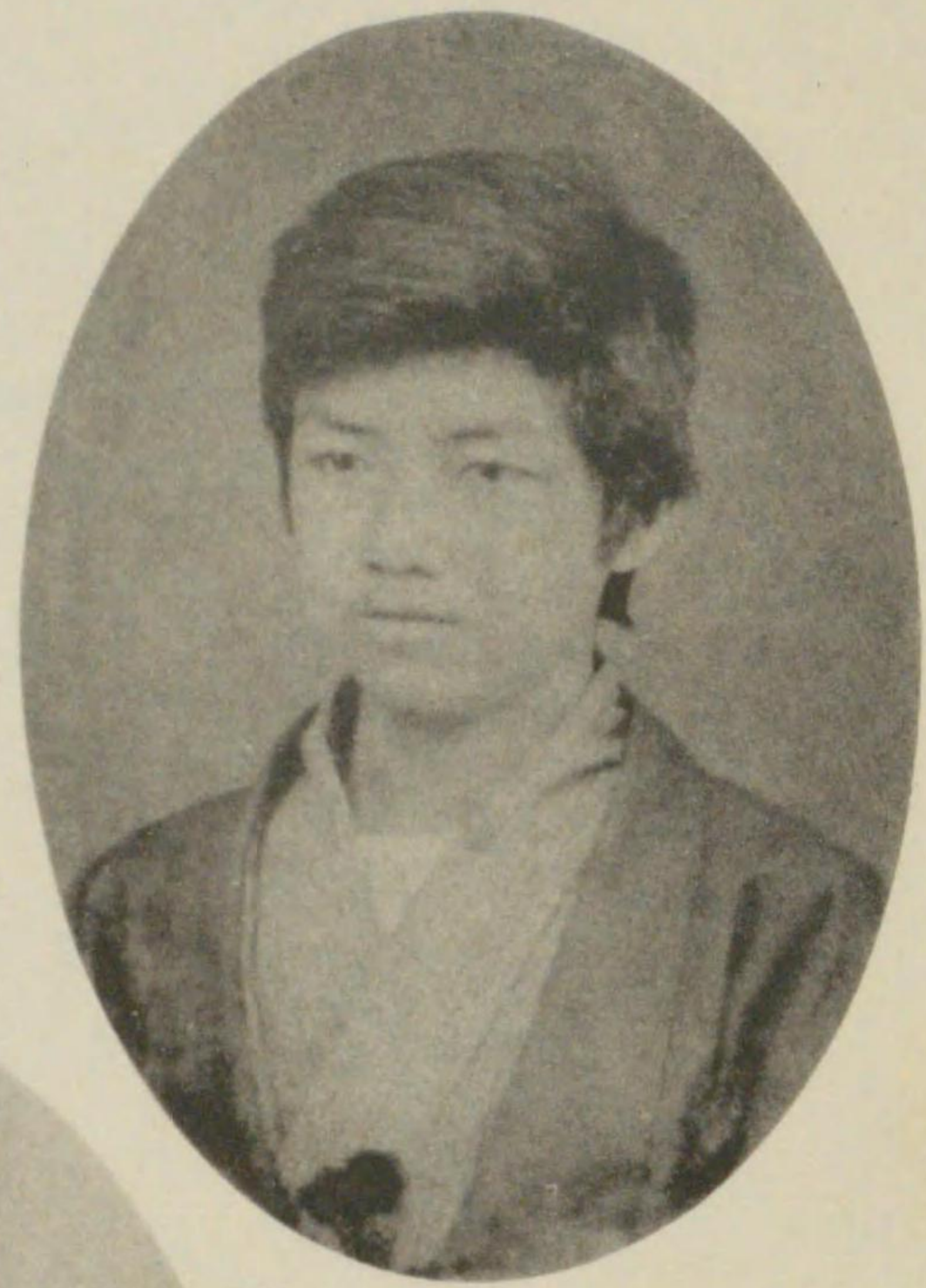


影攝の時當歲三十四
(年五十三治明)

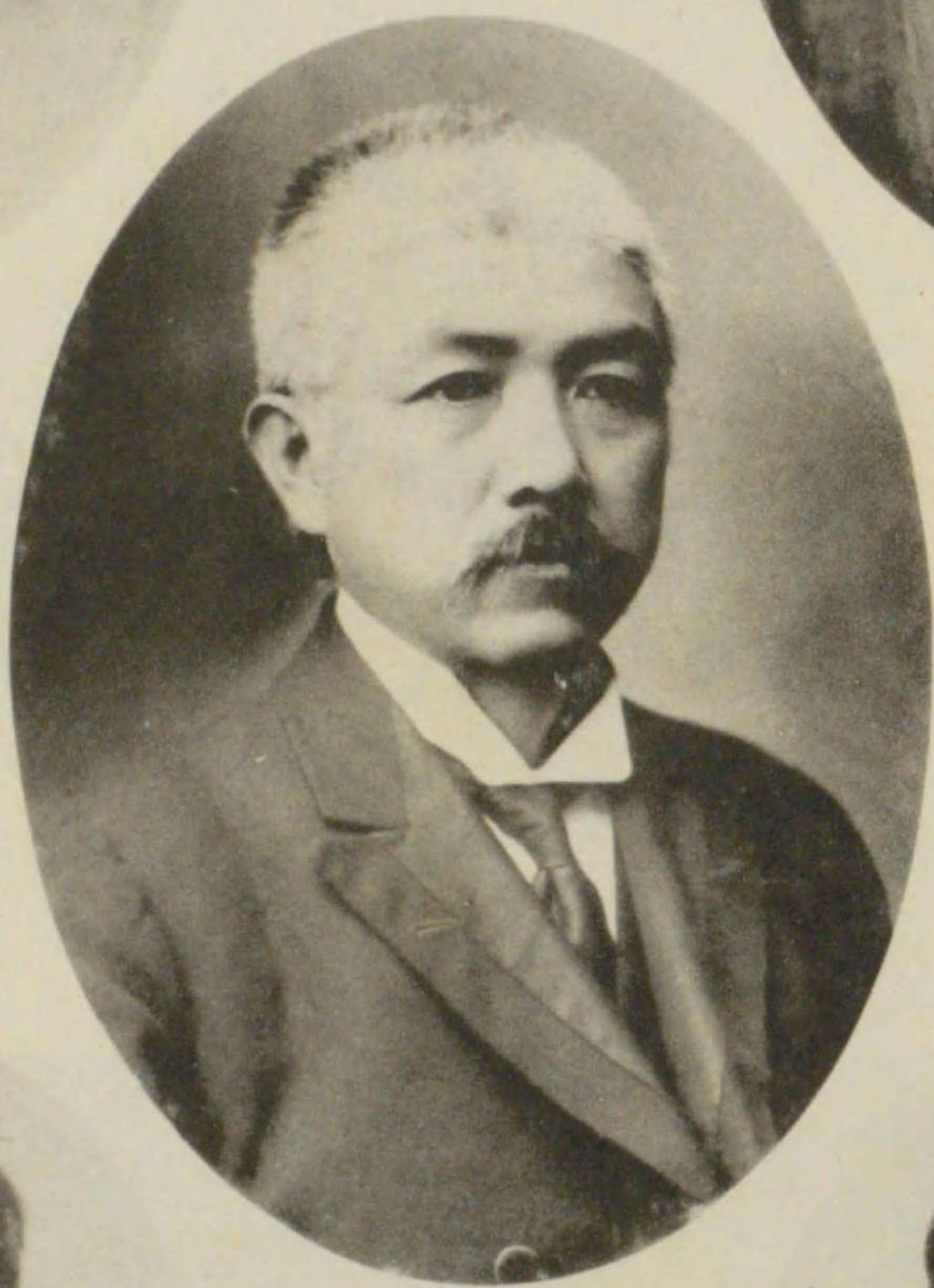




倫敦在留當時の撮影
(明治二十年二十八歳)



新潟學校在勤當時の撮影
(明治十年七歳)



東京高等師範學校在職二十五年祝賀會當時の撮影
(大正二年五十四歳)



影撮の時當歳九十四
(年一十四治明)



影撮の時當歳三十四
(年五十三治明)



三宅先生畫

昭軒
三宅先生

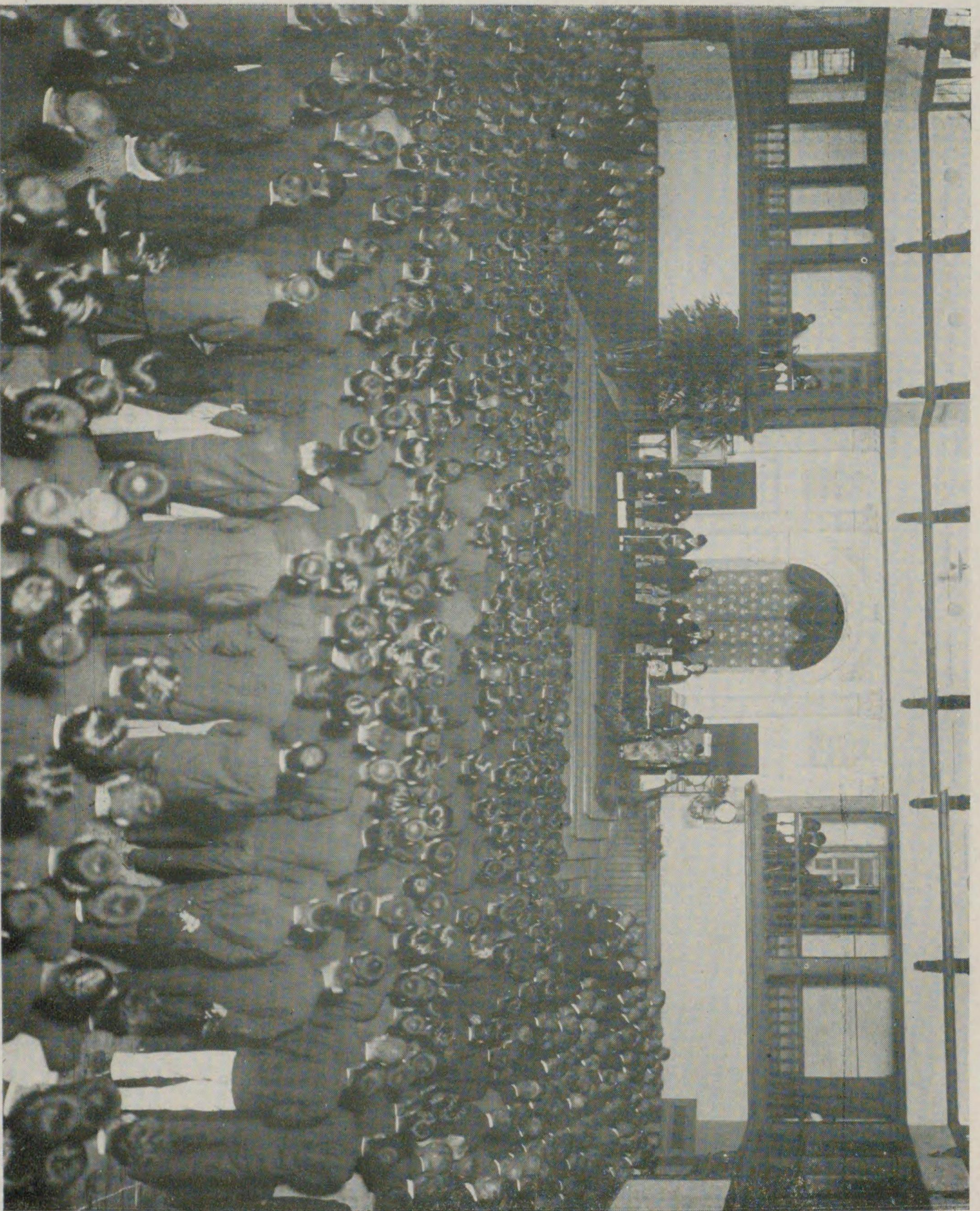
流水不流月

三宅先生書



祝賀式式場にて

右より 外孫藤田令嬢・藤田夫人・三孫千代嬢・夫人田夫・外孫藤田令嬢・外孫藤田令息・外孫井石令息・井石夫人・井石令嬢・三宅先生



式賀祝るけ於に堂講學大科理文京東
族一御に並生先宅三は上壇



東京會館に於ける賀宴
三宅先生御挨拶

東京會館に於ける賀宴
三宅先生御挨拶

文學博士三宅米吉先生小傳

東京文理科大學長東京高等師範學校長文學博士三宅米吉先生は今年古稀の齡に達せられたるを以て知友門人等相圖り十月吉辰を卜し盛大なる祝賀會を開かんとす。不肖淺學非才自ら揣らず此の機會に於て敢へて先生の小傳を草す。唯恐る先生の徳を瀆し其の眞を失はんことを。

齋藤斐章



文學博士三宅米吉先生は和歌山藩士三宅榮充よしみつ氏の長子にして母堂を直子といふ。萬延元年五月十三日(太陽曆七月十一日)紀伊國和歌山城下宇治に生る。三歳にして母を喪ふ。この年隣家坂部氏に就き甫めて

文字を習ふ。七歳にして藩學學習館に入り漢籍の素讀を學ぶ。明治二年嚴父に隨ひ伊都郡橋本に移り、居ること一年、民政局參事草野政信氏に伴はれて有田郡湯淺に移り日夕其の教を受く。明治四年和歌山に歸り再び藩學に通學し、傍ら某氏に就きて洋算を學ぶ。天性聰明にして嶄然頭角を見はす。既にして嚴父宮内大監に任ぜられ、まづ獨り東京に移り、ついで參事三浦安氏の大藏省に轉職するに會ひ、博士は託せられて東京に出て直ちに慶應義塾に入る。博士時に年十三歳。義塾は當時

變則正則の二部に分れ變則部は主として年長學生に英書を以て政治學經濟學を授け、正則部は五學年より成り、すべて英文教科書を用ひ英語及び普通學を授くる制なりき。博士は正則部に入學し、年少者を收容せんが爲に設けられたる寄宿舎童子局に入りしが、學力優秀にして等輩を擢んでしかば、再度學年を越えて上級に進められ、在學二年餘、成績常に群を抜けり。既にして義塾の學則改正あり、博士は年長學生の列に編入せられしが、學科は政治學經濟學を主とし、しかも其の講ずる所はミルの代議政體論、ギゾーの文明史等にして十五六歳の少年には到底解し能はざるものなりき。博士は受業の益なきを思ひ同級の尾崎行雄氏と共に當局に訴ふる所ありしかど、當局は一二の學生の爲に特別の學級を設くる能はずとして博士等に對し他の適當なる學校に轉學すべきを勸告せしかば、博士は遂に尾崎氏等と共に斷然退學したり。時に明治八年、博士年十六歳。是より後、博士また學校教育を受くる機會なかりしを以て、純粹なる學生生活は此に終りたれども、刻苦勉勵獨學自習に努むるの端は是より啓かれ、義塾在學中に得たる英語の力は其の精緻なる科學的頭腦と相須ち、博士をして泰西の思想と學術とに觸れしめ、新見解を以て國史界考古界を照破し遂に斯界の泰斗と推さるゝに至れり。

明治九年嚴父の新潟裁判所に轉任せらるゝや、博士隨ひて居を新潟に移す。偶、官立新潟英語學校の英語教員を需むるあり、この年七月十一日を以て英語教員心得に任ぜらる。實に十七歳の青年たりき。博士が他日教育家として幾千の學生を薰陶し一世の師表と仰がるゝに至れるは其の端緒をこの時に啓けるなり。翌年二月、官立新潟英語學校廢せられて縣立新潟學校に併せられ、英語教場と稱せり。三月二日博士は新潟學校百工化學教場助手となり教師中川謙二郎等に就き物理學、化學分析等を実習し、之によつて科學的實驗と其の研究法とを會得するを得たり。かくて博士は後年能く之を文化科學の上に適用して新解釋を加へ、國史學界、考古學界に新生面を開きたりしなり。

ついで九月英語教場譯讀教師を兼ね、在職二年餘にして漸く重用せられ、十二年一月新潟學校百工化學教場舎中監事を命ぜられたり。されど新潟は僻遠にして驥足を伸ばすの地にあらざるを以て、七月職を辭して上京し、草野政信氏の家へ寄寓し、舊藩主徳川家の家扶上田章氏に就きて漢文の添削を請ひ、又徳川家の文庫より藏書を借覽し六國史を始として多く和漢の諸史を涉獵したり。是より科學的に國史を研究せんとする念を抱き専心史籍を繙讀し、遂に自ら奮つて從來の因襲を打破し眞史學を建設せんことを期するに至れり。明治十九年に公刊せる處女作日本史學提要第一編は實に我が國史界に投ぜられたる第一石たりしなり。

明治十三年嚮に新潟學校長たりし小杉恒太郎氏千葉師範學校長の職に在り、博士の學才と人物とに信賴し、三月博士を迎へて千葉師範學校教師に任じたり。ついで七月博士千葉中學校教師を兼ね、物理、化學の外、英語、數學、植物學をも教授せり。文學博士白鳥庫吉、子爵石井菊次郎、故木内重四郎諸氏の親しく博士の教を受けたるはこの時なりき。是等三氏は博士の東京に轉住するに及び、博士の寓居小石川傳通院内貞照庵に同居して日々博士の提撕を受けたり。

この頃、慶應義塾在學時代に博士の師たりし高嶺秀夫氏、東京師範學校（後の高等師範學校）校長補たり。附屬小學監事を求むること切なりしが、千葉師範學校の同僚たりし猪狩勝直氏曾て生徒等某教員に對して不穩の所爲あるに際し博士が舍中監事としての處置公平にして生徒一同の悦服を得たる事例を擧げて博士を推薦したり。高嶺氏大に喜び小西信八氏を介して博士の來任を乞ひしが、博士は自ら其の材にあらずとして固辭したれば、高嶺氏は益々其の恭謙自重の態度に推服し、強いて博士の應諾を促さしめ、明治十四年三月博士遂に東京師範學校教員として就任し、ついで七月助教諭に任ぜられ附屬小學に勤務せられたり。以て博士が世の名を趁ひ地位を競ふものと大に其の選を異にするを見るべし。爾來東京師範學校は或は校則の改正あり或は校名の變更あり、博士も一時金港堂編輯所長となれることあり海外に留學せしことありたれども、今日に至るまで我が高等師範學校と終始せられ在職五十年の久しきに及ばんとす。其の擔當せられし學科は初め英語、歴史、國語、動物學等にして、附屬小學校に於ては物理、化學をも教授せられしが、後には専ら國史學を擔當せられ、東洋史の那珂通世博士と共に高等師範學校に於ける史學の雙璧として推重せられたり。

二

國字、國語の改良は明治年間に於ける我が學界教育界の大問題にして、明治十四年より兩三年の間に「かなのとも」「いろはくわい」「いろはぶんくわい」「羅馬字會」等の諸團體競ひ起れり。

「かなのとも」が歴史的假名遣を採用せんとするに反し、「いろはくわい」及び「いろはぶんくわい」は、發音的假名遣を以て、假字文を擴めんとする團體なり。博士は實に「いろはくわい」幹部の一人なりき。明治十六年七月假字主義諸團體の大同團結成り、「かなのくわい」と稱し、月雪花の三部に分れ、「つきのぶ」は歴史的假名遣を、「ゆきのぶ」は發音的假名遣を、「はなのぶ」は五十音揃ひの假名遣を用ふるを主義とせり。「ゆきのぶ」は月刊雜誌「かなのまなび」を發刊して主義を宣傳するに決し、博士は常議員兼取調委員として雜誌編輯の任に當り、この年八月より發刊したり。其の趣意書に曰く「本部ノ趣意ハ本會ノ趣意ニ從ヒ世ニ假名文ヲ擴メントスルニ當リ廣ク之ニ關スル事ヲ研究シ假名遣等ニ改良ヲ加ヘ成ルベク普通ノ文章ヲ容易クシ竟ニ言語ト文章ト一致セシメントスルニアリ」と、以て如何に進歩的、民衆的なるかを見るべし。十七年七月「かなのくわい」の三部合同して雜誌「かなのしるべ」を發刊し、博士また評議員兼編輯掛となれり。されど假名遣の兩主義遂に協はず、翌年分裂して「もとのとも」「かきかたかいりようぶ」の對立となれり。前者は「つきのぶ」、後者は「ゆきのぶ」の後身たり。「かきかたかいりようぶ」は雜誌「かなのざつし」を發刊し、博士は三たび幹事として雜誌編輯の任に當り以て明治十九年に及べり。この間、假名文を如何に書くべきかにつきて苦心せられしが、中にも分ち書きに於て「てにをは」を他の詞に續けるか離すかが、討論題となり非常なる論戰を闘はしたることあり。

既に進歩的民衆的なる發音假名遣を主張せし博士は、言文一致體を唱道して新國文の發達に多大

の寄與をなし、現今行はるゝ文體の魁となれり。且つ博士は民衆的なる發音假名遣と口語體とを採用するに先だち、各地の方言を調査し標準語を定めざるべからずとし、方言の調査、標準語の研究に意を注げり。「かなぶみのうつりかわり」「くにぐにのなまりことば」「ぞくごをいやしむな」「ぶんのかきかた」「言文一致の論」「方言取調仲間の主意書」等は是等に關する博士の所論を窺ふに足るべし。また、博士がネサンブラウン氏の「てにをは」に關する説を論駁して、アリアン語の語尾屈曲と日本語の「てにをは」との性質を異にすることを明にせしは言語學上の一大論文と云ふべし。

又博士は言文一致論者たるのみならず、作家としても優に一家をなせり。明治二十一年七月以來「文」誌上に載せたる「撫子物語」はヘスタロジの原著「レオナルドとゲルトロド」を流麗なる言文一致體に邦譯せるものにして、「かなのしるべ」誌上の「みるざのまぼろし」「ひるばのはなし」と共に文藝上の作品に於ける才腕を見るに足るべし。博士は又この年の創刊に係る「都の花」を主宰し、山田美妙齋、長谷川二葉亭、幸田露伴等の小説を連載して言文一致體の實現に努めたり。

明治三十二年十月帝國教育會内に國字改良部の設けらるゝや、博士は其の幹事に擧げらる。三十年一月辻帝國教育會長の名を以て内閣總理大臣及び貴衆兩院議長に提出せし國字國文の改良に關する請願書は實に博士等の起草に係るものなり。この議、内閣及び兩院の採用する所となり、更に兩議院の建議案となり、同年四月より國語調査委員を文部省内に置かれ、三十五年四月には國語調査委員會の設置を見るに至れり。博士が國民文化の進運を展開し、國語國文の改良、國語教育の上

に貢獻せられたる功績は明治教育史上没すべからざるものなり。

三

博士が明治二十一年二月歐米留學より歸朝せらるゝや、直ちに金港堂編輯所長として小學校教科書の編纂を總裁せられ、また二十二年一月より雜誌「文」を刊行し眞摯なる學術的研究を發表すると共に學術を社會に接近せしむる機關となさんことを期し、學術、教授、内外教育情況、時事要報等の數部門を設け、博士自ら執筆したり。

學術欄には那珂通世氏の日本上古年代考を連載して世論に問ひ、朝野の學士、鴻儒九十餘氏の外、外國人にも意見を徴したり。中村正直、久米邦武、津田眞道、末松謙澄、内藤恥叟、神田孝平、西村茂樹、星野恒、加藤弘之、大鳥圭介、高崎正風、小中村義象、大槻文彦等學界の泰斗、轡を駢べて論陣を張り、チャンパーレン、アストン等も書を寄せて所見を披瀝し、眞に學界の一大偉觀たり。この間、博士自身の研究は毎號に發表せられ、或は益軒の教育法を論じ、或は國史上の論文を發表し、或は勝伯の戊辰記録を連載して好史料を供するなど、學術界に貢獻する所頗る多かりき。又他面には中根淑氏と共に「都の花」を發刊して、文學雜誌の先驅をなせり。特に現代小説の文體に一新時期を開ける山田美妙齋の口語體小説が「都の花」誌上に現はれしは、明治文學史上看過すべからざるものなり。

四

博士は我が國に於ける教育説、教授法の發達を尋求せんとし、儒者、雨森芳洲、貝原益軒、江村北海并に林子平の所説を研究し、この方面に於ても前人の未だ手を著けざりし研究を遂げて世に紹介したり。中にも貝原益軒の教育法につきては先づ其の著、初學訓、大和俗訓、慎思錄、自娛集等の内容を解剖し、德育、智育、體育に分つて、教育主義方法の理説を説き、更に課程、教授法及び女子教育に論及せり。由來益軒の學問を論じたる學者はありたれども、其の教育法を論じたるものはあらず、教育法を論ずるは尙易けれども之を泰西の教育家と比較論證するに至つては、國史と西洋史を達觀するにあらざれば能はざるなり。明治二十二、三年、西洋史學の幼稚なる當時にあつては時流を超越せる卓見といはざるべからず。益軒は我が文運復興後百年、ロックは英國古學復興後百年に於て教育説、教授法を唱道し、益軒は西曆一六三〇年に生れて一七一四年に死し、ロックは益軒の二年後に生れ十年前に死せり。益軒・ロックは共に壯時醫術を修めて體育衛生の必要を説きたり。ユーラシア大陸の東と西との孤島にあつて殆ど同時に學術上の新説、教育、教授法を唱道したるは一奇と云ふべし。武人教育を主としたる時代に於て、益軒が民庶教育の必要、家庭教育法を唱へたるは、ロックの觀察實驗の必要、普通教育の方法を論じたと甚だ相似たり。博士の所論微に入り細を極めて、能く兩者の學界に於ける位置を論證せり。但し我に在つては益軒の後を繼ぐべき

教育家なかりしかども、彼に在つては歐洲大陸の學者によつて繼承せられ、心理學、教育法漸く發達して、遂に科學の體形をなすに至れり。これ後代彼我兩國の文化に大なる相異を來せる所以なり。

五

明治昭代は我が國の文運勃興期と云ふべく、諸般の學術何れも舊套を脱して新生面を開きたるが、博士は實に教育と教授との改良家の先驅たりしなり。

明治五年學制頒布以來、小學校の學級編制、教則、教科目の制定より師範教育制度に至るまで改定に改定を加へ、明治十二年、十三年、十八年の改正教育令あり、教科書の内容、教材の選擇、教授法等尙未だ幼稚なるを免れず、かゝる時代に博士が新保磐次氏と共に編纂せられたる日本讀本こそ我が國讀本改革の先驅たりしなれ。日本讀本に先んじて出版せる者に安積五郎のと若林虎三郎のとあり。この二書は從來に比して遙に進歩したるものなれども、尙未だいろはの順序に捉はれ、取扱上困難を感ずること少からざりしが、日本讀本は左の諸點に於て一頭地を擡んでたり。

第一、片假名を平假名の前に提出せるは日本讀本を以て嚆矢とす。初め清音の片假名を提出していろは歌と音圖とにまとめ、次に清音の平假名、最後に濁音及び次清音の片假名と平假名とを對照しつゝ提示し、それ／＼音圖にまとめたり。

第二、假名を提出するに、いろは法を廢して全然範語法を用ひたり。蓋し我が國範語法の源をなせ

るなり。

第三、口語文を提出し、常體の口語文より始めて敬體の口語文に及べり。蓋し博士の持論を實現せるものなり。

第四、教授の材料は文科と理科との何れにも偏することなく、廣く普通教科より採擇せり。

以上の四點は何れも次代の讀本の標準となり、讀本編纂上の一新時期をなせり。

六

博士の金港堂編輯所長時代に出版せるもの、中、小學校用作文書は最も異彩を放てるものなり。

本書は明治二十三年五月の發行に係り、尋常科四學年用に宛てたる兒童用書にして全八卷より成る。第一卷の緒言に曰く、

本書作文書と名づくとも雖も、未作文の本部に入らず、唯讀本の練習を主として漸次作文の端緒に導くものなり。

と。第一卷は先づ繪によつて語を練習し、次第に假名を練習せしめ、第二卷は單文より始め、兒童の自然的要求に基づきて基礎練習をなさしめ、口語を主とし、終りに簡單なる文語を加へたり。第三、四卷は文語の基礎練習をなさしむるを目的とし、口語文を文語文に改作すること、問を設けて思想を練らしむることを主とし、挿畫によつて作文の材料を供給せり。第五卷以下口語文、文語文

より次第に進みて候文の基礎練習をなさしめ、電報文、屆願書類、送り狀等、日常生活に必須なるものを掲げたり。

抑、明治時代に於ける作文教授の變遷を見るに、明治三十年前後を分界點とし、其れ以前は重きを形式方面におき、専ら文法の示す所の繁簡の順序を追ひ基礎練習を主として思想を副貳的地位におきたるが、三十年以後は内容方面に着眼し、思想を自由に發表せしむることに力を致せり。本書が文法上の繁簡の順序を逐ふに苦心せるはさることながら、後期の如く思想を自由に發表せしむるに力めたるは、時代に一步を先んじたるものと云ふべし。しかも後代の綴り方教授が形式方面を閑却する如き弊に陥ることなく、基礎教授にも十分の注意を拂へるを以て、この點に於ては寧ろ後代に勝れるものと云ひて可なり。

七

博士が日本文法書に於ても一新機軸を出したるは我が文法研究史上に看過すべからざる事なり。

明治三十二年九月、手島春治氏の名を以て公刊せる新撰日本文典の骨子は實に博士の考案に成れるものたり。

抑、我が文法に於て古來忽諸に付したるは發音法なり。本書は第一編音論に於て、父音母音結合圖、母音開合圖、音性、子音類別表、發音圖を示し、口竅の開閉伸縮等により發する母音子音を類

別して我が國民發音の標準を定めんとしたり。第二編詞論の第四章動詞の第一項に於ては語格を分つて直説格、分詞格、事情格、假説格、命令格、不定格の六種としたるが、中にも事情格を定義して或る事情を必ず然るものと約定し又は許容して次の事情に言ひつゞくる語法なりと云ひ、從來、已然言と稱すれども、世人往々已然の二字に泥み過去の語法なりと誤解するを以て新名稱を付して世の惑を解かんとせられたり。又假説格は從來將然言と稱するより只管に未來の語法なりと速断すれども、實際は接續詞「ば」を併用すれば動作形狀を假に設くる語法となり、助動詞「む」を併用すれば假想となり、「ず」を併用すれば打消となり、其の他、使役、受動等にも變すべし。これ博士がこの新名稱を付したる所以なり。元來我が文法上の術語は徳川の鎖國時代以來襲用せるもの多く、外國語とは何等の關係なくしかも組織的に形成せられたるにあらざるを以て、現代青年には甚だ難解のものたり。博士の定めたる新名稱によれば、初學者に惑を起さしむる患なくして記憶し易く、且つ外國語を學ぶ際能く兩者の關係を密にし、國語の文法はやがて外國語を學ぶ手引ともなるべし。第四章の第二項に於て作用詞を第一種より第九種までに分ちて、四段活、上二段等、從來の名稱を廢したるは、慥に新時代に適應したるものなり。四段活以下の術語は外國語を學ぶ者に必用なき術語にして、外國人の邦語を學ばんとする者に取つては最も難解のものとせらるればなり。同章第五項に「動詞の語勢並に其の助動詞」の一節を設け、語勢を常態、受動態、令動態の三つに分ち、作用詞の自動、他動と動詞の語勢との關係を詳説表解せしは、また異彩を放てるものなり。能意の

受動態、敬語の受動態、敬語の令動態の三態及び令受動態、被令動態（最敬語態）を例示し詳説して、作用詞の自・他と動詞の語勢との關係を表示せり。

第三編文論の第三章結法は文法を論理的に取り扱ひ、文法の科學的解剖を試みたるものにして、舊來の説に比して數段進歩せるを見るべし。第一直説格の結法は尋常の結法にして、從來「は、も、徒」の結といへるに相當すれども「は、も」によつてこの結び法を起すものにあらずとして之を排し、文意終止落着したる尋常の結法に過ぎずと解説せり。

第二分詞格の結法は從來「ぞ、なん、や、か」の結びと云はれたるものなり。何故に直説格にて結ばずして分詞格にて結ぶかといふに、文中にある「や、か」は疑問の意を含めるものなるを、直説格にて結びたらんには疑問の意を失ひ文意も調はざるべしとして「いづれか歌をよまさりける」等の例を挙げ、最後に「分詞格は其の下にある詞によつて其の意落着するものなるに、若し此等の詞なき時は其の意落着せず、尙言はんと欲して言はざるもの如く、言外に無量の餘情を含むこととはなるなり」と斷じ、歌人の慣用せる所以を辯證せられたり。

第三事情格の結法といふは舊來の「こそ」の係結に相當せり。まづ「こそ」の文中に添はる時、其の文末を事情格にて結ぶを云ふと定義し、この格は事情のみを擧げて他は總て之を言外に含めたるを以て一語千鈞の力ありとて、袖こそにほへ等十數種の例を擧げて其の用法の妙味を比較解説せり。以上三種の係り結び法の外、第四命令格の結法、第五關係の後置詞の結法、第六指示の後置詞の

結法、第七疑訝の後置詞の結法、第八感歎詞の結法等を挙げ、幾多の例をあげて一々解説を試み、舊來の説に従はば文法上の誤解より文意の解釋を誤ること多き所以を辯證したり。

本書の最終に掲げたる和英對照術語表は、本書編纂趣旨のある所を首肯せしむるに足るものにして、鎖國時代に作りたる術語と其の類を異にする所以を知るべし。邦語を學ばんとする外人、外國語を學ばんとする邦人に向つて最も適當なる文法書にして、世界に於ける日本語の文法書として最も進歩したるものと云ふべきなり。されどこの書は餘りに斬新なりしがためか、文部省の檢定を通過せず遂に世に行はれざりしは惜しむべきなり。

八

博士は習字教授法についても、改良の先驅たりしなり。「習字教授案」は、東京師範學校に就任後、直ちに立案實施せられ、明治十五年、時の學校長高嶺秀夫氏に提出せるものにして、明治二十年米國留學中公刊せる所なり。緒言の劈頭に於て、先づ習字教授の目的を論じて曰く、

凡て技術は必要に起りて終に飾となる。習字も技術にして其の高尙美妙の點に至つては飾に屬し、所謂美術の範圍に入るべきも、其普通思想運搬の媒としては人世缺くべからざるものなり。小學普通の課業として教ふる所の習字は固より必要を旨として高尙美妙の書家を作るの目的にあらず云々

と。其の二節に習字科の改良を要する諸點をあげ、第一、大字を廢して専ら細字を習はしむべく、第二、楷書、草書を廢して専ら行書を習はしむべく、第三、習字教授法は文字の分解結合の順序を逐ふべく、第四、手本及び草紙を改良すべく、第五、用具姿勢執筆に注意すべしとし、全然因襲を打破して根本的革新をなすの必要を唱道せられ、次代に一大感化を興へたり。三節以下は寧ろ本論と云ふべく、微細に習字教授の方法を述べたり。今習字手本に關する一節を左に引用せん。

元來手本は習字に必要なものにあらずして時としては却つて有害なることあり。蓋し教師が手本に依頼して生徒を手本に放任し去ること今の通弊なり。是れ教師に向つて大に責むべき懈怠又は謬見にして、若し……此の過に陥らしむる恐あらば完く手本を用ひざるを宜しとするなり。……手本は元來被働を勸むるを主意としたる者なれば……生徒は只被働是務め終に手本の奴隸となりて天性備はりたる手指の自由も手本の爲に束縛せらるるに至らん。……人々固有の字形を爲すは其心の働の千殊萬別なるに由るものにて自然の勢なれば此の勢に逆ひ數百の生徒をして同一種の手本に倣ひて之を眞似せしめんとするは理なき業なり。……教師たるもの一向に手本に訴へて生徒を束縛せんとする勿れ。自由に各生徒の嚮ふ所に任せよ。唯筆の運用法に協ひ字の結構に誤なくば、乃ち各自固有の字形に習熟せしむべし。人々固有の文字は神聖なる天の賜なり。以て己の代表となし以て己の信を保するものなり云々

と。是等は習字教授のみにあらずして劃一主義に陥れる當時學校教育の通弊を警めたるものと云ふ

べし。しかも教育上の個性尊重主義自働主義を懲憊せしは明治後半に於ける教育思想の先驅と云ひて可なり。

九

小學校歴史教授改良の第一聲が、史學界の巨人によつて叫ばれしは、歴史教授界の一大福音たりしなり。當時歴史と稱せらるゝは、年代記にあらざれば戦争物語に過ぎず。古代を詳にし、近世を粗にし、國民教育の要旨に副はざること甚だ遠きものなりき。博士は明治十六年十一月、十二月及び十七年二月、三月の東京茗溪會雜誌上に、「小學校歴史科に關する一考案」と題する論文を公にせられ、歴史教授の目的を論じ、教材の選擇排列の標準を示したり。文部省は新時代の新歴史教科書を要望すること切なるを見て、明治二十年賞を懸けて小學校日本歴史教科書を民間に募り、同時に小學校日本歴史編纂旨意書を公にせり。當時英國留學中の博士は、「小學歴史編纂法」の一書を公にして、文部省編纂旨意書を論評し、其の間、博士が四年前に考案せし所と寸分の差違なきを例舉し、博士の得意紙面に溢るるを見るべし。

博士の歴史教授改良に關する意見は大要左の諸點に歸す。

第一、從來の歴史教材が帝王記若しくは忠臣賢相の言行録に偏することを不可とし、(一) 仁君英主の事績 (二) 執政の更迭及び政績 (三) 外交外戰 (四) 内亂 (五) 文學宗教技藝附學者

僧侶 (六) 風俗 (七) 忠臣賢者英雄の傳等を包容し、國民文化の發達の徑路を知らしめざるべからずと論じ、實例を擧げて解説を加へたり。

第二、從來史實を天皇順に列記するに止まるを排し、(一) 上古 (二) 藤氏 (三) 源平 (四) 北條 (五) 南北分立 (六) 足利 (七) 群雄割據 (八) 豊臣 (九) 徳川 (十) 維新 (十一) 現時等の時代區分をなすべしとせり。かくて歴史教材は史的發展の次第によつて排列せられ、茲に始めて國史の體を得たりと云ふべきなり。

第三、歴史教授材料を選擇する上について注意すべき要項として、(一) 遠を略し近を詳にすべきこと (二) 神代の事 (三) 事物の解明 (四) 外國の事の四條を擧げ、一々實例によつて解説せり。何れも時弊を救ふべき刺戟劑ならざるはなし。

第四、歴史教授用具の必用を述べ、圖畫に於ては人物、戦争、物品、建築、都邑並に著名なる事績等を網羅すべく、地圖に於ては、沿革圖、現代圖を使用すべく、又年表及び帝王系統表等を利用して歴史教授の徹底を期すべきことを唱道せり。

文部省の懸賞に應じて其の選に當れるは神谷由道著小學日本歴史(二冊)なり。今日より見れば幾多の批難すべき點あるのみならず、博士の理想も十分實現せられたるものにあらざるべしと雖も、慥に歴史教科書に一時期を劃せるものなり。

博士は又文部省の命を受けて中學校に於ける日本歴史教授要目を作製せり。明治三十一年四月文

部省の公表せるもの即ち是なり。其の後多少の修正ありしかども、現行の教授要目は大體之に準據せるものなり。

要するに明治時代の新歴史教科書の體裁は、全く博士の創意に出でたるものにして、明治教育史上に不朽の名を留めたるものと云ふべし。

一〇

明治初年、我が邦人の研究甚だ幼稚にして、我が國史に關することも往々西人によつて先鞭を着けられ其の後塵を拜する有様なりしは、我が學界の一大恨事と云はざるべからず。然るに、獨特の識見を以て眞史學を建設せんことを期したる博士は、眼中、内外人の差別なく歐米心醉の時流に超越して敢然學問の獨立を叫び、チャンパーレンの研究に對して忌憚なき批評を加へ、我が學界の爲に萬丈の氣焰を揚げ我が學徒をして快哉を叫ばしめたり。

はじめ東京帝國大學文科大學メモアルス第一號がチャンパーレンのアイヌ研究を發表するや、一人の敢へて批評を加ふるものなきに、ロンドン在留中の博士は、東洋學藝雜誌の明治二十年十二月號に「我國の土蠻に就てチャンパーレン氏の説を評す」の一文を寄せられたり。全編を通じて論法頗る鋭く精兵敵の虚を衝くの概あり。博士は先づ占氏が白野夏雲氏の説を未熟説に過ぎずと云へるは誣妄も甚だしとなし、彼をしも未熟説と云はゞ占氏の所論も亦同類ならずやと報い、我が學界に公

認せられたる白野氏の説を湮滅して新説の譽を外人に與へんとするは公平ならず又學問獎勵の法にあらずと憤れり。西洋心醉者に對する頂門の一鍼にあらずや。

博士は進んで占氏が日本全國の地名をすべてアイヌ語に牽強するの不可なるを論じ、アイヌ以外の土蠻、土蜘蛛・熊襲をアイヌの一種族と見做すの粗漫非理なるを難じて非科學的想像なりと斷じたり。更に占氏の我が神代記とアイヌの言傳とを比較したるに論及して、比較の結果は彼我の神話の全然相關係する所なきを證するに過ぎずと斷じ、占氏が記紀に載する所盡く架空の想像なりと云へるに對しては、記紀編纂の事情を悉くし、眞實と想像との交錯せる所以を明かにして之が甄別には科學的研究を要すとなし、議論縱横爬羅剔抉占氏の所説をして完膚なからしめたり。又占氏が我が古傳を嘲笑せるに對し之を駁して曰く、

開闢の事などは吾等に取つてこそ妄想なれ。古人に取つては甚だ淺少なる知識より斷定したる發明なり、卓見なり、云々。

と。傳説解釋上、千古の鐵案といふべし。

博士は又外國史との比較研究を必要なりとして曰く、實に息氣長帶姫の姫御子は亞細亞東方のセミラミス、三國の古史之を證する上は全く架空の人物にあらざるべし。

と。語詞簡なれども蘊蓄深しと云ふべし。

博士は百尺竿頭一步を進めて、占氏のトミ彦のトミはアイヌ語のツミ(軍)兄猾のウカシはアイヌ語のエカシ(長者)の意なりと解釋せるを反論して曰く、

若し人あり、名草戸畔のトベはポリネシア語のツブ(王)、猪祝のハフリはポリネシア語のパバ又はババレ(酋長)なりと云はんに、誰れか其の然らざるを證し得ん。

と。前段論法の鋭きに反し巧妙なる比喩を以て論結に代へたり。曰く、

尙ポリネシア語の我が國語に似寄れるもの少からずと雖も、深入りせば我も亦狂人を逐ふ不狂人の觀をなさん。

と。是に至つて占氏は論外に放ち去られたるが如きの觀あり。

全編を通じて七千餘言に過ぎざれども、堂々論陣を張り理路井然、敵に肉薄して寸隙を與へず、しかも一の非禮あらず論駁文としての上乗と謂ふべし。

博士は明治二十二年に至り「上古の事蹟を記せる史籍のこと」と題して古事記、舊事記、日本書紀、古語拾遺等の諸書につきて解説を試みたるが、中にも記紀の内容を解剖して十二種に分類せる如きは、解題と云はんより寧ろ傳説の科學的研究と云ふべく、蓋し占氏に對する批評の論據たるものなり。

考古學は近世新興の學問にして我が國にては明治十二年米國人モールズが大森介墟を發見せしに端を發したり。博士は最も早く之に着眼し考古學を科學的研究の上に築き、國史學に新生面を開きたり。明治十九年、日本史學提要第一編を公にしてまづ緒言に於て、歴史は社會文明の進路を討尋する學なりと云ひ、其の資料は書籍のみに求むべからずして古代の遺物遺蹟によるを要すと説き、太古の器物と云ふ一章を設け考古學界に曉鐘を傳へたり。博士は又一國文化は土地氣候風土等の自然現象に支配せられ、一國民の歴史は周圍の諸民族諸國家と關係するものなりとして、人類學の研究を提唱し、當時國史學者の夢想せざりしタイラー、ヅカートルファージ、ラボック等、歐米の新研究を引用し、又蝦夷、土蜘蛛、熊襲等の先住民族につきて記述し、先人の試みざる所に向つて開拓に努められたる如き、當代第一の先覺者と云ふべし。

博士の創見の一は東西藝術の關係を道破せしことにあり。蓋し博士は科學的研究の範を泰西に取り、しかも徒らに西人の蹤を逐ふことなく、獨特の識見を以て、我が日本の藝術と印度・ペルシア・アラビア等のそれとの比較研究を遂げて文化東漸の徑路を立證したり。法隆寺所藏の四天王紋錦旗、バクトリアの歴史、迦膩色迦王の貨幣、ガンダラの佛像、古代の金屬等の諸論文は、我が藝術の西洋藝術と密接なる關係あることを論證したる世界的論文なり。されば一九〇二年(明治三十五年)佛國パリのギメー博物館(Musée. Guimé)のデー(Deshayes)は、埃及のアンチノエ(Antinoë)に發見せられたる絹織物の模様につきて博士の所見を求め來れり。以て博士の研究が泰西に影響する

所あるを知るべし。古代歐亞大陸交通考は歐亞關係を研究せる餘瀝なるべし。

博士が考古學界の先覺者として權威ある論文を發表せしこと一再に止まらず、明治二十七年の人類學雜誌には「日本上古の焼物」三十年の考古學會雜誌には「上古の焼物の名稱」を發表し、延喜式等の古書に見えたる焼物の名稱に基づきて上古に於ける陶器と土器との區別を明かにせしが、我が陶器の遺物に關する分類法とその稱呼法とは之に由つて定まり、今日考古學者間に行はるゝ學術的用語は概ね博士のこの論定に據れるものなり。又三十年の考古學會雜誌上に發表せられし「古鏡」も古鏡各部の名稱を一定し、後の考古學者の襲用せる用語を提示せるものなり。ついで翌年の同誌上に掲載せる「高麗古碑考」は從來の學者の研究に一步を進めたるものにして、之によつて是迄誤讀せられたるものは改訂せられ、解し難しとせられたる文字の解せられたるもの尠からず、金石文の研究として學界に甚大の裨益を與へたり。三十二年以後の考古學會雜誌に連載せる「探古考證雜抄」は頗る創見に富めるものなり。中にも「最古の金石文」の題下に辛亥の銘ある法隆寺傳來御物金銅佛の年代を論證し、從來の崇峻天皇四年説を誤りとして新に孝德天皇白雉二年説を唱へたる如き、「斑鳩篇」の題下に法隆寺東院緣起資財帳につきて解説し、法隆寺緣起資財帳等と對照せる如き、「小野朝臣毛人の墓志」「宇治橋碑」を解説したる如き、何れも斯界の權威たらざるはなし。

我が國考古學の發達は博士に負ふ所甚だ大なり。嚮に人類學會幹事として同雜誌の編輯に従事すること二年有餘に及びしが、明治二十八年に至り、下村三四吉氏等と考古學會を創立し、翌年六月、機關雜誌を發刊するや、博士専ら編輯を擔當し、まづ考古學會趣意書を公表せり。實に考古學の基礎的概念を述べたるものにして、科學としての考古學はこの時に建設せられたりと云ふべし。三十年五月には評議員に選ばれ幹事となり、翌三十四年三月、考古學會々長に擧げられ、引き続き現今に至るまで我が考古學界を指導するの地位に立たる。

博士はまた考古學の發達について常に注意を怠らず、明治二十三年八月號の人類學雜誌上に「古物學の進歩」と題して西洋の史前古物學を紹介し、同誌十月號の第六年會編輯事務報告には我が國各地の石器、銅器其の他の新發見を詳説し、二十四年及び二十五年の十月號に載せたる第七、八年會編輯事務報告には、堅穴、古墳、棺槨、横穴並に銅石器の新發見を詳説せり。三十年七月の考古學會雜誌には「本邦に於ける史前及び舊辭時代、考古學の進歩」について述べ、四十年十二月號には「我が國に於ける考古學の進歩」と題し、第一、材料の穿鑿蒐集、第二、材料の形質調査、第三、材料の比較、調査、第四、補助調査の四項に分つて研究方法を述べ、大正六年八月號には「日本考古學發達の概略」と題して寛永寛文時代の國史編修、元祿享保時代の考古的研究より享保以後に於ける歐洲文化の影響に説き及ぼし、何れも學徒の詳讀に値するものなり。

東西藝術の關係を研究せる博士は、更に又古代西域研究の氣運を我が學界に導きたり。市瀬某の

史學雜誌上に「大食國考」を發表するや、博士は明治二十五年の同志上に「讀大食國考」と題し、其の所論の杜撰にして考證の疎漫なるを指摘して、大食國はタヂック (Tadjik) にあらずしてタージ (Tadj) 又 (Tazi) 即ちアラビヤ人なり、康石は一國の名にあらずして康はサマルカンド、石はタシケントなりと斷じ、大秦はローマ帝國、拂菻は東ローマ帝國即ちビザンチン帝國にして、突騎施は吹河(古の素葉水)地方にありとして、普く泰西の東洋史家の説を例証せり。市瀬某の之に對する駁論に對しては二十六年同志上に「大食國考につき答辯」と題し、一々典據をあげて能く論者を首肯せしめたり。當時西域が殆ど我が學界の問題に上らず、西人の所説も未だ我が國人に知られざる當時にありてかゝる論著ありしは、斯學研究上に一大光明を與へたるものと云ふべし。

明治二十五年の史學會雜誌上の「漢委奴國王印考」に於ては、委奴を以て怡土に擬せる從來の説を誤れりとして、倭の奴(奴は即ち難の縣にして今那珂郡なり)の國と訓むべしとの新説を唱へたり。この鐵案は齊しく史家の認むる定説となり、考古學的研究が倭漢交通史に投げたる探照燈たりしなり。

博士は早くより日露交渉史を研究し、其の草稿は上、中、下の三卷に分たる。明治三十九年及び四十一年の「歴史地理」に發表せる「ベニヨウスキ」「林子平と古川辰」及び明治四十五年の「帝國教育」に發表せる「最上徳内と近藤重藏」は其の數節に過ぎず、ベニヨウスキは明和年間、アウス又はハインペンゴロウの名を以て我が國に聞えたる者の事蹟を探究せるものにして「林子平と古川辰」は林子平の所罰は白河樂翁が古川辰に誤られたる結果なることを論じ、何れも新史實を世に紹介し史學

大家の稱賛を博せり。

博士は世の所謂術學の徒にあらず、蘊蓄する所深くして而も容易に發表せざれども、苟も一たび發表するや、博引旁證論じて餘蘊なし。若しそれ薄弱なる根據を以て博士を論駁するものあらば、鋭鋒益、鋭く敵をして遁路なからしむ。又他面に於ては博士の公正なる學者的態度の敬仰に値するものあり。先に史學提要第一編に於て横穴は穴居の遺蹟なりと論ぜしが、二十三年に至り、其の説の誤れるを悟り、「横穴は葬坑なるのみ」の一文を草して其の理由を論證し、斷然舊説を棄てられたり。尙史學上の論文は「文學博士三宅米吉著述集」に網羅せるを以てこゝに省くべけれども「年代考と國體」と題する小品文は史學の定義ともるべきものなれば、其の一節を左に紹介せん。

史學は學問中の學問にして過去の世態、過去の人情、過去の文學、皆歴史中に在り。史學は實に他の學問の基礎として人々の必ず修むべきものなり。殊に我が國の歴史は我が國民の何を措きても先づ第一に修むべきものにして、帝國を愛し尊ぶの念、王家を尊奉し古賢を追慕するの情、皆國史に因て之を心裡に固着せしむべきなり。國民をして國を愛するの念を起さしめんとならば其の國史を愛讀せしむべし云々。

かく博士は史學、考古學に於て許多の權威ある論著を公表せしが、明治三十四年四月文學博士の學位を授けらる。博士と同時に學位を授與せられしは、西村茂樹、木村正辭、小杉楹邨、那珂通世、萩野由之、松本愛重、三宅雄二郎の諸氏にして、高齢に達せる人多かりしが、博士は時に四十三歳なり

しなり。大正十四年六月勅旨を以て帝國學士院會員仰付られ、學者として最高の榮冠を得られたり。

一三

學界の耆宿一世の師表たる博士は、帝室博物館にも重用せられ、明治三十一年十月より大正十年十二月まで二十四年間の永きにわたつて歴史部の重鎮たり。初め明治二十一年宮内省は、圖書頭九鬼隆一氏の建議に基づき、臨時全國寶物取調掛を置き、濱尾新、黒川眞頼、岡倉覺三、高村光雲、米國人フェノロサ等を委員とし、九鬼隆一氏其の長たり。この年五月、九鬼隆一、濱尾新等寶物取調の任を帯びて、京都奈良地方に出張し、博士其の一行に加はり、親しく我が古美術に接し、是より屢この地方に遊び、美術鑑査の眼識愈々高く、明治二十三年一月、帝國博物館列品取調を依囑せらる。二十八年一月帝國博物館學藝委員仰付けられ、三十一年二月臨時監査掛を命ぜらる。先に宮内省内に置かれし臨時全國寶物取調掛廢せられ、其の事務は博物館に移管せられしを以て新に臨時監査掛を設けられたるよりこの命あり。監査會は九鬼總長議長たりしも、間もなく博士、議長代理として事を決するに至れり。

同年十月には歴史部長心得を命ぜらる。初め歴史部長高嶺秀夫辭任し、黒川眞頼部長心得となりしが、病の故を以て、博士其の後を襲へるなり。明治三十三年、佛國博覽會の開かるゝに先だち、帝國博物館は、其の委囑を受けて、日本帝國美術略史を編纂せしが、博士は黒川眞頼、伊東忠太、

今泉雄作、小杉楹郵等と共に、之が編纂に與り、三十二年に至つて成れり。三十三年三月、帝國博物館は、邦文帝國美術史編纂の舉あり、福地復一、安村季當等を委員とし、博士を其の委員長に任じたり。この年帝國博物館の官制改革あり、東京帝室博物館と改稱せられ、股野琢總長となり、博士は歴史部長に任ぜられ、四十一年一月、帝室博物館評議員に擧げられたり。後大正三年九月に至り、帝室博物館分課規程定められ、新に歴史課長兼天産課長を囑託せられ總長就任の直前まで繼續したり。この間、博士は日本古美術の研究に没頭し、造詣益々深く、鑑識愈々高く、政府は古社寺保存委員を命ずるに至れり。夫の四天王紋錦旗・佛像・鏡鑑等に關する研究が、何れも其の源流に溯つて印度、波斯、アラビア等の關係を尋ね、日本古美術が世界的地位を占むる所以を立論したる如きは、當時の美術家を驚かしたり。實に是等考古學上の諸論文は一面より之を日本美術史上の論文と見るを得べく、博士の美術史上に遺せる功績亦没すべからざるものなり。

明治天皇御登遐後、臨時帝室編修局の宮内省に新設せらるゝや、博士は大正三年十二月を以て、編修に任ぜられ、明治天皇御記編纂の事に參せり。されど、大正八年、校務繁劇の故を以て、辭表を呈し、十二月十一日聽許せられたり。大正十一年八月帝室博物館總長に昇進し、翌十二年八月總長を免ぜられ、同時に宮中顧問官に任ぜられ、以て現今に及べり。この間、博士の功勞を嘉賞せられ、天皇后兩陛下より金品を下賜せられしこと一再に止らず、博士の皇室に對する忠勤の至誠は雲上に達してかゝる恩賞ありたるなり。

一四

博士の溫情に富める風貌、寛宏なる襟懷は、眞に理想的教育家たる態度と云ふべく、殊に京都奈良地方の研究旅行は、教育家としての博士の一面を窺ふに足るべし。生徒と起居を共にし、親しく之を指導し、不言實行、一に至誠を以て終始其の行動を律せらる。二、三週間の旅行長からざれども、其の習得する所量り知るべからざるものあり。この間、博士能く各生徒の長短を看破して正鵠を過たず。生徒皆爛眼に服す。しかも平素の寡黙なるに似ず、諷刺諧謔時に口を衝いて出て、言々人の肺腑を貫くものあり。諷刺罪なくして、聴くもの以て誠となすに足る。生徒皆曰く、幾回の聽講に列する能はざるも尙償ふことを得べけん。一回の旅行に參せざれば、終生の恨み、消すべからず。と。奈良旅行は、元來寺院佛像の拜觀を以て終始す。一生會て曰く、「如來是先生か、先生是如來か。」と、旅行中に於ける感化は、無邊無量如來に比すべきを云ふなり。博士又この旅行を以て、最終の責務とせらるゝにや、明治二十五年第一回の旅行ありて以來、未だ會て休止せしことあらず。たゞ大正八年、母校昇格要望の第一聲を擧げて以來、毎冬、帝國議會開會に先だち、陞格促進の運動あり。博士一日も東京を離るゝ能はざる事情あるを以て、果さざること數年、大正十三年以來復興して現今に及べり。關西の風俗、三十三度登山記念標を立つと聞く。博士の三十三度記念標を立つる、蓋し遠きにあらざるべし。

一五

大正八年十二月三日に突發せる高師陞格運動は我が學校五十年間の歴史に於て特筆すべき大事件なり。この日、午後五時、生徒大會開かるゝや、茗溪會主事亦之に參し生徒七百堂に滿ち、生徒及び卒業生交、立つて熱辯を揮ふ。曰く、陞格？ 廢校？ 起て七百の健兒。曰く教育尊重、精神文化の宣揚。曰く不發の爆彈を投ずる勿れ。曰く熟慮斷行せよ。曰く妥協を排せよ、猛進せよ。曰く矢は既に放たれたり。と。舌端火を吹き意氣軒昂。即座に「吾人は東京高等師範學校を大學に陞格せしめんことを期す。」の決議案は大喝采を以て可決せられたり。

翌四日、急遽教授會を開き陞格の達成に努力せんことを決し、委員十四名を選定し博士其の委員長たり。五日の生徒大會に於て教授會の決意を宣明せり。博士の聲高からざれども力あり、牢乎たる決心は眉宇の間に見はる。熱烈なる眞情は能く青年の意氣に合し、冷靜なる理智は前途に確信の光明を與へ、理想を以て現實を導き、過激を戒め因循を鞭ち、生徒をして大磐石に座するの思ひあらしむ。恰も三軍に司令する元帥の觀ありき。

この日、茗溪會は委員會を召集し教授、生徒と協力して目的の達成に驀進すべきを決し、實行委員十七名を擧げ川村理助氏委員長たり。茲に所謂三派合同（當時教授、生徒、茗溪會の三團體を三派と稱したり）成立し、教授會、茗溪會は殆ど同時に陞格理由書を公表したり。

爾來大會を開くこと屢次。一回は一回より一日は一日より熱烈となれり。全國の茗溪會員、或は長電を送り或は代表者を派して慰問激勵する所あり、實行委員等當局者を歴訪して陳情、これ努め、殆ど寢食を忘れて陞格の實現に盡力したり。

十五日博士は嘉納校長と共に中橋文相を訪ひ會談三時間に及び、遂に文相より

一、普通教育及び師範教育の改善向上につき自分は十分の努力をなしつつあり。

一、教育者養成の爲め其の最高機關として大學を特設せんとする希望は好意を以て之を聞き取れり。然れども之に對する當局の意見は今日明言すべき時期にあらず、高等の諸學校組織變更に關しては文部省に於て目下總體的に調査中に屬す。

の言明を得て歸り、同日午後七時第五回生徒大會を開き、嘉納校長之を公表し、代議士三土忠造氏は「諸君の行動は之を不當なる團體的運動と認めない、この上は校長及び三宅教授に信頼して目的を達成すべき時期を待たれたい」と述べ、博士も「余は三土氏の或る確信を有するを信ずるものである」と言明し、十二月三日以來不眠不休の努力は茲に一段落を告げたり。

かくて陞格の實現は漸く持久の策を執るの已むなきに至り、前途益々多難となれり。今や陞格の事たる一高等師範學校の問題にあらず、又學制是非の問題にもあらず、重大なる政治問題政黨問題となれり。是より先、大正八年七月、時の文相、突如嘉納校長に隱退を迫りしかば、博士等愕然として急遽教授會議を開き、まづ全教授の態度を決し、博士は吉田彌平氏と共に教授を代表して文相

を官邸に訪ひ、まづ嘉納校長の功績を賛して文相の反省を求めたるに、文相大に悟る所あり、教授等の希望を容るべき旨を答へたり。越えて一日、文部次官、嘉納校長を招き「先日の事は水に流してくれ」とて前言を取消したり。博士の事に臨んで斷あり威武も屈する能はざること概ね斯くの如し。されども時事非にして大正九年一月に至り、嘉納校長は遂に挂冠したり。博士其の後任に擬せられたれども、博士は寧ろ講學の時間を徒費せんことを恐れて校長の榮冠を喜ばず、教授の職を兼ねるを得ば命を奉ぜんと答へしに、文部大臣は博士の意を諒とし、九年一月十六日を以て東京高等師範學校長兼教授に任じたり。其の新任式に臨まるゝや、左手に教授の辭令を捧げて曰く「余の生命は彼に在らずして此に在り」と。名譽と地位とを趁はざる博士の面目は、躍如として今尙眼前に髣髴たるものあり。爾來、陞格問題は紛糾に紛糾を重ね帝國議會の開會毎に全員出動して或は兩院議員に領解を求め、或は内閣大臣以下の努力を請ひ、或る時は陞格豫算成立に垂んとして九俣の功を一簣に缺き、或る時は絶望の淵に沈んで全員落涙せしことあり。博士が「職を賭して陞格の實現を期せん」と沈痛の一語を發したるはこの時なり。斯かる多難の時に際しながら、幾千の教授、生徒、卒業生整然として一絲紊れず、世の煽動に搖かされず、毀譽褒貶を顧みず、飽くまで初志を達せずんば已まざる意氣を以て終始せるは、全く博士の堅く所信を執り而して悠容迫らざる沈勇の能く人心を維ぐものあればなり。

大正十二年三月二十三日陞格豫算案貴族院に可決せられて茲に議會通過の時節到來し、昇格の希

望始めて達成せらるゝに至れり。然るにこの年九月一日關東大震災あり。政府は多くの新事業を繰延べ、我が校陞格は昭和四年度より實施せらるゝことゝなれり。陞格運動勃發以來實に十年なり。昭和四年四月一日、東京文理科大学開設せられ、博士は第一代の大學長に任ぜられ、教授學生均しく良學長を戴けるを悦ぶ。博士の學徳一世に秀てたるものあればなり。

一六

博士の著書及び學術上の研究論文については大略前に述べたるが、尙博士の公生活に關する經歷の一端を述べて博士が如何に教育上學藝上に貢獻せられしかを窺ふ料とせん。

博士は明治十四年三月始めて東京師範學校雇員となり、其の七月助教諭に任ぜられしが、十九年五月辭職し、七月金港堂編輯所取締役兼評議役となり、ついで米國及び英國に遊學し、在留二年にして二十一年二月歸朝し、直に金港堂編輯所長となり爾來小學校教科書の編輯を總裁すること前後七年に及べり。この間高等師範學校の囑託を受けて歴史科を擔當せしが、二十八年に至り、金港堂を辭して高等師範學校教授に任ぜられて現今に及べり。この間或は附屬中學主事となり。或は圖書館主幹となり。或は評議會委員となり又種々の臨時委員を囑託せられ、實に我が校の柱石たりしなり。文部省も亦教育上の新施設ある毎に多く博士を其の委員に擧げたり。中にも教科用圖書調査委員會委員には明治四十一年九月より大正九年まで前後十二年の長きにわたり、前には第一部主査とし

て起草を擔任し、後には第二部の主査、起草擔任をも兼ね、大正九年七月二十七日には其の功勞を思召されて旭日中綬章を授けられたり。初め文部省は教科書の制度を定め、專任編修四人を置きしが、明治四十一年九月に至り、教科用圖書調査委員會官制を定め、修身科を第一部、歴史科を第二部、國語科を第三部とし、第一部々長は山川健次郎氏、委員には一木喜徳郎、穗積八東、中島力造、森林太郎の諸氏之に任じ、博士は第一部主査委員として吉田熊次、森岡常藏二氏と共に起草を擔任したり。これより起草會あり第一部會あり總會あり毎週少くとも二回文部省に出務して専心修身教科書の編纂に従事せり。既にして明治四十四年三月六日、第二部主査委員兼務を命ぜられて同じく起草を擔任し一層繁劇を加へたれば、本校圖書館主幹を辭せり。是より先、文部省は國定教科書編纂の方針として、南北兩朝を同一とし其の間に正閏の別を立てざることゝせしが、明治四十四年二月、南北朝正閏問題大に起り、輿論は南朝正統説を主張し、新聞雜誌は筆を揃へて文部省を攻撃し、衆議院には内閣大臣の責任をさへ問はんとするものあるに至れり。是に於て文部省は急遽議を決し國定教科書は南朝を正統とすることゝし、まづ新に皇統御歴代表を作製したり。この年十月に至り文部省の名を以て公示せる皇統御歴代表即ち是なり。抑、南北正統論は遠く北畠親房の神皇正統記に發したれども南北合一以後は朝廷の記録より公卿の日記に至るまで、盡く北朝を正統としたり。徳川光圀大日本史を編し、始めて南朝を正統とし、所謂三大特筆の一として大いに名分を正したるが、尙北朝を閏位と認めたり。然るに新御歴代表は全然北朝を御歴代より除き去り大日本史のなし得ざ

りし所を敢へてし、實に我が皇位正統論上の一大變革たり。これ恐らくは背後に偉大なる權威のあるればなるべし。此の權威ある新歴代表に對しては今後何人も私議を挟むべきにあらず。大義名分是に於て昭として日星の如し。

二月文部省の議を決するに及んで起草擔任委員文部省編修喜田貞吉まづ辭職し、第二部主査三上參次ついで辭し、田中義成もやがて其の職を去れり。是に於て文部次官岡田良平氏は自ら博士をその私邸に訪ひ、起草擔任を引き受けんことを求めしが、博士之を承諾し更に重田定一を文部編修に推舉し、新陣容を整へて歴史教科書改訂に着手し、幾十回の部會總會を経て論議を盡し、新御歴代表の趣旨によれる國定教科書修訂の業は、この年度内に完成公表するを得たり。この間に於ける博士の苦心想ふべし。

博士は明治三十年より四十三年まで前後十四年間、師範學校中學校高等女學校教員檢定臨時委員を命ぜられ、大正九年以來今日に至るまで同教員檢定常置委員たり。又或る時は教授要目取調委員となり、或る時は修身資料調査委員となり文部省社會教育委員となり、文部省の施設せる教育上の事業については殆ど關與せざるはなかりき。

文部省の教育評議會を設置するや、博士は其の委員となり、後に文政審議會の設けらるゝに及びても其の委員となりて學制上の議に參せり。その他、博士の公共事業に盡されし所鮮少にあらざるなり。大正九年以來斯文會理事祭典部長に擧げられ、大正十二年の大震火災に際し聖堂の烏有に歸



するや、聖堂復興期成會理事として今尙盡瘁せられつゝあり。これより先、明治二十七年帝國教育會雜誌編輯委員となりしが、日露戰役に際しては「戰時に於ける國民の心得」、「戰後に於ける國民の心得」を草し、また「聖諭略解」、「戊申詔書述義」等の編述委員となりて聖旨の貫徹に努められたり。

一七

人格崇高にして襟懷寛宏、温乎たる風貌、靄々たる和氣は恰も貽蕩たる春日の如く、寡黙にして冷靜、毅然として犯すべからざるものあれども、秋霜烈日の嚴厲あらず、雄辯滔々談論風發の人にあらざれども論鋒鋭く、言々句々、肺腑を貫き至誠人を動かすものあり。谷本博士曰く「靜中動あり」と。畢竟不言實行の人なり。不斷の日記三十年に及ぶを見て之を知るべし。天の成せる美質は刻苦努力と誠懇忠實とによつて益々光輝を發せり。人を誨へて倦まず、生徒の爲に勞苦を厭はず、愛すれども偏せず、罰すれども憎まず、無言の教訓、生徒をして思はず襟を正さしむ。

一生曰く、

威愛並び行はるゝ先生の人格は先天的に理想的教育家なり。

と、他生曰く、

孔子は宰予の晝寢を戒めたり。先生は晝寢せざる様に生を導かれたり。先生豈に萬世の師にあらずや。

と。博士の寛容は海の如く濶く、其の高徳は山の如く高し。人孰れか嚴父として敬し慈母として親しまざらんや。博士の先輩曰く、

迎合もせず、長者に不遜傲岸の風なし。

と。他の一人曰く、

三宅君は良い所ばかり發達した人。

と。博士の學と才とは極めて多面的なり。學者にしてしかも世情に迂遠ならず、實務家にしてしかも超世間的學究を樂しむ。科學的頭腦を以てして且文藝の趣味に富む。この故に學者として教育家として美術鑑識家として社會改良家として到る處可ならざるなし。然れども博士の博士たる所以は史學界の權威として教育界の耆宿として斯道に貢獻せられしに在り。天資英敏にして學を好み、十三歳にして慶應義塾に入り忽ち穎脫す。十七歳義塾を去つてより自力自成獨學獨修是れ努む。二十二歳我が校に就任し日夕書庫にありて手に卷を釋てず、國史、國文、東西洋史、倫理學、教育學を涉獵し博覽洽索殆ど遺す所なし、虛名を逐はず博學を銜はず。されど崑山の璞は空しく埋没するものにあらず。假名主義の首唱者として國語國文界を警醒せられたるは二十四五歳の頃なり。日本史學提要第一編を著して史學建設の第一聲を擧げしは二十七歳の時なり。教育改良家として名を天下に馳せしは而立前後なり。齡不惑に達しては史學界の巨人、考古學の泰斗として先人未發のを見を立て、緻密なる頭腦犀利なる炯眼は眞理の牙城を突かずんば已まざる概あり。學東西を該ね識古今

に通じて八面玲瓏四圍照破せざるはなし。齡耳順を過ぎて東京高等師範學校長となり古稀に及んで東京文理科大學長となり、今や大成圓滿學殖深厚教化廣遠、眞に一世の師表たり。記して此に至れば、秃筆自ら鈍るを覺ゆ。文學博士白鳥庫吉氏の嘗て草せる三宅博士小傳は能く博士の平生を描寫せり。今、其の一節を引用して結尾の辭とせん。

思ふに博士の人格は今や圓熟せり。人の卒然として博士に面するものは先づその默々として語なく、口を開くも低聲微音や、もすれば辯じ難く、人事に於て與り知らざるが如き狀あるを感ずべし。沈着にして寡言、動止靜肅にして喜怒哀色にあらはれざるは博士の特色なればなり。然れども語ること久しきに及べば其の内に蘊むところ深くして外よく世態人情の機微に通じ、自ら持すること謹嚴にして人に對すること溫厚なるを悟り、和氣おのづから堂に滿つるを覺ゆるに至るべし。余等後生は親しく博士の此の圓熟せる人格に接して其の徳を仰ぐを得るを以て至大の幸福とせざるを得ざるなり。

博士の嚴父榮充翁は明治維新後各地に仕官し殊に司直の府に入りて令名あり。明治四十三年二月逝く、年七十二、夫人里子は群馬縣高崎の士族反町慎行氏の長女、明治十七年十九歳にして博士に嫁す。貞淑にして内助の功多く、子女の庭訓、家政の整理、一に夫人の手に頼る。博士をして内顧

の憂なく専心講學研究に従事するを得しめたる夫人の功は偉なりと云ふべし。夫人資性柔和にして
溫情に富み、上に謙り下を慈む。曾て老婢二人あり、夫人に事ふること二十餘年、其の一人は外出
の途次、卒中にて倒れしが其の後事を營まるゝこと家人に異ならざりき。夫人レウマチスを患ふる
こと多年、大正十五年三月十三日逝く、年六十一。

博士一男四女あり、男を晁あきといふ。明治十九年九月五日生る。大正十五年七月二十九日長野縣諏
訪郡豊田村牛山竹治郎氏の長女よしみを娶る。今、一女一男あり三千代と云ひ、昭一といふ。長女
香鹿、明治二十一年十二月十三日生る。四十二年五月醫師藤田寛氏に嫁す。五男二女あり。今京都
府宇治に住す。二女清子、明治二十三年五月十四日生る。大正六年十一月奉天醫科大學教授石井信
二氏に嫁す。一男あり。三女栲、四女勝、共に夭折す。

博士、今年齡古稀に達す。心身の健全にして記憶力の旺盛なること壯者を凌ぐものあり。希くは
今後永く邦家の爲に盡瘁あらんことを、筆を擱くに當り謹みて先生の壽福を祈る。

三宅博士年譜

年號	年譜	齡
萬延元年	五月十三日紀伊國和歌山城下宇治に生る。父君名を榮 <small>ヨシミツ</small> 充と云ふ。	一
文久元年		二
同 二年	八月十七日母堂直子歿す。隣家書師坂部氏に就き始めて字を習ふ。	三
同 三年		四
元治元年		五
慶應元年		六
同 二年	藩學學習館に通學す。	七
同 三年		八
明治元年		九
同 二年	父君に隨ひ伊都郡橋本に移る。	一〇

同 三 年	民政局參事草野政信氏に隨ひ有田郡湯淺に移る。	一 一
同 四 年	和歌山に歸り再び學習館に通學し傍ら某氏に就き洋算を習ふ。	一 二
同 五 年	三浦安氏に隨ひ東京に出て、慶應義塾に入る。	一 三
同 六 年		一 四
同 七 年		一 五
同 八 年	慶應義塾學則改正あり、尾崎行雄氏と共に諭旨により退學す。	一 六
同 九 年	父君に隨ひ新潟に移る。○七月十一日官立新潟英語學校英語教員心得となる。	一 七
同 十 年	二月官立新潟英語學校廢せらる○三月二日縣立新潟學校百工化學教場助手となる、教師中川謙二郎氏等に就き化學物理學分析術等を學ぶ○九月十一日英語學教場譯讀教員を兼務す。	一 八
同 十 一 年		一 九
同 十 二 年	一月七日新潟學校百工化學教場會中監事心得となる○一月九日英語學教場譯讀教員兼務を罷む○一月三十一日新潟學校百工化學教場會中監事となる○七月二十三日辭職、出京して草野政信氏の家に寄寓し舊藩主徳川家家扶上田章氏に就て漢文の添削を求め又徳川家の藏書を借覽して初めて國史を研究す。	二 〇
同 十 三 年	三月十日千葉師範學校教師となる。○七月二十二日千葉中學校教師となる○十一月二十五日千葉中學校會中監事兼千葉師範學校會中監事となる。	二 一
同 十 四 年	三月二日辭職○同月二十八日東京師範學校履教師となる○七月十六日東京師範學校助教諭に任ず。	二 二

同 十 五 年		二 三
同 十 六 年	七月かなのくわい評議員に擧げられ、雪の部取調委員兼編輯委員となり八月「かなのまなび」を創刊す。	二 四
同 十 七 年	七月かなのくわい評議役兼編輯掛となり「かなのしるべ」を編輯す○十一月十五日群馬縣高崎士族反對愼行氏の長女里子を娶る。	二 五
同 十 八 年	三月十六日、中學校師範學校英語科歴史科の教員免許狀を受く○七月「かなのくわい」書方改良部事務取扱となり「かなのざつし」編輯の任に當る。	二 六
同 十 九 年	此の年東京師範學校最初の留學生候補者に擧げられし故ありて果さず○五月三十一日東京師範學校規則改正ありて高等師範學校となりしにより自然廢官○四月十日書肆金港堂編輯所評議役並取締主務となる○七月教育事業視察のため米國に向ひ出發す。九月五日長子晁生る。	二 七
同 二 十 年	四月十六日ニューヨーク出帆クナード會社アンブリア號にて英國に渡る。	二 八
同 二 十 一 年	一月歐洲より歸朝○金港堂編輯所長となる○同月大日本教育會評議員に擧げらる○五月・六月圖書頭九鬼隆一氏に隨ひ臨時全國寶物取調委員一行と共に京都府及び和歌山、奈良、滋賀諸縣を巡視す。十二月十三日長女香庵生る。	二 九
同 二 十 二 年	八月京都奈良に出張す。	三 〇
同 二 十 三 年	一月二十七日帝國博物館列品取調を囑託せらる○六月京都奈良に出張す○十二月一日高等師範學校より當學期中日本歴史の講義を囑託せらる○四月東京人類學會幹事となる。	三 一
同 二 十 四 年	五月十四日第二女清生る。 五月二十九日高等師範學校歴史教授を囑託せらる○此の年金港堂書籍株式會社副社長となる。	三 二

同二十五年	七月高等師範學校生徒を率ゐ京都、大阪二府奈良、兵庫二縣へ研究指導旅行をなす○九月再び大日本教育會評議員に擧げらる○十一月東京人類學會幹事を罷む、尋いて中央委員となる。	三三
同二十六年	七月高等師範學校生徒を率ゐ栃木、福島、宮城、岩手の四縣へ研究指導旅行をなす○八月十九日神苑會委員を委嘱せらる。 二月二十五日第三女榜生る。	三四
同二十七年	七月帝國博物館陳列古物出所調査の爲岐阜、滋賀、京都、大阪、奈良、兵庫、岡山諸府縣下に出張す○十二月帝國博物館陳列古物出所調査の爲奈良縣へ出張す○十一月大日本教育會編輯委員となる。 三月十一日第四女榜生る。	三五
同二十八年	一月高等師範學校生徒を率ゐ、京都、奈良地方へ研究指導旅行をなす○一月三十一日帝國博物館學藝委員となる○四月十二日高等師範學校教授に任じ高等官六等に敍せらる○七月十日正七位に敍せらる○七月小石川區學務委員に擧げらる○七月京都、奈良地方へ研究指導の旅行（途中京都にて病に罹る）○三月二十六日金港堂書籍株式會社取締役及び編輯所長を辭す○四月下村三四吉等と共に考古學會を創設す○十月大日本教育會常議員に再選編輯委員となる。	三六
同二十九年	九月十日文部省圖書編纂審查委員となる○七月帝國博物館陳列古物出所調査のため福島、山形、秋田、青森、各縣に、十二月同上三重縣に出張す。 六月三十日第三女榜死す。	三七
同三十年	三月二十九日尋常師範學校、尋常中學校、高等女學校教員檢定委員會臨時委員を命ぜらる（爾後明治四十三年まで毎年同委員となる）○四月二十二日高等官五等に敍せらる○同月京都、奈良地方へ研究指導の旅行○七月十日從六位に敍せらる○九月十六日尋常中學校教科目調査委員を命ぜらる○十一月栃木、福島、宮城三縣へ研究指導の旅行○五月三十日考古學會評議員に當選し幹事となる。	三八
同三十一年	二月一日高等師範學校附屬尋常中學校主事となる○二月十二日帝國博物館臨時鑑査掛となる○七月京都、奈良地方へ研究指導の旅行○十月二十五日帝國博物館歴史部長心得となる○十月高等教育會議に於て高等女學校學課規定取調委員長に擧げらる。	三九

同三十二年	二月京都奈良地方へ研究指導の旅行○三月二十三日東京帝國大學文科大學講師を囑託せらる○四月二十一日帝國博物館鑑査委員仰付けらる○五月三十一日高等師範學校附屬小學校教務評議員を命ぜらる○六月三十日高等師範學校圖書掛に關する事務の監督を命ぜらる○十月九日高等官四等に敍せらる○十月奈良、京都地方へ研究指導の旅行○十二月七日師範學校學科程度取調委員を命ぜらる○同月二十日正六位に敍せらる。	四〇
同三十三年	三月帝國博物館より邦文帝國美術史編纂委員長を囑託せらる○六月二十八日帝國博物館鑑査掛廢止○八月東京帝室博物館官制改革あり、同二十三日東京帝室博物館部長に兼任し歴史部擔當を命ぜらる、同日學藝委員を免ぜらる○十一月奈良、京都地方へ研究指導の旅行。	四一
同三十四年	一月三十一日高等師範學校附屬中學校主事（明治三十二年附屬中學校と改稱せらる）を辭す○二月四日高等師範學校評議員會委員を命ぜらる○四月十二日東京帝國大學文科大學講師を辭す○同月二十六日文學博士の學位を授けらる○十月京都、奈良地方へ研究指導の旅行○十二月二十八日高等官三等に敍せらる○三月二十五日考古學會會長に擧げらる（爾來引續き現今に至る）○五月二十五日帝國教育會より聖諭略解訂正委員を囑託せらる。	四二
同三十五年	三月三十一日從五位に敍せらる○四月官制改正あり東京高等師範學校と改稱す○九月帝國古蹟取調會調査委員を囑託せらる○十二月京都、奈良地方へ研究指導の旅行。	四三
同三十六年	六月京都、奈良地方へ研究指導の旅行○九月七日東京高等師範學校圖書館主幹となる。	四四
同三十七年	十二月二十七日勅六等に敍し瑞寶章を授けらる○十二月京都、奈良地方へ研究指導の旅行○二月十五日帝國教育會より「戦時に於ける國民の心得」編纂委員を囑託せらる。	四五
同三十八年	五月十七日清國に差遣せらる○十二月京都、奈良地方へ研究指導の旅行○九月二日帝國教育會より「戦後に於ける國民の心得」編纂委員を囑託せらる。	四六
同三十九年	十二月京都、奈良へ研究指導の旅行。	四七

同 四 十 年	四月十日正五位に敍せらる。○十月二十八日師範學校教授要目取調委員を命ぜらる。○十二月三十一日東京帝室博物館館長を免ぜらる。○十二月京都、奈良地方へ研究指導の旅行。○十一月東洋協會學術調査部委員に擧げらる。	四八
同 四 十 一 年	一月一日東京帝室博物館評議員(勅任待遇)仰付けられ歴史部長事務を囑託せらる。○九月二十六日教科用圖書調査委員委員仰付けらる。二十八日第一部主査委員起草擔任を命ぜらる。○十二月京都、奈良へ研究指導の旅行。○六月東洋協會學術調査部評議員に擧げらる。(爾來引續き現今に至る)○十一月帝國教育會より「戊申詔書釋義」編纂委員を囑託せらる。	四九
同 四 十 二 年	六月二十八日勅五等に敍し瑞寶章を授けらる。○十二月京都、奈良地方へ研究指導の旅行。 五月長女香鹿藤田寛に嫁す。	五〇
同 四 十 三 年	十二月京都、奈良地方へ研究指導の旅行。○五月二十七日帝國教育會より「聖諭略解」訂正委員を委囑せらる。 二月二十三日父君退職事從六位三宅榮充和歌山に於て歿す。	五一
同 四 十 四 年	三月六日教科用圖書調査委員第二部兼務仰付けらる。同日第二部主査委員起草擔任を命ぜらる。○四月二十九日東京高等師範學校圖書館主幹を辭す。○十二月奈良、京都地方へ研究指導の旅行。○五月七日南葵育英會評議員を委囑せらる。	五二
同 四 十 五 年 大 正 元 年	五月十日從四位に敍せらる。 十二月京都、奈良地方へ研究指導の旅行。	五三
同 二 年	十一月十六日東京高等師範學校在職二十五週年祝賀會あり記念品等を贈らる。○十二月京都、奈良地方へ研究指導の旅行。 八月一日四女勝死す。	五四
同 三 年	七月十一日高等官二等に敍せらる。○七月二十日帝室博物館評議員仰付けらる。○九月十八日東京帝室博物館歴史課長兼天産課長を命ぜらる。○十二月一日臨時帝室編修局編修仰付けらる。○十二月京都、奈良地方へ研究指導の旅行。	五五

同 四 年	奈良地方へ研究指導の旅行。 一月十三日教科用圖書調査委員第一部起草委員を免ぜらる。○三月二十九日勅四等に敍し瑞寶章を授けらる。○七月十六日「大禮の要旨」編纂委員を囑託せらる。○十一月十日大禮記念章を授けらる。○十二月京都、奈良地方へ研究指導の旅行。	五六
同 五 年	十一月十日文部省懸賞募集修身資料審査委員を命ぜらる。○十二月京都、奈良地方へ研究指導の旅行。	五七
同 六 年	五月三十一日古社寺保存會委員仰付けらる。○七月三十一日正四位に敍せらる。○十二月京都、奈良地方へ研究指導の旅行。 十一月次女清石井信二に嫁す。	五八
同 七 年	六月八日臨時帝室編修局御用係仰付けらる。○十二月京都、奈良地方へ研究指導の旅行。 四月三十日勅三等に敍し瑞寶章を授けらる。○十二月一日願に依り臨時帝室編修局御用掛を免ぜらる。	五九
同 八 年	一月十六日東京高等師範學校長に任じ東京高等師範學校教授に兼任す。○二月二日小學校教育成績審査委員を命ぜらる。○二月十六日教員檢定委員會委員仰付けらる。○三月一日文部省社會教育委員を囑託せらる。○七月二十七日教科用圖書調査會主査委員の職を奉じ盡力勤からざる廉を以て旭日中授章を授けらる。○十二月二十四日斯文會理事祭典部長に擧げらる。	六一
同 九 年	七月二十三日臨時教育行政調査會委員仰付けらる。○十月七日帝室博物館官制改正あり、帝室博物館御用掛仰付けられ東京帝室博物館歴史課長兼天産課長を命ぜらる。○十二月十二日願に依り帝室博物館御用掛を免ぜらる。○十二月二十七日 天皇皇后兩陛下より御紋附銀花瓶壹個・金貳千五百圓下賜せらる。	六二
同 十 一 年	一月十六日高等官一等に敍せらる。○四月第一臨時教員養成所設置につき同所管理者を命ぜらる。○四月三十日第一臨時教員養成所歴史科講師を囑託せらる。○八月十二日帝室博物館館長に兼任す、同日	六三

同十二年	通常會計分任官を命ぜらる、同日帝室博物館評議員を免ぜらる。○同月二十一日從三位に敍せらる。○十月十四日教育評議會委員仰付けらる。	六四
同十三年	一月十九日高等試験令第七條の試験委員を囑託せらる。○二月二十二日帝室技藝員選擇委員仰付けらる。○八月二十九日帝室博物館總長を免ぜられ帝室博物館評議員(勅任待遇)仰付けらる、同日宮中顧問官に任ぜらる。○十月六日 天皇皇后兩陛下より御紋附銀花瓶壹個金壹千五百圓下賜せらる。○十月十八日帝都復興院參與仰付けらる。	六五
同十四年	一月二十六日在職多年勤勞不勲につき思召を以て御紋附銀盃壹組及金百五拾圓下賜せらる。○同日皇太子殿下御慶事につき 天皇皇后兩陛下より御紋附銀花瓶小形壹個下賜せらる。○四月十五日文政審議會委員仰付けらる。○十二月京都、奈良地方へ研究指導の旅行。	六六
同十五年	四月二十六日勳二等に敍し瑞寶章を授けらる。○十二月京都、奈良地方へ研究指導の旅行。 三月十三日夫人里子逝く享年六十一。○七月二十九日長男梶野縣諏訪郡豊田村牛山竹次郎長女よしみを娶る。	六七
昭和二年	七月一日文理科大學創立委員を囑託せらる。○十二月京都、奈良地方へ研究指導の旅行。 七月二十一日長孫女三千代生る。	六八
同三年	十一月十日大禮を行はせらるゝに方り文部大臣より多年教育に従事し勵精其の職に盡し功勞顯著なる廉を以て表彰せらる。○同十二月京都、奈良、地方へ研究指導の旅行。	六九
同四年	四月一日東京文理科大學長に任ず、同月十三日東京文理科大學教授に兼任し、東京高等師範學校長に補せらる。○十月知友門人の催に係る古稀祝賀會の舉あり記念品並びに古稀祝賀記念論文集を贈らる。同時に既往發表の著書及び論文を纂輯し、「文學博士三宅米吉著述集」二卷を刊行す。 二月九日長孫男昭一生まる。	七〇

三宅博士著述年表

一著書

書名	冊數	出版者	出版年	出版月
日本史學提要第一編	—	普及會	明治十九年	一月
習字教授案	—	金港堂	同二十年	五月
小學歷史編纂法	—	同	同二十一年	十一月
小學ノ教育法	—	同	同二十三年	三月
小學校用作文書	—	同	同二十三年	五月
中本外地誌	—	同	同二十八年	十一月
中外國地誌	—	同	同二十九年	二月
嘉永歐通年表	—	東京帝室博物館	同三十九年	八月
以前日歐交通年表	—	孔子祭典會	同四十一年	三月
御即位ト大嘗祭	—	東京高等師範學校	大正五年	四月

二 共著に係るもの

書名	冊数	著者	出版者	出版年月
簡易理化實驗法	一	後藤 磐次	普及會	明治十八年十月
理科初歩	四	新保 磐次	金港堂	同二十年九月
高等日本讀本	八	同	同	同二十一年
高嶺秀夫先生傳	一	同	培風館	大正十年十二月
院政時代の供養目錄	一	津田 敬武	東京帝室博物館	同十三年十二月

三 編纂に係るもの

書名	冊数	著者	出版者	出版年月
Japanese Women	一	日本婦人會	日本婦人會	明治二十六年
訂正聖諭略解	一	帝國教育會	帝國教育會	同三十五年
戰時に於ける國民の心得	一	同	同	同三十七年
戰後に於ける國民の心得	一	同	同	同三十八年
戊申詔書述義	一	同	同	同四十二年
東京高等師範學校沿革史	一	東京高等師範學校	東京高等師範學校	同四十四年
師範學校沿革史	一	同	同	同四十四年
德義社沿革史	一	和歌山德義社	和歌山德義社	同四十四年六月

四 校閲に係るもの

書名	冊数	著者	出版者	出版年月
小學日本史	六	新保 磐次	金港堂	明治二十二年一月
日本史要	二	同	同	同二十六年六月
新撰日本史	二	手島 春治	同	同三十二年九月
新撰日本史	二	高橋 健自	同	同三十四年三月
日本歴史教授用掛圖	二	下村 三吉	同	同三十四年三月
日本歴史教授用掛圖	二	齋藤 斐吉	同	同三十五年九月
歴代公家裝束着用圖解	一	中村 萬吉	北村出版部	同三十九年五月
統合歴史教科書	一	齋藤 斐章	大日本圖書株式會社	同四十年二月
偉人品性之修養	一	橋本 常彦	廣文堂	同四十年九月
統合歴史地圖	一	日齋 藤七	大日本圖書株式會社	同四十三年三月
日本地理歴史寫真集	一	小酒 儀三	窪添晴之	自大正十一年八月至大正十五年十月
伊藤仁齋與其教育	一	增田 淑	明治出版株式會社	同八年十一月
濃飛兩國通史	二	岐阜縣教育會	岐阜縣教育會	同十二年一月

五 序文を寄せたるもの

書名	冊數	著者	出版者	出版年月
理化學試驗法	一	後藤米吉	普及會	明治十七年二月
日本學史要	二	新保次	金港堂	同二十六年六月
考古學研究法	一	中村斐三	春陽堂	同三十八年六月
統合歴史教科書	一	齋藤章	大日本圖書株式會社	同四十年二月
品性地名辭書	一	橋本常彦	同	同四十年九月
大日本地名辭書	三	吉田東伍	廣文堂	同四十年九月
統合歴史地圖	一	日高七章	富山房	同四十年十二月
日本歴史地圖	二	高橋健自	大日本圖書株式會社	同四十二年四月
東京帝室博物館輪圖集	一	東京帝室博物館	歴史參照圖刊行會	大正七年十二月
紀年鏡鑑圖錄	一	高須次郎	聚精堂	同八年十二月
平州全圖	一	渡邊幾次郎	隆文館	同九年四月
社會問題と現代思想	二	岐阜縣教育會	岐阜教育會	同十年一月
濃飛兩國通史	一	考古學會	同	同十年十二月
造像銘	一	森本六爾	雄山學會	同十五年七月
金鎧山古墳研究	一	森本六爾	同	同十五年十一月
滿鮮旅行報告	一	議會	同	同十五年十一月
多摩御陵附近の地誌	一	田中啓爾	同	同十五年十一月
明治國民教育史	一	町田則文	同	同十五年十一月
考古學論文集	一	考古學會	同	同十五年十一月
日本青銅器時代地名表	一	森本六爾	同	同十五年十一月

六 單行本等に掲げたる論文

題目	回数	掲載書名	卷數	出版年月
教育史	九	教育文庫	一冊十八冊	明治二十八年八月三十一年一月
今村榮一君略傳	一	今村榮一遺稿	同	同三十七年一月
文學博士那珂通世君傳	一	那珂通世遺書	同	大正四年八月
史料としての金石文數例	一	國史講習錄	同	同九年五月
膽大心小	一	洗心道揚	同	昭和四年三月

七 雜誌に掲げたる論說

題目	雜誌名	卷數	號數	年	月日
學士の義務	培根社雜誌	六	六一八	明治十四年	一月
ベスタロヂー傳(三回)	東京若溪會雜誌	一	一九	同十六年	六、七、八月
ベスタロヂー助成者列傳	同	一	一九	同十七年	八月二十日
かなづかいのこと	同	一	一	同十六年	八月
おんのくわんけいおよびうつりかわり(三回)	同	一	二	同十六年	九月十一日
かなづみのうつりかわりのあらまし	同	一	四	同十七年	十一月
しなもじとかなもじとのあらまし	同	一	五	同十七年	十二月
小學歴史科に關する一考案(四回)	東京若溪會雜誌	一	一一四	同十六年	十一月三日
かなづみのうつりかわり(四回)	同	一	一一四	同十七年	十二月四日
ことばのはたらきかたおよびできかた	同	一	五	同十六年	十二月

ぶんのかきかたにつきて(二回)	かなのまなび	六、七	明治十七年	二月、三月
蝦夷語と日本語との關係如何(二回)	東洋學藝雜誌	三五、三六	同	八月、九月
てがみのかきかた	かなのしるべ	一	同	七月
くにぐにのなまりことばにつきて(二回)	同	二、三	同	八月、九月
みるざのまぼろし	同	四	同	十月
ひるばのはなし(二回)	東洋學藝雜誌	五、六	同	十一月、十二月
元史中に散見する所のマルコポーロの事蹟及び其の傳	かなのしるべ	三八	同	十一月
ネサンブラウンが「てにをはわ」とばのあとにつづけんや」をよみて	同	七	同	一月
あきのにしき(二回)	同	九、一	同	三月、五月
ほうげんとりしらべなかま	方言取調仲間主意書	九	同	四月
かなのくわいのきそく	かなのざつし	一	同	四月
かなづかいのかいりようすべきこと	同	一	同	七月
ぞくごをいやしむな(三回)	同	一	同	十一月、一月
化学初歩教授の大意(三回)	同	一、二、四	同	四月十五日、二十
我國の土蠻に就てチャンバアレン氏の説を評す	同	七、五	同	五月十五日、二十
文隆寺所藏四天王紋錦旗	同	一	同	十二月
法隆寺時古文を載する趣意書	同	一	同	七月十四日
寄書(の答)	同	二	同	七月二十一日
撫子物語(バスタロヂ原著レオナルドエンドゲルト)	同	二、一	同	七月二十一日、九
磐梯山の墳	同	三	同	七月二十二日
夏期學	同	三	同	七月二十八日
ワシントン府諸學校手工教授の事	同	三	同	同

火山の教科書選	同	三	同	八月四日
東京府の教科書選	同	四	同	同
諸種の文選	同	四	同	同
高等中學校設置の論	同	五	同	八月十一日
茗溪の會論	同	五	同	同
藥師の像	同	五	同	八月十八日
スエズ運河	同	六	同	八月二十五日
エミナンの死	同	七	同	同
亞弗利加の末	同	七	同	同
中央の興	同	七	同	九月一日
美術の振興	同	八	同	九月一日、十五日
アリアンの故地	同	八	同	九月八日
日本紀元の正否	同	九	同	同
日本彫刻の標品第一	同	九	同	九月十五日
言文一致の論	同	一〇	同	九月二十二日
教科書に對する政府の關係	同	一〇	同	九月二十九日
簡易科に於ける漢字	同	一一	同	十月六日
小學校に於ける實業科	同	一二	同	十月十三日
年代考と團體書	同	一三	同	十月十三日、二
士人必讀	同	一四、一五	同	十月十三日、十一
歐洲各國現行の教育制度	同	一四、一七、二	同	十月十三日、十一
三島子	同	一四、二七、二	同	五月三日、十二
上意下達の便	同	一六	同	五月二十二日、二十
同	同	一六	同	五月二十七日

著述年表

大隈伯の遭難	黒田伯内閣の辭職	加茂眞淵の略傳	小學女生徒の理科英語科	教育品展覧會	女生徒の品行	裸體婦人の畫	本居宣長の傳	廢ラジ娼の革命論	魯國政府の國事犯者に對する政略	紫式部略傳	明治二十二年大事記	寓言の忠敬例	伊能忠敬	日本古代婚姻法取調材料(三回)	曲玉	栲布	扶桑國諸諸	堅穴を遺すべき家屋の構造	古物學の進歩	隨筆ぬきがき	
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	東京人類學會雜誌	同	同	同	同	同	同	同
三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三	三
八	八	八	九	九	九	九	九	一	一	一	一	一	一	四四四七	四五	四九	八	五	五	五	五
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
明治二十二年	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	二十二年	二十二年	二十三年	同	同	同	同	同
十月三十一日	同	同	十一月十五日	同	同	同	同	十二月十五日	十二月十五日、三十一日	十二月十五日	同	同	同	十月、十二月、二月	十一月	四月、五月	七月	八月	九月	九月	九月

著述年表

第六年會編輯事務報告	石鐮につきて	新石器古石器	第七年會編輯事務報告	江談抄に出たる波斯語	吉士長丹	聖德太子畫像	古代衣服圖解(四回)	支那古墳の例	陵墓の畫像	菅公の畫像	雨森芳洲の教育說	江村北海の授業法(三回)	雜案數件	雜記數件	第八年會編輯事務報告	讀女大食の國考	官女王紋錦旗圖考	四天女衣旗圖考	女官王紋錦旗圖考	漢委奴國王印考	歷史教授談(二回)	大食國考につき答辯	
同	同	同	同	同	同	同	同	東京人類學會雜誌	同	同	同	同	東京人類學會雜誌	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
五五	五六	五九	六九	一	二	三	三	七	七	一〇	一〇	一三	七	七	六	二	二	二	二	三	三	三	三
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
十月	十一月	二月	十月	十二月	十二月二十五日	一月十日	一月、三月	一月	二月	三月二十五日	五月十日	五月、六月	五月	八月	十月	十月	十月十五日	同	十一月十日	十二月	一月、二月	二月	

御即位禮と大嘗祭	上古の志望者のために	高師入學志望者のために	小紀元節に就いて	紀元節に就いて	座元節に就いて	教育勅語の精神	重労働の精	求用さるる人心
教中史研究	中央史研究	中央史研究	考古學研究	歴史學研究	キヤン研究	修身研究	キヤン研究	勞力新開
一四	三〇	一三	一四	一〇	二	二	二	二
三三四	七	一三	一四	一〇	三	二	五	九
同	同	同	同	昭和二	同	同	同	同
三年				年				
十一月	七月	十一月	七月	二月	一月	十月	三月	八月

天長節の由來	紀元節に就いて	原史時代の婚姻	耶馬臺國について	數と歴史について	殿下御巡遊の賜	小學歴史教授の五大眼目	桐陰會創立第三十年紀念號祝詞	國立美術館の設立	日本考古學發達の概略	小學歴史教科書に就ての私見	金石文の範圍及分類	甲寅の今年は芽出たい	故坪井會長を悼む	陶器概説	教育家としての貝原益軒	古墳と埴輪	古今陵墓の變遷と伏見桃山陵	最上徳内と近藤重藏とに就て	支那の將來	修正國定教科書に就て	豐太閣の群雄統御法	探古考證雜抄(斑鳩)(四回)
同	修身研究	中央史研究	考古學研究	日大新報	大坂新報	教養會雜誌	桐陰會雜誌	週古學雜誌	教育研究	東京人類學會雜誌	東京新報	東京新報	東京新報	東京新報	東亞之光	新學本	帝國教育論	東洋時論	日本之小學教師	成古學雜誌	功	功
二二	二六	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二	二二
一〇	二	五	一	四	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一	一
同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
十三年	十二年	十一年				十年	九年	七年	六年	四年	三年	二年	二年	二年	二年	二年	二年	二年	二年	二年	二年	二年
十月	二月	七月	十月	九月	二月	六月	三月	八月	十月	八月	一月	十二月	七月	六月	同	同	同	同	同	同	同	同
				四日		三十日				一日												九月、十月、十一月

三宅博士古稀祝賀會經過報告

一 本會成立の次第

東京文理科大學長東京高等師範學校長文學博士三宅米吉先生が、本年古稀の壽に達せらるゝにより、これを機として、先生の多年學界並に教育界に貢獻せられたる偉大なる御功績を記念し、かつは將來の御健康を祝福せんとの切なる希望は、豫て有志の間に抱懷せられたるところなりしが、その企畫は先づ大塚史學會の活動によりて具體化するに至れり。

大塚史學會は、主として東京文理科大學、東京高等師範學校に於て史學を専攻する教官、學生、生徒を中心として組織せられたる研究團體にして、創立以來三宅先生をその會長に戴くものなるが、昭和四年初頭の委員會に於て、來學年度事業計畫を附議するに當り、該學會事業の一として三宅會長古稀祝賀の件を提案可決し、先づ豫め先生の御内意を伺ひたるに、幸ひに御許諾を得、こゝ

に祝賀會成立の第一歩を劃したり。

しかるに、この舉たる固より大塚史學會關係者のみの希望に止まらず、進んで參加を熱望せらるゝ向も多かりしにより、同年三月十九日東京高等師範學校第二會議室に準備委員會を開きて協議したる結果、「三宅博士古稀祝賀會」の名のもとに、左記の如く、ひろく各方面諸氏に對しその發起者及び實行委員たるを依頼すべきことを議決し、同月二十日附にて依頼狀を發送、それぞれ承諾の回答を得たるを以て、即ちこゝに正式に本會の成立を見るに至り、向後の準備事務其の他に關しては、便宜實行委員に委任し、その事務所を東京高等師範學校大塚史學會内に設置することなれり。

發起者 (五十音順) ○印は實行委員

○相葉 仲 赤羽 穰 赤間 信義 ○淺海 正三
○有高 巖 栗屋 謙 安東 壽郎 池岡 直孝
生駒 萬治 石黒 魯平 石川林四郎 石田 茂作

- 石田 義男 石井 國次 石井菊次郎 ○伊勢田春市
- 伊藤 長七 伊東 忠太 稻葉 彦六 入田 整三
- 宇野 哲人 上田 萬年 ○小澤 榮一 大島 義脩
- 大杉 謹一 大瀬甚太郎 ○大高 常昌 大谷 武一
- 大東 重善 丘 淺次郎 ○岡本作次郎 尾崎 行雄
- 落合 寅平 ○乙竹 岩造 嘉納治五郎 ○金森 彌文
- 金子彦二郎 川村 理助 鎌田 榮吉 ○木代 修一
- 北澤 種一 木下 一雄 木原 美義 ○日下部重太郎
- 國枝 元治 桑原 陽藏 後藤 牧太 ○小林 艶治
- 郡山 良光 小西 信八 ○齋藤 斐章 ○坂本 致治
- 作間 富生 櫻井 賢三 櫻井寅之助 ○佐々木秀一
- 佐藤保太郎 芝田 徹心 ○鹽谷 宗雄 鹽谷 温
- 澁谷 義夫 島田 鈞一 下村 壽一 ○下村三四吉
- 白鳥 庫吉 ○白濱 兵三 新保 馨次 關野 貞
- 關屋貞三郎 ○高橋 健自 高橋 章臣 ○高畑榮次郎
- 高藤太一郎 瀧澤菊太郎 ○武田 俊介 武政 太郎
- 武部 欽一 ○田中 寛一 ○田中 啓爾 ○田淵 千秋
- 玉井 幸助 田村二十一 爲藤 五郎 津田 敬武
- 坪井九馬三 高師校友會 ○飛松 正 友枝 高彦
- 友納 養徳 鳥居 龍藏 永井 道明 ○中川 一男
- 中島 信虎 中村 孝也 ○仲本 策夫 ○中山久四郎

- 中山 武三 成田 喜英 二階 源市 西川 順之
- 西村 精三 西山 政猪 二宮文右衛門 野口授太郎
- 野尻 精一 野々村運市 長谷川乙彦 島山 源藏
- 服部宇之吉 鳩山 一郎 濱 幸次郎 原 房孝
- 原田 淑人 肥後 盛熊 福島甲子三 富士徳治郎
- 藤井 利譽 ○古田 正男 穂積 重遠 横山 榮次
- 町田 則文 松井 簡治 ○前川 峰雄 溝口禎次郎
- 溝淵 進馬 三土 忠造 ○峰岸 米造 ○峰間 信吉
- 馬上孝太郎 森岡 常藏 ○森本 角藏 ○森本 六爾
- 諸橋 轍次 山口 俊策 山崎達之輔 山崎 直方
- 山本 英雄 ○山本 幸雄 ○横式 信義 吉岡 郷甫
- 吉田 賢龍 ○吉田 彌平 ○依田 豊 和田猪三郎
- 綿貫 哲雄

二 趣意書の配送及會費受領

五月二十一日、豫て實行委員會の審議を経たる左記趣意書及び發起者氏名を記載せる印刷物を各方面諸氏に發送してこれが賛同を求めたり。その配送の範圍は、東京文理科大学、東京高等師範學校、第一臨時教員養成所並に茗溪會を始とし、文部省、帝國學士院、各直轄學校、

宮内省、帝室博物館、考古學會、東京人類學會、斯文會關係の諸氏及び同郷關係者等、總數五〇七六通に及びたり。

謹啓 時下益々御清榮の段賀し上げます さて東京文理科大学長東京高等師範學校長宮中顧問官文學博士三宅米吉先生には本年古稀の壽に達せられ誠に御同慶に存じます ついては先生の多年學界教育界に盡力せられた偉大なる御功績を記念し併せて將來の御健康を祝福するため左記の要項により祝賀の意を表したく今回私ども發起者となり當會を組織いたしました 貴下に於かれましても何卒御賛助御高配を賜はりますやう御願ひ申し上げます

敬 具

昭和四年五月 三宅博士古稀祝賀會
(東京高等師範學校大塚史學會内)

要 項

事 業

- 一 來る十月中旬を期し先生及び御家族を招じ東京文理科大学講堂に於いて祝賀式を行ふこと
- 二 先生の著述集を刊行すること
- 三 先生の交友及び受業の士の起草にかかる記念論文集を刊行して先生に献すること
- 四 先生の油繪御肖像をつくり先生に贈呈すること

三宅博士古稀祝賀會經過報告

五 祝賀式後更に賀宴を開くこと

- 一 御贊同の向は金貳圓以上御醸出ありたし
- 二 御拂込は來る六月三十日までに願ひたし
- 三 御拂込には左記宛振替口座御利用ありたし

東京市小石川區大塚窪町

東京高等師範學校寄宿舎

振替口座東京一三四〇五番

受領報告は「茗溪會報」に掲載します

(附)

- 一 會費は主として祝賀式及び記念品費等に充當し賀宴會費は別に申受けます
- 二 著述集については別紙文學博士三宅米吉著述集刊行會の印刷物を御覽下さい
- 三 記念論文集は書肆岡書院より發賣の豫定であります

右の趣旨に賛せられ、會費を寄せられたる向は、實に二千三百餘名、總金額壹萬八百餘圓の多きに達したり。

三 實行委員會開會及事務分擔

實行委員會に於ては、東京高等師範學校教授峰岸米造氏を委員長に推し、その後屢次會合を重ねて、事業の促

進を圖り、各段の準備事務を遂行せり。その開會日時左の如し。

第一回	三月二十五日	午後一時	東京高等師範學校
第二回	四月十七日	午後四時	第二會議室
第三回	四月二十七日	午後一時	同
第四回	五月十三日	午後四時	同
第五回	九月十四日	午後一時	同
第六回	十月七日	午後四時	同
第七回	十月十一日	午後四時	同
第八回	十月二十四日	午後四時	同

第一回及び第七回委員會にて、左記の通り事務分擔を決定、それぞれ盡力を依頼するところありたり。

三宅博士古稀祝賀會事務分擔表

(第一回委員會決定)

實行委員長	峰岸 米造
總務部	主任 峰岸 米造 齋藤 斐章 有高 巖 山本 幸雄 中川 一男 大高 常昌 相葉 伸 石田 義男
記録部	主任 中山久四郎 木代 修一 淺海 正三

祝賀會當日事務分擔表

(第七回委員會決定)

委員長	峰岸 米造
祝賀式係	主任 馬上孝太郎 受附係 主任 齋藤 斐章 (支關 宿直室) 武田 俊介 中山久四郎 小澤 榮一 西村 精三 白濱 兵三 古田 正男 郡山 良光 山本 英雄 坂本 致治
接待係	主任 吉田 彌平 佐々木三之助 進藤小一郎 (事務官室、専攻科教室) 主賓室(學長室) 主任 森本 角藏 和田猪三郎 後藤 胤保

來賓室(貴賓室)	主任 松井 簡治 丘 淺次郎 國枝 元治
控室(第一會議室)	主任 石川林四郎 友枝 高彦 林 織衛 主任 乙竹 岩造 森岡 常藏 稻葉 彦六 下村三四吉 石井 國次 諸橋 轍次
控室(第二會議室)	主任 有 巖 田中 順 主任 綿貫 哲雄 中島 信虎 川村 理助 藤井 利譽 日下部重太郎 山本 幸雄 中川 一男 佐藤保太郎 淺海 正三 逸見 祐三

來賓附添室	主任 笹島 次郎
車馬係	主任 笠原 英一
式場係	主任 二宮文右衛門
學生生徒係	主任 岡本作次郎 櫻庭 武
附屬中學校生徒係	主任 田中 寛一
附屬小學校兒童係	主任 佐々木秀一
庶務係	主任 田中 啓爾 木代 修一 大高 常昌 (幹事室) 相葉 伸 石田 義男
園遊會係	主任 岡本作次郎 石 三次郎 下泉 重吉 金森 彌文 高畑榮次郎 前川 峰雄 小林 艶治 横式 信義 鹽谷 宗雄 仲本 策夫 田淵 千秋

四 祝賀及び記念事業の經過

本會の祝賀及び記念事業として、當初に計畫せるところは、趣意書に發表せる如く

- 一 來る十月中旬を期し先生及び御家族を招じ東京文理科大学講堂に於て祝賀式を行ふこと
 - 二 「文學博士三宅米吉著述集」を刊行すること
 - 三 先生の交友及び受業の士の起草にかかる「三宅博士記念論文集」を刊行して先生に獻すること
 - 四 先生の油繪御肖像をつくり先生に贈呈すること
 - 五 祝賀式後更に賀宴を開くこと
- の五項なりしが、その後に至り、更に祝賀式當日占春園に於て大塚學友會主催にかかる祝賀園遊會を催すことを決定し、なほ賛同者全部に對し、本會に於て、先生の御

寫真並に「三宅博士古稀祝賀會記念誌」を頒つこととなれり。左にこれ等事業經過の大要を記さん。

1 祝賀式・祝賀園遊會及び賀宴

初めその日取を十月中旬に豫定したるも、その後、御肖像畫揮毫及び刊行事業の進捗状況、並に全國中學校長會議日程等をも參酌し、同月二十五日(金曜)を卜して舉行のことに變更せり。

かくして祝賀式は東京文理科大學當局の厚意により、同日午後一時より同學講堂に於て舉行、當日主賓として先生並に御家族十方御來臨あり、小橋文部大臣(代理)其他來賓及び各方面の參列者約五百五十名に達し、一千五百の學生、生徒、兒童と共に眞に滿堂立錫の地なき盛觀を呈せり。右祝賀式及び祝賀園遊會、賀宴の狀況經過は別項にこれを記載せり。

なほ、當日左記の五氏に對し、本會の名に於て、來賓としての招待狀を發したり。

- 文部大臣 小橋一太氏
- 帝國學士院長 櫻井錠二氏
- 東京帝國大學總長 小野塚喜平次氏

- 慶應義塾大學長 林毅陸氏
- 舊紀州藩主家 侯爵徳川頼貞氏

2 「文學博士三宅米吉著述集」

三宅先生の御著述を纂輯してこれを刊行せんとの企ては、本會成立以前既に有志の間に進行しつつあり、即ちはやく「文學博士三宅米吉著述集刊行會」の成立を見たるが、右刊行會の趣旨、精神また本會のそれと合致するものなるを以て、第四回實行委員會に於て、その刊行を本會祝賀記念事業の一とすべきことを議決し、かつその事業の進行完成は依然右刊行會に委嘱することとなせり。左記の文書は即ち五月二十一日本會趣意書發送に併せて右刊行に關し、大方諸士の贊助を請へるものなり。

三宅先生が教育界の耆宿として學界の權威として斯道に貢獻されてゐることは吾人のひとしく景仰するところ此度古稀の齡に達せられたるを機とし記念祝賀の一事業として先生の著書並に論文の總てを網羅し「文學博士三宅米吉著述集」を刊行し學海の指針修養の關鍵として永く先生に私淑したいと思ふのであります。先生の學術上教育上の卓識高見については今更多言を要せず而も今日これを手にすることは殆ど不可能であります。大方の

諸君に於かせられても本會の微衷を容れ左記要項御覽の上右著述集購入の御申込賜はり度切に御願致します

昭和四年五月

文學博士三宅米吉著述集刊行會

要項

(一)文學博士三宅米吉著述集

菊判上下二冊 上巻約八百頁 定價金十二圓
 表紙クロス函入 下巻約八百五十頁

發行所 文學博士三宅米吉著述集刊行會
 小石川大塚窪町 若溪會事務所内

發賣所 目黒書店
 京橋區南傳馬町二ノ五

(二)本書内容

- (イ)著書八種 (日本史學提要第一編 習字教授案 小學歴史編纂法 益軒ノ教育法 以前日歐交通年表略 文學博士那珂通世君傳 御即位禮と大嘗祭 聖堂略志)
- (ロ)論文 歴史に關するもの 三十二篇
- 考古學及人類學に關するもの 五十三篇
- 國語に關するもの 十八篇
- 地理に關するもの 十二篇
- 教育に關するもの 四十篇

三宅博士古稀祝賀會經過報告

雜 五十九篇
計 二百十四篇

(三)配本の方法

- (イ)なるべく本年六月末日までに發行所(若溪會事務所内)宛直接購入申込ありたし
- (ロ)豫め申込まれたる人には代金八圓にて配本す
(若溪會等より出版費補助あるためこの代金は實費以下なり)
- (ハ)本年十月中旬三宅博士古稀祝賀會當日より申込順を以て配本す
- (ニ)代金は本書到着の上拂込ありたし
(備考) 其後豫定の頁數より遙かに超過を來たし、上巻八七六頁、下巻九二七頁に達したる上、製本を特に背皮天金となせるため、定價もまた金十六圓に改定するの止むなきに至れり(十月追記)

かくして著述集は、刊行會關係諸氏並に發行所目黒書店の熱心なる盡力のもとに、十月十日に至り、菊判上下二卷一千八百餘頁の印刷並に製本完了を告げたるを以て本會は即ち金壹千圓を支出して、壹百貳拾五部を買上げこれを先生に贈呈するとともに、豫約申込者に對しては祝賀式當日以後、右刊行會に於てそれぞれ豫約特價にて配本を了せり。

右著述集の刊行を發起し、及びその校正に當りたる諸氏を左に録す。

- 中山久四郎 吉田 彌平 峰岸 米造 高橋 健自
- 齋藤 斐章 馬上孝太郎 乙竹 岩造 日下部重太郎
- 依田 豊 峰間 信吉 森本 角藏 田中 啓爾
- 中川 一男 木代 修一 森本 六爾

3 「三宅博士古稀祝賀 記念論文集」

この刊行計畫も、また本會成立以前、大塚史學會の手によりて行はれ、先生の御承認を経たる上、左記先生の交遊及び受業の士二十九氏に論文執筆を依頼し、それぞれ快諾を得たりしが、第一回實行委員會に於て、右論文集の刊行をまた本會事業の一となすことに決し、その編輯刊行の事務を擧げて大塚史學會に委嘱する事とせり。

爾來、同學會にては、主としてこの事業の達成に傾倒し、生徒委員中には暑中休暇にも拘はらず特に滯京して奔走努力するものあり、かつ執筆者各位の熱心なる贊助のもとに、四六倍判、約九百頁の大冊となりて、祝賀式當日書肆岡書院よりこれが刊行の運びとなれり。定價一

部八圓八拾錢。左にその内容題目を列記すべし。

- 序
- 三宅博士古稀小照
- 小傳
- 年譜
- 著述年表

- 清代滿洲流入考 有高 巖
- 奈良時代の寺院組織に就て 石田 茂作
- 判金の形式に就て 入田 整三
- 土地への考察の一轉向 小田内通敏
- 伊藤東涯に於ける仁齋學の發展 加藤 仁平
- 漢詩と民謡 日下部重太郎
- ヴィニングの『無名のコロンブス』 文學博士 桑原 隲藏
- 鎌倉時代裁判の職制及び手續 文學博士 小酒井儀三
- 國語に於けるF H 兩音の過渡期 文學博士 新村 出
- 第十六世紀に於ける歐洲人の對支貿易に就て 下田 禮佐
- 生野の義學 文學博士 下村三四吉
- 匈奴の休屠王の領域と其の祭天の金人にと就いて 文學博士 白鳥 庫吉
- 新發見の細線鋸齒文鏡に就いて 文學博士 高橋 健自
- 彌陀の來迎圖とその社會的價值 津田 敬武

大名の研究

- 六論行義に關する研究 文學博士 中村 孝也
- 九州の二銅鐸 文學博士 中山久四郎
- 伯耆大山寺の研究 醫學博士 中山平次郎
- 股城發見の大石磬 文學博士 沼田 頼輔
- 山東省臨淄出土の瓦製戰車 文學博士 濱田 耕作
- 徳川幕府財政難の諸原因 原田 淑人
- 巴形銅器考 藤井 幸永
- 周公の居攝を論じて尙書・禮記其の他の解釋に及ぶ 文學博士 森本 六爾
- 鞏入 考 文學博士 諸橋 轍次
- 維新前後に於ける人權の發達 柳田 國男
- 銅鐸の形式 綿貫 哲雄
- 信州に於ける鐵道開通前の鹽の移入路に就いて 後藤 守一
- Shrine Treasures in Ancient Greece and the Financial Organization of Buddhist Temple in Japan 田中 啓爾
- 世界大戰の責任を負ふべきは果して獨逸國なるか 齋藤斐章 峰岸 米造

4 油繪御肖像

以上の外、先生の油繪御肖像畫大小二面を製作して共にこれを先生に贈呈し、その一面(小形)は先生の御手許に、他の一面(大形)は東京文理科大學内に掲げて永く先生の御功績を記念せんとす。乃ち先生の御意向をも伺ひ斯界の重鎮たる帝國美術院會員和田英作畫伯にその揮毫を依頼したところ、幸ひ快諾を得、祝賀式當日までにその大形の一面を完成せられたれば、これを式場に掲ぐることを得たり。他の一面も式後二旬餘にて完成し、これを三宅家に贈呈したり。本誌巻頭の原色版は、即ちその後者を複製せるものなり。

5 御寫眞及び記念誌

先生最近の御寫眞を複製し、本會趣意賛同の會員諸氏全部に頒つて今次の擧を永久に記念することとし、これが製作方を東京本郷區中村寫眞館に依頼せり。その台紙には先生の御家紋を配し、かつ寫眞銅版により先生の御署名をあらはしたり。なほ本會のため種々幹旋の勞を執

られたる茗溪會に對し、本會は特に先生御寫眞額一面を贈呈してこれを記念することとせり。

最後に本會の事業並に會計收支の經過を略述して、普く會員諸氏に報告せんがため記念誌を刊行せり。なほ、特に學生側の熱心なる希望を容れ、さきに記念論文集に掲載したる先生の小傳、年譜、著述年表をその巻頭に加ふることとなせり。本會乃ち左の諸氏にこれが編纂事務を依囑したり。

齋藤 斐章 有高 巖 木代 修一 淺海 正三
大高 常昌 白濱 兵三

かくして、三月十九日の會合以來、準備委員會一回、實行委員會八回、その他各部各係の小委員會、著述集・記念論文集・記念誌の編纂委員會等無慮十數回に及び、この間提案され討議決定せられたる諸種の祝賀記念事業は、すべて滞りなく完成を見るに至りたり。これ一に先生御高德の然らしむるところなるは勿論、また各方面諸彦の熱誠なる賛同援助の賜によるもの多く、發起者並に實行委員諸氏の獻身的盡力とともに、こゝに特に銘記して、有意義なりしこの擧を永く傳ふるところあらんとす。

祝賀會概況

一 祝賀式

昭和四年十月二十五日(金曜)は、豫て各般の準備を進めつゝありし三宅博士古稀祝賀會の當日なり。この日東京文理科大学、東京高等師範學校にては、特に午前十時を以て授業を打切り、委員は各自の分擔に従ひ、更に準備萬端遺漏なきを期せり。朝來微雨あれども、午前十一時頃より既に參會者相つき、晴やかなる歡談各控室に賑やかなり。かくして午後零時半、主賓三宅博士並に御家族十方は、森本(角)委員の御案内にて、自動車の轍も軽く御來着あり、一同玄關に御出迎して直ちに主賓室に招しまゐらせたり。

これより先、式場なる東京文理科大学講堂には、正面壇上に主賓席設けられ、其の前方左側に、和田英作畫伯揮毫になれる三宅博士御肖像油繪を掲げ、左右の背後には本祝賀會より博士に贈呈すべき「文學博士三宅米吉著述集」百二十五部並に「三宅博士古稀祝賀記念論文集」百部が積上

追記 (十二月三日)

祝賀會を無事終了してより僅かに二週間、十一月十一日はからずも三宅先生の薨去に遭ひ、之がため會後整理の實行委員會は同月三十日に延期せられたり。同日、本會は更に「文學博士三宅米吉著述集」六十七部、「三宅博士古稀祝賀記念論文集」五十二部を買上げ、之を三宅家御遺族に贈呈することとせり。

概況

げらる。壇の前面なる大鉢植の松竹も、今日の悦びに入色榮えて見ゆ。

定刻午後一時となるや、學生生徒兒童入場し、續いて各方面より參會せられたる來賓並に會員諸氏入場着席せられ、滿堂まさに立錐の地なき盛觀なり。來賓席には小橋文部大臣(代理)、鎌田樞密顧問官、三土前大藏大臣、關屋宮内次官、林慶應義塾大學長、吉田廣島文理科大学長、嘉納前東京高等師範學校長其他朝野の貴顯をあつめたり。やがて三宅博士並に御家族は峰岸委員の先導により順次御入場あり、壇上の主賓席に着かる。

かくて、馬上委員司會者となり、左の次第によつて式を進行す。

- 一 開會の辭
- 一 式 辭
- 一 記念品贈呈
- 一 祝 辭
- 文部大臣

來賓總代

東京文理科大学 職員總代

東京高等師範學校 職員總代

卒業生總代

同

學生總代

同

生徒總代

同

附屬中學校生徒總代

同

附屬小學校兒童總代

一 三宅博士御挨拶

一 閉會の辭

開會の辭 峰岸委員

これより三宅博士古稀祝賀の式を行います。私は茲に此の祝賀式の成立並に経過について、極めて簡単に御報告をなし開會の辭に代へようと思ひます。先生が非凡なる睿智、卓越なる識見、圓滿高雅なる徳望を有せられ、時代の先覺者として我が學術界の爲め、又我が教育界の爲め、最も適切なる御指導をなされた事は、普く世人の認める處であります。我々門下生は本年先生が古稀の高齡に躋られましたのを機として、先生の長い間の御功勞に満腔の感謝を表し、かつ御業績を稱へ、自ら省み自ら

戒め勵みたい、なほ又先生が將來益々御壯健にて、永く斯道の爲め御盡力を御願ひ致したいとの熱望がほとばしり出て、昨年十月先生の著述集刊行會なるものを組織しました。先生の御學識は殆ど兼ね統べざる無しと申す程でありますから、多年學界の爲め教育界の爲めに、御研究御論議なされた事柄は、甚だ多いのであります。故に此の擧に就ては滿一箇年の後、本月に至つて始めて完成を告げまして、上下二卷、千八百頁の大部のものを見るに至つたのであります。

この間、本年三月半ばに、主として大塚史學會——御承知の方もありませんが、東京高等師範學校の歴史專攻の者に依つて組織されてゐる會であります。この大塚史學會の發意と熱烈なる斡旋とに依つて、茲に三宅博士古稀祝賀會が起されたのであります。その發起人には朝野の名士、先生交友の士等五十餘人、東京高等師範學校卒業者、茗溪會役員、本校校友會幹事並に大塚史學會委員等合計百四十五名に御願ひ致し、之と同時にその中から實行委員を定め、不肖私は誤つてその實行委員長としてその席を汚したのであります。斯くして此の事業の種目



を攻究する爲め、幾回にも互つて十分協議しました結果、御祝の仕事と記念の仕事の二つに分つ事となり、御祝の仕事としては、十月中旬の吉日を下してこの講堂で祝賀式を擧げ、後學生の園遊會を催し、更に賀宴を開く事とし、記念の意味の仕事としては、先生の御肖像を調製して先生に献呈する事、記念論文集を刊行する事、先生の御寫眞をこの事業の賛成者全部に頒つ事、又記念誌を編纂して同じく賛成者全部に頒つといふ事にして進んだのであります。その中記念論文集の刊行については、本祝賀會は大塚史學會に之を委嘱する事になり、大塚史學會は先生の知己學問上の御交友並に門弟等二十餘名に論文の執筆を依頼し、其等の原稿の集まるに従ひ、史學會委員は夏休をも休まず校正其他の事に従事し、その盡力の結果著述集と殆ど時を同じくしまして、本月始め四六倍版九百餘頁のものが出來上つたのであります。

初め本會の事業につき大方の賛同を求めました處、四方より熱烈なる賛意を表せられました、二千數百人から祝賀會のため醸出せられた金額は壹萬圓を超え、各方面の厚い御同情と御盡力とに依りまして萬事順調に進行し

本日茲に先生及び御家族を招待申上げて此の式を擧げ得られました事は、發起人一同の衷心悦びとする處でありまして、ここに御集りになつた諸君も感と同じうせられる事と存じます。記念品としては、先生の思召をも伺ひまして、和田畫伯に先生の御肖像の揮毫を御願ひし之を先生に献呈する事になり、又これに積んである先生の著述集百二十五部、記念論文集百部を献呈する事になりました。斯く總てが順調に進んだ事は、一に先生の御徳の然らしむる處であります。まことに、謹んで思ひ、明かに辨じ、厚く行ふ君子、我が三宅先生の如き果して幾人ありませうか。(拍手)ここに先生の御自愛を諸君と共に祈り、愈々御壯健ならん事を御願ひ致すのであります。之を以て開會の御挨拶と致します。(拍手)

式 辭 吉田委員

今茲文學博士三宅先生古稀ノ壽域ニ躋ラル同志胥謀リ祝賀ノ會ヲ設ク乃チ吉辰ヲトシ此ニ先生ヲ迎ヘテコノ式ヲ擧グルヲ得タルハ欣幸ニ勝ヘザル所ナリ
先生ハ開拓者ナリ博宏通明ノ材ヲ抱イテ前人未到ノ野ヲ

拓ク道ナキ所道ヲ通ジ種ナキ所種ヲ播スかなのくわいニ在リテハ國字國文ノ改善ヲ唱ヘ文ヲ編シテハ學術評論ノ先驅ヲナシ都ノ花ヲ董シテハ明治文藝ノ黎明ヲ啓ク益軒ノ教育法ハ本邦教育史ノ嚆矢ニシテ日本讀本ハ新教科書ノ急先鋒タリ而シテ日本史學提要ハ實ニ明治ノ歴史家ヲ覺醒シタル曉鐘ニシテ考古學會ハ幼稚ナリシ考古學ヲ覆育セル搖籃ニ非ズヤ其ノ他音韻ニ文法ニ地理ニ理科ニ國文ニ習字ニ美術ニ佛敎ニ先生ガ研究ノ向フ所新見創意立チドコロニ成ル其ノ融通無碍適クトシテ可ナラザルナキ先生ノ如キハ稀ナリト謂フベシ

先生ハ獨創ノ人ナリ年纔ニ十六ニシテ慶應義塾ヲ退カルルヤ爾來一タビモ師ニ就キテ敎ヲ受ケタル事アラズ孜々トシテ自ラ修メ默々トシテ獨リ穿ツ覃思研精沈潛涵泳千里ヲ獨往シテ曾テ師授ニ藉ラズ徹頭自家ノ獨得徹尾自個ノ創造先生ノ如キハ稀ナリト謂フベシ

先生ハ教育家ナリ其ノ十七歳ニシテ始メテ新瀉英語學校ノ教壇ニ立タレシヨリ以テ今日ニ及ブ現ニ東京文理科大學長東京高等師範學校長ノ劇職ニ在リテ國史ノ敎授ニ任ズ五十餘年一日ノ如シ先生神清氣和カナリ温タル風丰

ハ玉ノ如ク澹タル胸懷ハ水ノ如シ寡黙多ク言ハズ語々合著多ク太ダ暗示ニ富ム秋霜自ラ持シ春風人ニ接ス先生ガ人ヲ知ルノ深キハ物ヲ知ルノ深キガ如シ感化ノ濃カニ薰陶ノ厚キハ固ヨリ其ノ所ナリ陸格ノ論起ルヤ當局ノ議未ダ決セズ諸生慷慨越變將ニ測ラレザラントス先生意ヲ決シテ立チ一身衆望ヲ負ヒ辛苦十年終ニ今春ヲ以テ大學ノ開設ヲ見ルニ至レリ學者ニシテ教育家タル先生ノ如キハ稀ナリト謂フベシ

嗚呼人生七十ナルハ古來稀ナリ先生ノ壽眞ニ賀スベシ然レドモ先生ヲ賀スル所以ノ者ハ豈唯先生ノ壽ヲ賀スルノミナランヤ先生ハ實ニ當代ノ碩學ニシテ一世ノ師表タリ先生ノ學ト徳トハ先生ノ壽ト共ニ三ツナガラ古來稀ナル所先生ヲ有スルコト我ガ學術界教育界乃至全社會ノ光榮ナルコトヲ信ズレバナリ邦家多事特ニ大學ノ前途ニ於テ先生ヲ待ツ所極メテ切ナルモノアリ先生冀ハクハ加餐自愛シテ永ク其ノ力ヲ此ニ致サレンコトヲ式ニ臨ミテ感激己ムコトナシ謹ミテ先生ノ萬壽無疆ナラシコトヲ祈ル

昭和四年十月二十五日

三宅博士古稀祝賀會ヲ代表シテ

吉田 彌 平

記念品贈呈 中山委員

先生閣下並に諸君、私は茲に先生へ記念品贈呈の言葉を朗讀致します

壽

一 御肖像畫

貳 面

一 文學博士三宅米吉著述集

壹 百貳拾五部

一 三宅博士古稀祝賀記念論文集

壹 百部

右本年先生古稀ノ壽ニ達セラレタルニヨリ記念トシテ謹ミテ之ヲ贈呈シ以テ祝意ヲ表シマス何卒御受納アラシムトヲ御願申シマス

昭和四年十月二十五日

三宅博士古稀祝賀會

文學博士 三宅米吉殿

文部大臣祝辭 (専門學務局長 赤間信義氏代讀)

本日東京文理科大學長東京高等師範學校長三宅博士古稀祝賀會ヲ開催セラルルニ當リ一言壽詞ヲ呈スルハ予ノ欣喜ニ堪ヘザル所ナリ

君夙ニ身ヲ教育界ニ投ジテ斯道ニ貢獻スル所少カラズ特ニ考古學及ビ國史學ノ權威トシテ重キヲ學界ニナセルハ周ク人ノ知ル所ナリ任ニ東京高等師範學校ニアルコト前後四十年敎授ヨリ校長ニ進ミ最近文理科大學ノ創設セラレルヤ擢ンデラレテ其ノ學長トナル而カモ尙敎授ノ任ヲ解カズ循々トシテ親シク後進ヲ誘導セラレ其ノ人格ト學識トハ老イテ益々輝ヲ加フ是ヲ以テ學校悦服セザルモノナク全國數千ノ出身者亦敬仰シテ措カズ嗚呼齒徳共ニ高キコト君ノ如クニシテ古稀ノ文字始メテ意義アリト謂フベク衆望ノ歸スル所即此ノ盛儀ヲ見ル其ノ世道人心ニ益スル所亦少カラザルモノアラン君庶幾クハ加餐自愛國家社會ノ爲ニ更ニ百年ノ壽ヲ重ネラレンコトヲ

昭和四年十月二十五日

文部大臣 小橋 一太

來賓總代祝辭 鎌田榮吉君

私は來賓總代として一言御祝ひ申し上げます。先刻來段々三宅先生の學徳について述べられました、由來多くの祝辭稱讚には寧ろ虚飾的のものが多かったのでありますが、三宅先生については祝辭は事實と一致して居ります。そ

して更に尙之に付加ふ可き事が多いのであります。私は三宅さんとは同郷であり又慶應義塾では同窓であります。少年の時から御つき合ひを致して居るのであります。梅檀は二葉より香しといふ事がありますが、三宅さんは子供の時から他の児童と違つて居つた。第一ものを言はぬ(笑聲)、寡言といふか、沈黙といふか、三宅君と云へば物を言はぬ人、ものを言はぬ人と云へば誰にでも分る位であつた(笑聲)。そして勉強する、學を好む事は食よりも甚だしい。慶應を出たのは極く若い時で、殆ど獨學自修に依つて非常なる學識を積まれた立派な學者である。今日學問は學校で教師についてすると云ふ者が世間一般であるがそれは間違つてゐる。勿論學校や教師が無用であると云ふのではない、それらは學問には補助となるものである。三宅君は全く獨學自習で大學者となられた。これは諸君に學校をやめろといふのではない。自分の力で學問し、教師は足らぬ處を補ふものである。教師を離れて學び得る覺悟がなければならぬ。又三宅君は恬淡、寡慾であり、邊幅を飾らない。色々の面白い話がある。……或る老人は三宅さんの事をいつも誇つて話した。三

宅君が家の二階に居た時、屋根の上からいつも水を流す。皆どうした事かと見て居ると、屋根の上で顔を洗つて居るのである(笑聲)。物にこだはらず、時間を惜んで勉強したのである。又或る人は斯んな話をしてゐた、近頃來ないと思つてゐるとシルクハットをやつて來た。どうしたのかと聞けば、青山祭場へ行つた歸りに一寸立ち寄つたのだと云ふ(笑聲)。これも物にこだはらない例である。三宅君は學者であり經營の才もある。學徳を備へて居る。斯様な有徳篤學の人は一般に短命なものである。顔回三十にして死す。しかしこの顔回にして古稀の壽を保つ事が出来れば偉い事になるのである。

文理科大學は私が文部大臣の時、出来る事になつたのであるが、これは當時の内閣に加藤友三郎子の如き聰明な方が主班であつて盡力された事にも依るが、三宅先生が一身を犠牲にして盡されたことが朝野の名士を動かしたのである。今日文理科大學の學長と高等師範の校長とを兼ねる事は、光榮であるが忙がしい。孔子は七十にして心の欲する處に従つて規を超へすと云つたが、三宅君はすでに十三歳にして心の欲する處に従つて規を超へず

あつた(笑聲拍手)。それが七十になられたのであるから三宅君は聖人である。寔に古來稀である。生きた聖人は三宅君の事である。七十才などは何でもない、珍しい事ではない。私などは七十以上である。……先生は古稀はおろか七十七の喜壽をも保たれるであらう。その時は今日以上の會と、より以上の品物を贈つて下さい(拍手笑聲)。又八十八の米壽や百歳の祝賀もある。これまでもなられる様に望むのである。精神の健康は最も必要な事で、人は心に疲ましい事があれば命を縮める。三宅君は心身共に健全で壽を保つに最も必要なものを持つて居る。そこで喜壽米壽、更に百の壽までも進まれる譯である。私は諸君が學校や教師にのみ頼らず、三宅君の如く獨學自修大いに努められる事を望むのである。之を以て祝辭とします。(拍手)

職員總代祝辭 松井簡治君

私共が敬慕致します三宅先生が、古稀に達せられたこの御祝ひに列する事が出来ました事を光榮に存じます。先生が明治十四年以來この學校の前身、東京師範學校に關係されてから、五十年に近いのであります。この間吾

吾教職員の中には直接教を受けた者が多数、左様でないものも間接に指導を受けてゐるのであります。先生の温然と玉の様な霽々と春の様な、愛すべく而も犯す可らざる御風采、沈黙であつて思慮深い、至誠人を感じしめる御人格、何人も敬慕の外ないのであります。先生の御學問については、話すには餘り大き過ぎますし、特に考古學、歴史學に於ては、その一斑を述べるのにも多大の間がかりありますので、私共の關係してゐる國語國文に就いて一二申しますと、先生は明治十四五年の頃「カナノクワイ」を起され、表音的假名遣ひ、言文一致體を唱導せられ、又方言調査標準語の研究をなし、文法についても新機軸を出されるなど國語國文改良の先驅者であつて國語學史上没すべからざる御功績があります。又教育上には、小學讀本、歴史教授法、作文教授法、習字教授法種々進歩的な御發表をなされ、更に從來何人にも看過されて居た日本人の教育研究、例へば貝原益軒の教育法などに就いて研究せられ、歐米人許りでなく、日本人にも斯様な學者のあつた事を世人に知らしめられたのであります。要するに、何れに就いても先覺者であつて明治の文

並ニ本學ノ前身及ビ前々身ノ爲メ明治十四年カラ昭和四年マデ前後滿四十四年ノ永イ間始終餘念ナク御盡シナサレ今モ尙ソレガ續イテ居ルノデアリマスガ此ノ先生ノ貴イ歴史コソハ惟フニ本學開設ト最深イ關係ヲ有スルノデゴザイマス先生ガ嘗テ「學校モ段々陸格シテ來タガ僕モ段々陸格シテ來タノデアアル」ト申サレマシタガ無事圓滿ニ開設ノ運ビニ至リマシタ事ハ實ニ先生ノ御骨折ガ中心トナツテノ結果ニ他ナラナイノデアリマス然モソノ御慈念ノ生ンダ本學開設ノ昭和四年ノ年ガ先生ノ古稀ノ壽ヲ迎ヘサセラレル年ニ相當シタトイフ事ハ此處ニ本學ト先生トノ間ニ奇シキ因縁ヲ考ヘナイ譯ニハ參リマセン實ニ先生ハ師範教育史上ニ於テ燦然トシテ輝ク偉大ナ功績者デアリ否國家的至寶デアリマス希ハクハ折角御自愛遊バサレテ益々本學ノ爲メニ御盡シ下サレ尙學界ノ後進ニ御指導賜ハル様御願ヒシ御祈リ致シマス生等一同ハ先生ノ御旨ニ添ヒ奉ルベク専心學ニ勤シミ修徳ニ勵ミ邦家樞要ノ教育者タルベク精進努力スル覺悟デゴザイマス謹ンデ一言以テ祝詞ト致シマス

昭和四年十月二十五日

東京文理科大學學生總代 石川利三郎
生徒總代祝辭

或ル時ハ慈母トシテ或ル時ハ嚴父トシテ朝ナタナニ敬慕シテヤマナイ三宅先生、私達ハ本日先生ノ古稀ノ祝筵ニ列スルコトヲ得マシテ衷心歡喜ニ堪ヘナイノデアリマス先生ハ幼ヨリ學ニ志サレ専心一意斯道ニ身ヲ委ネラレ遍ク東西古今ノ書ニ通ジソノ濶奥ヲ極メラレ卓越セル學識ハ日本學界ノ向フ所ヲ明ニシ特ニ史學ニ於テノ先生ノ御造詣ハ學界ノ至寶ト唱ヘラレテ居リマス。先生ノ初メテ教育界ニ身ヲオカルルヤ御年十七歲。爾來五十有餘年非凡ナル努力ト濃厚玉ノ如キ御人格ヲ以テ常ニ子弟ノ薰陶ニ盡瘁セラレ其ノ徳化ノ及ブ所實ニ甚大デアリマス。一度先生ノ御人格御風貌御聲咳ニ接センカソノ氣高キソノ崇高ナ御人格ニ對スル敬慕ノ情綿々トシテ湧キ出ヅルヲ覺ユルノデアリマス。斯カル高潔ナル人格者ヲ先生ト仰グ我々ハソノ幸福ニ感激シソノ依テ來タル所ヲ深く諦視シ取ツテ以テ我々人格完成ノ核子トスベキデアリマセウ先生今ヤ鶴髮童顏老イテ益々壯ニシテ而モソノ學識德行ハ世ヲ益ヒソノ一言一行ハ凡テ學界並ニ教育界ノ消長ニ

關スルノデアリマス。今日壽觴ヲ奉ジテ先生ノ御健康ヲ祈ルハ獨リ我々子弟ノ私情ノミデハナク實ニ我が邦家教育ノ爲メノ公情デアリマス。先生ノ齡一日長ケレバ一日國家教育ヲ益スルモノト信ジマス。願クバ先生今後モ一層御健康ニ留意遊バサレテ長ク其ノ御高德ヲ垂レサセラレン事ヲ御祈リスル次第デアリマス先生ノ賀典ニ當リマシテ生徒一同ニ代リ一言ヲ述ベテ祝辭ト致シマス

昭和四年十月二十五日

東京高等師範學校生徒總代 金森彌文
第一臨時教員養成所

附屬中學校生徒總代祝辭

人生七十古來稀ナリト詩人杜甫ハカウ詠ジマシタマコトニ齡七旬ハ古來長壽トシテコレヲ賀スルノデアリマス今回我が三宅先生ガ古稀ニ達セラレ今日ココニ祝賀ノ式ガ舉ゲラレマシタコトハ私共一同ノ心カラ御悦ビ申シ上ゲマストコロデゴザイマス

思フニ我が東京高等師範學校ガ明治五年九月神田昌平校址ニ設立セラレテ以來本年ハ實ニ滿五十七年ニナルノデ

東京高等師範學校附屬中學校生徒總代

附屬小學校生徒總代祝辭

福田城二

昭和四年十月二十五日

アリマスソノ間ニハ敷地ノ移轉附屬學校ノ設置内容組織ノ改善等幾多ノ變遷ヲ經テ居ルノデアリマスガ先生ハ或ハ本校教授トシテ或ハ附屬中學校主事トシテ或ハ東京高等師範學校長トシテ今又東京文理科大學長トシテ終始一貫我が校發展ノ爲ニ御盡シ下サツタノデアリマシテ吾等ノ深く感激致ストコロデゴザイマス又先生ニハ一方ニハ學者トシテ又教育家トシテノ數多ノ學問的創見教育的卓見ヲ世ニ發表セラレ我が國ノ學界教育界ニ貢獻セラレタコトハ實ニ多大デアリマシテ古稀ヲ迎ラレタ今日デモナホ壯者ヲ凌グ御元氣ヲ以テ孜孜トシテ學問ニ教育ニ御精勵遊バサレテキルコトハマコトニ私共ノ感激措ク能ハザルトコロデゴザイマス今日ココニ先生ノ古稀ノ壽ノ御祝ヲ申シ上ゲマスト同時ニ先生ノ今後ノ御健康ヲ御祈リ申シ上ゲル次第デゴザイマス

校長先生 今日ハ先生ガ七十ノオ年ヲオ迎ヘニナツタオ祝ノ日デ誠ニ御目出度ウ御座イマス七十ト申シマスト昔カラ古來稀ナリト云ハレテキルサウデゴザイマスガ先生ガ丁度其ノ古稀ノオ年ヲオ迎ヘ遊バシ然モ此ノ様ニオ元氣デイラツシヤイマスノヲ見マスト私共ハ本當ニ嬉シクテタマリマセン先生ガ本校ニオ出ニナツテカラ實ニ五十年ニモナルトオ聞キ致シマシタ五十年ト云ヘバ私共ノ年ノ四五倍デ私共ガ生レナイ尙四十年モ先デ御座イマスンナニ長イ間此ノ學校ノ事ヲオ世話下サツタノカト思フト本當ニ有難ク感ジマス先生ガオ式ノ時アノニコヤカナオ顔デ静カナオ聲デオ話ヲシテ下サイイマスト私共ハ何時モオ父様カオ祖父様カカラオ話ヲ聞ク様ナナツカシサヲ覺エマス又私共ガ占春園ヤ校庭デ遊ンデキル時先生ガオ通リニナリアノ白イオヒゲノ顔ヲ上ゲテニツコリト笑ツテ下サイイマスト私共ノ胸ニハ嬉シサガコミアゲテ來マス又時々自動車ニ乗ツテイラツシヤルノニ御アヒ致シマシガソノ時ハ何ダカ神々シイ様ナ氣持サヘ致シマシソシテ其ノ度毎ニ此ノ様ニオ偉イ良イ校長先生ヲイタダイテキルノダト思フト唯嬉シイバカリデナク私共モ先生ノ様ナ

立派ナ人ニナラナケレバナラナイト心カラ思フノデアリマス先生ドウゾコレカラモ益々御丈夫デ何時迄モ私共ノ校長先生トシテ永クオ世話下サイマセ 一同ニ代ツテ御祝ヲ申シアゲマス

昭和四年十月二十五日

東京高等師範學校附屬小學校兒童總代

井 染 具 夫

祝電披露 馬上委員

祝電が澤山到着して居ますが、ここに一々御報告する事を略しまして、後に記念誌に於て皆さんに御報告致す事とします。

三宅博士御挨拶

今日この盛な會をお催し下さつて私の七十歳になつたのを御祝ひ下され、色々の記念品を御贈りいただいたて誠に有難う存じます。

私は七十歳になつた事を喜ぶのである。若い時から身體はあまり丈夫ではなかつた。色々病氣にも罹つたりしたので病氣にかゝりたくないと感じた事もあり、色々嫌な思をした事もありました。然し今日になつて前々の事を

思ふと七十歳になつた事を喜ぶのであります今日此の喜びを諸君が共にして下さる事は誠に有難いと思ひます。然し若い時には早く年をとりたいといふ感を持つたこともありません。若い者の云ふ事は人が馬鹿にして聞いて呉れない、そこで早く年を取りたいといふ感を持つた事もあつた。然し段々年がゆくと、今度はさかさまに餘り早く年をとりたいくない、知らぬ間に一年二年三年と年と取つて今日の様になるともつとそろ／＼とりたいと思ふやうになります。これは此處に御出での同年輩の方々にもやはり同感であらうと思ひますが、此處に居る若い人々は斯様な經驗を持つてゐないのである。今日戴いた著作集、あれは私の卅歳から今日まで書いたもの、大部分をあつめたものであります。未だよく見てゐないが、材料に依つて考へて見ると、私があつた本の三分の二——四分の三位は、若い時に書いたもので、今日はあまり書かない。五十歳前後——まあ、四十前後に書いたものが多いので、段々年をとると、仲々書けないのです。世の中の仕事が多くなる事もあれば、健康が衰へる事もあつて却々書けるものではありません。私の經驗に依れば、若

い時は少し夜晩くまで書いても大して身體を悪くする様な事はない。ここに御集りの大多數の諸君は若いのであるから、今の中にしつかり勉強しておく事を望みます。今色々御祝辭や御褒の言葉を戴いたが、あへて當らなと云ふだけのことであります。重ねて御禮を申し上げます。(拍手)

閉會の辭 乙竹委員

本日三宅博士古稀祝賀會を舉行致し、主賓として御招待致しましたところ、先生始め御家族の方多數御揃ひで御來臨下さいました事は、一同の最も有難く思ふところであります。

又文部大臣御代理を初め朝野の名士、其他多數の諸君の參會されました事は、發起人の光榮と致す所でありまして、厚く御禮を申し上げます。目出度く式を閉づるに當り、謹んで三宅先生の萬歳を唱へたいと存じます。甚だ僭越であります。御賛同を御願ひ致します。(一同起立)

三宅博士の萬歳三唱 (拍手)

時に午後二時四十五分。主賓御退場、一同拍手を送る。

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------|--------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|--------|---------|---------|---------|--------|---------|--------|---------|---------|--------|---------|---------|--------|--------|---------|---------|--------|---------|---------|---------|---------|---------|--------|---------|--------|
| 利根川 與作氏 | 堂東 傳氏 | 長澤 恭治氏 | 中山 幸之助氏 | 中山 常雄氏 | 中河 末義氏 | 中村 福太郎氏 | 中村 禎雄氏 | 中島 海氏 | 二宮文右衛門氏 | 丹羽 正長氏 | 根岸 福彌氏 | 野尻 精一氏 | 野々村 運市氏 | 原田 長松氏 | 原田 稔甫氏 | 長谷川 敏正氏 | 橋本 三郎氏 | 橋本 正次郎氏 | 日高 佐七氏 | 廣瀬 正次氏 | 檜山 友藏氏 | 福島 甲子三氏 | 藤本 治義氏 | 藤森 勝郎氏 | 古山 榮三郎氏 | 福山 惟吉氏 | 府瀬川 熊司氏 | 法貴 慶次郎氏 | 甫守 謹吾氏 | | | |
| 富田 玄彌氏 | 富田 達氏 | 長尾 松三郎氏 | 中村 孝也氏 | 中原 宇三郎氏 | 長島 秀男氏 | 直江 俊三氏 | 中島 信虎氏 | 中西 清氏 | 西村 恒雄氏 | 沼田 頼輔氏 | 野口 源三郎氏 | 野村 嘉壽氏 | 野村 重次郎氏 | 花井 重次氏 | 服部 佐氏 | 早川 庄太郎氏 | 橋本 爲次氏 | 廣井 家太氏 | 肥後 盛熊氏 | 平山 誠寛氏 | 藤本 勇氏 | 藤井 利譽氏 | 藤田 豊次郎氏 | 藤村 與六氏 | 福田 源藏氏 | 日置 茂治氏 | 保科 孝一氏 | 堀尾 金八郎氏 | | | | |
| 豊島 松治氏 | 長屋 喜一氏 | 中島 嘉之吉氏 | 内藤 卯三郎氏 | 鍋島 信太郎氏 | 中山 久四郎氏 | 二階 源市氏 | 沼田 龜之助氏 | 野池 清學氏 | 野々山 源治氏 | 長谷川 乙彦氏 | 針替 透氏 | 林 源藏氏 | 原山 房孝氏 | 廣瀬 景氏 | 平田 俊太郎氏 | 平尾 貢氏 | 古川 正澄氏 | 藤岡 繼平氏 | 藤江 喜久夫氏 | 藤原 秀子氏 | 藤田 巖氏 | 北條 三郎氏 | 湯村 惣太郎氏 | 吉田 賢龍氏 | 依田 豊氏 | 米山 喜代造氏 | 吉田 橋莊氏 | 吉田 清氏 | 蓮花寺 則孝氏 | 渡邊 正勇氏 | 互理 章三郎氏 | 若月 岩吉氏 |

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------|--------|--------|---------|---------|---------|--------|--------|--------|---------|---------|--------|---------|--------|--------|--------|--------|---------|--------|---------|--------|---------|---------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|-------|
| 前田 捨松氏 | 松井 簡治氏 | 丸山 良二氏 | 前島 義男氏 | 松橋 達生氏 | 宮川 菊芳氏 | 三上 節造氏 | 宮間 信吉氏 | 宮永 義文氏 | 三浦 光博氏 | 三浦 久四郎氏 | 水野 彌作氏 | 向井 新五郎氏 | 武藏 倉治氏 | 森本 六爾氏 | 森岡 常藏氏 | 森脇 増雄氏 | 森本 角藏氏 | 元田 傳氏 | 山内 淳吉氏 | 山崎 宏氏 | 山下 與三吉氏 | 山口 鏡之助氏 | 山口 清次氏 | 山下 重輔氏 | 安田 敏雄氏 | 山本 洋一氏 | 山口 俊策氏 | 谷田 隆甫氏 | 山村 能久氏 | |
| 松原 行一氏 | 松澤 淑氏 | 増尾 正夫氏 | 牧田 秀賢氏 | 柳田 一二氏 | 嶺口 鹿次郎氏 | 溝川 幸二氏 | 宮川 新二氏 | 皆川 新喜氏 | 水野 國太郎氏 | 水野 正雄氏 | 三苦 正雄氏 | 宗像 逸郎氏 | 村地 長孝氏 | 本橋 傳治氏 | 門司 鐵氏 | 森川 惣一氏 | 馬橋 孝太郎氏 | 諸橋 徹次氏 | 矢部 吉禎氏 | 山本 幸雄氏 | 山田 惣兵衛氏 | 山口 察常氏 | 山口 信一氏 | 矢崎 信三氏 | 山田 良三氏 | 山邊 吉也氏 | 山本 松七氏 | 山本 惠教氏 | 山本 昌造氏 | 山本 猛氏 |
| 松岡 萬次郎氏 | 馬淵 冷佐氏 | 松原 兼助氏 | 松本 亦太郎氏 | 峯田 龜太郎氏 | 三木 正次氏 | 三宅 恒壽氏 | 三浦 佐市氏 | 三木 米造氏 | 三木 武氏 | 村岡 博氏 | 森本 義一氏 | 森 悌次郎氏 | 桃崎 浩氏 | 唐土 齊治氏 | 山崎 孝氏 | 安川 伊三氏 | 山内 佐太郎氏 | 山口 秀夫氏 | 山下 馬之助氏 | 山田 榮氏 | 山田 榮助氏 | 山本 龜助氏 | 山本 信夫氏 | 山本 勸助氏 | 山本 政治氏 | 山田 義直氏 | | | | |

- | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|---------|---------|--------|--------|--------|---------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|-------|--------|--------|--------|--------|---------|---------|---------|---------|--------|-------|---------|--------|-------|---------|--------|---------|--------|
| 湯本 喜一郎氏 | 結城 權兵衛氏 | 吉田 熊次氏 | 吉田 彌平氏 | 吉田 信夫氏 | 横山 傳四郎氏 | 吉田 彌三氏 | 渡邊 世祐氏 | 渡邊 義明氏 | 和田 數雄氏 | 綿貫 哲雄氏 | 湯川 征吉氏 | 湯野 益見氏 | 吉田 靜致氏 | 依田 新氏 | 吉村 秀新氏 | 吉成 翁助氏 | 吉岡 郷甫氏 | 渡邊 季雄氏 | 渡部 平治部氏 | 和田 猪三郎氏 | 渡邊 半次郎氏 | 湯村 惣太郎氏 | 吉田 賢龍氏 | 依田 豊氏 | 米山 喜代造氏 | 吉田 橋莊氏 | 吉田 清氏 | 蓮花寺 則孝氏 | 渡邊 正勇氏 | 互理 章三郎氏 | 若月 岩吉氏 |
|---------|---------|--------|--------|--------|---------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|--------|-------|--------|--------|--------|--------|---------|---------|---------|---------|--------|-------|---------|--------|-------|---------|--------|---------|--------|

祝賀園遊會

祝賀式閉會後直ちに大塚學友會主催にかゝる祝賀園遊會を催す。朝來の雨のためさきに設備したる占春園園遊會場の使用不便となるにより、主賓室、來賓室、第一控室等に於てそれ〴〵茶菓の饗應をなし、第二控室には茶菓引換所を設く。學生生徒は占春園にて饗應を受け、祝意を表せり。午後三時十分より講堂に於て數種の餘興を始め、階下はその觀覽者にて滿員の盛況を呈せり。三時半、主賓三宅博士始め御家族一同の御來觀あり、かくて四時過ぎをもつて閉會す。

三 賀 宴

祝賀會概況

朝來の雨はなほ霽れざるも、熱心なる有志參會者は午後五時頃より、陸續丸の内濠端なる東京會館へと來集す。華かなる會館の大玄關左側の階下控室は溢るるばかりの會衆、立ちながら語つて定刻を待つ。やがて三宅博士及び御家族の方々は晝間よりの御疲れの色もなく、齋藤委員の御案内にて御着車、直に四階控室に入らる。かくて總員三百二十名、四階大廣間の食卓につく。中央メインテーブルには盆栽、花籠を置き、博士及び御家族は朝野の貴顯紳士と共にこゝに着席せらる。時に六時を過ぐる四十分。

挨拶 齋藤委員

今夕は三宅先生の古稀祝賀の意味を以て朝野の貴顯紳士、全國四千の門弟等の代表者、及び東京文理科大學、高等師範の職員並に在學生等が集まつてこの賀宴を催したのであります。先生の古稀をお祝することについては本年の初から相談があつて、その期日を十月の中旬頃と豫定したのであります。が、十月二十六、七、八日の三日に互つて全國中學校長會議のあることを知つたのでその前日たる今日こゝに開くこととなつた次第であります。

す。即ち北は樺太、北海道から、西南は朝鮮、滿洲、臺灣に至るまで日本全國各府縣から多くの會員が馳せ参じたのでございます(拍手)。卓上にさし上げましたものは至つて粗末であります、四千人の同窓の心をこめたものとして召し上つて戴きたいと存じます。

先づ一言先生にお祝の言葉を申し上げます。人生七十古來稀なりといふ意味は、世間ではたゞ七十歳まで生きたことを祝つてゐる様であるが、我が三宅先生には其れ以上に尙幾多の古來稀な點があるのであります。第一に十七歳の青年の時に官立新潟英語學校の教員となられてから五十餘年の永い間、幾千百の子弟に對して暖かい温情と該博なる知識とを以て教育されたことは古來稀なりと申すべきであります。第二に二十四五歳の頃、假名主義を主唱され我が國の國語界教育界に一大センセーションを捲き起されたことは、これまた古來稀なりと申すべきであります。第三に明治十九年(二十七歳の時)日本史學提要第一編を公にせられ、當時の國史學界、考古學界に曉鐘を傳へられ、其の十年後に考古學會を起して科學としての考古學を建設せられ、四十餘年後の今日尙その會

長として日本の考古學界を指導せられつゝあるは、これ亦古來稀なりと申すべきであります。第四に教育改良家として習字教授法、歴史教授法改良の先驅となり、國語讀本、作文教科書改革に一新時期を劃し、日本文法書に新機軸を出されたことも實に古來稀なりと申すべきであります。また一面、史學界の權威、考古學の泰斗として先人未發のを見を立てらるゝと同時に、他面、實際教育家として恩愛を以て生徒を導かれ、一世の師表たること、其の他舉げらればいくらもありますが、私達の知つてゐる限り、先生の如きはまことに古來稀であると存じます。吾々東京高等師範の卒業生としては、先生に對し殊に懐かしい感が強いのであります。先生は二十二歳の青年の時から今日まで凡そ四十九年の間、わが高等師範に奉職されたのでありますから、こゝ一年有餘で金婚式を舉げるわけになります(拍手)。吾々は先生の古稀の壽に達せられたのを喜ぶと共に、幾重にも感謝の誠を表はしたのであります。卒業生の心中を申上ぐれば、今夜は古稀祝賀會と共に謝恩會の意味をも含めてをるのであります(拍手)。尙終りにこゝに會したものは三百餘人であり

ますけれども、實は四千名の代表者としての會であることとお酌取り下さるやうお願ひ致します。(拍手)

三宅博士御挨拶

本日は私の七十歳になつたのを祝して、盛な祝賀式をお催し下さつたことを深く感謝して居ります。更に又この賀宴をお開き下されてお招きに預り、家族の者までも御鄭重な御馳走にあづかり、深く御禮を申し上げます。只今齋藤さんから古來稀なりの意味の仰がりましたが七十歳が古來稀であるとは昔から誰も申すことで、私もこれを喜ぶのである。七十になつたのはこれは事實であるが、其の他の古來稀と齋藤さんの云はれたのは事實といへない。私は敢へて當らないのであります。若い時には種々の野心があり、あれもこれもと仕事をやりかけたが何一つやり遂げた事はない。唯他の諸君より一步先に考がついてやり出した事はあるかも知れぬ。これとても中途で餘儀なく中止してしまつた次第で、今日までままとつたものはないのであります。さういふわけで只今のお話は半分だけ有り難く頂く事にします。終に今夕私のためにわざわざお集り下さつたことを感謝します。(拍手)

乾杯 服部宇之吉博士

甚だ僭越であります、只今幹事の命令によりまして私は皆様とともに盃をあげて三宅博士の萬歳を三唱したいと在じます。

一同起立乾杯して萬歳を三唱——(拍手)

文部次官中川健藏氏

私は最近に文部省に参りまして三宅先生と同じ道にすすむこととなり、今夕の賀宴にも列する光榮を有したものであります。私は立派な教育の大家としての先生の御成功と御長壽とをお祝するために参つたので、別に用意は致しませんでした、一言申上げのお許を得たいと存じます。

三宅先生は齋藤君からお話のあつた如く、立派なことばかりおありの方であります。古來稀なりといふ意味は今迄世間並のことだけしか知りませんでした、今その意味の深い事を知りました。こゝに深重な價をつけて下さつたのは實に先生の御高徳のお蔭であると思ひます。かく立派な先生を教育界に得たことは多大の誇とする所で、邦家のため欣賀に堪えません。今夕の會合はかうい

ふ意味で教育界の爲眞にめでたい會であると信じます。先生の御健康をお祈りいたします。(拍手)

三上參次博士

私も幹事のお薦によつて立ちましたが、齋藤君の言を補ふことが出来るかと存じます。これは私が深く感じてゐる事で三宅先生の顔を見ながら思ひ出した事でありませぬ。先生はいつも沈黙であり、温厚な方であります。嘗て明治四十三四年の頃、文部省の教科書調査委員となつた時の事です。色々の問題があつて私共大そう困つたのですが——貴族院の連中が、調査委員の中に三宅といふ者が二人(まぢがつて先生と私とをさす)ゐるが、一人は温厚なのに他の一人は少壯過激で困るといはれた事があります。私は自ら温厚着實と信じてゐたのですが、先生とは比較されてはさう見えたのでありませぬ。全く頂門の一針と存じました。私はこの沈黙温厚な點を古來稀のみに數へたいと存じます。

尙先生が御長命であることに幾多の長所がある事を申しませう。先生は仁者である。仁者は命長し、この格言の通りである。若しさうでなければ古人我をあざむくの

と感じて來ました。然るに先生はこの私をひき立て指導して下さつて今日に至つたのであります。

私が十年間に先生から受けた人格的影響は此處に居らるる諸君に劣らぬものと思ふ。一面私は廣島に先生の如き方を有せぬのを氣の毒に感じてをります。今日の祝賀式に列して色々お詞を拜聴して痛切な刺戟を受けたものは恐らく私が一番であると信じます。私は大いに奮勵せねばならぬ事を最も強く感じました。三宅先生の人格識見は唯東京高師や東京文理科大學に及んだのみでなく、間接には私を通して廣島にも及んでゐるものが少なくありません。此の點で私は廣島を代表して御禮と御祝とを申し上げます。今後益々御長命なされ、尙此の職務をお取りになつて一層の刺戟をお與へ下され、廣島が尙大なる御指導をお受けする事を期待してやみませぬ。(拍手)

白鳥庫吉博士

今日の祝賀式に於てまた賀宴の會場に於て、三宅先生の人格學力に就て各方面から色々な事を申述べられましたから、其の上先生の學徳を數へあげる餘地はありません。いま幹事の命によつて立つた次第であります。實

です。又先生は沈黙である。不必要な言葉を發せられせんから、勢力のむだに費へるのを蓄へて置かれる(笑聲)。即ち長壽になる所以であります。更に先生は大の鰻好きで居らつしやる(拍手)。十年一日のように鰻井を召し上つてゐられます。鰻の健康に良い事は萬葉集の歌にもある通りで(笑聲)、大倉男爵などは毎日召し上られてあの長壽を保たれたのであります。かういふわけで先生は御長壽である。お名前の米壽の祝は勿論、百年の後をお祝するに至ることと信じます。(拍手)

廣島文理科大學長吉田賢龍氏

私も一言祝辭を述べる光榮を有します。此處に居られる大多數の諸君は東京高師で先生の御薫陶を受けられた方々と思ふ。其れ以外で十年以來先生の御薫陶に預つてゐるのは私ではないかと存じます。私が現在の廣島高師に着任してから満十箇年になるが、其の間三宅先生より享けた所は實に少くありません。日本に男子の高等師範が二つ、その一つに三宅先生、そのお相手がこの私であることはお氣の毒に思つて居ります。文理科大學が出来るに及んでもまたかうなつて益々先生に對して相すまぬ

はおすゝめなくともお祝を申し上げたいといふ精神は持つてゐたのであります。私は諸君と同じく先生の御薫陶を蒙りましたのですが、非常に若い記憶力も鋭敏で人物を作るに必要な時期に、先生より日々御教訓をうけた一人であります。先生が新潟から轉せられて千葉中學の教諭になられた時先生の御年はたしか二十歳、私は十五歳で五歳の年下でしたが、そこで教授をうけた一人でありませぬ。先生は地理、化學等自然の學問に關する科目をうけもたれました。私共の英語は變則で一行も満足には讀めなかつたのでしたが、其の後東京に來て始めて、三宅先生の英語が正則で力のおありの事を知つたわけです。その頃私共は *the copy* をスチヨラーと讀む程度のものであつて今から考へると全く變則でした。後に東京に來て下宿住居をしました。爲にならぬといふ議が同僚間に起つて、故木内重四郎君や石井菊次郎君など、共に、三宅先生のお宅へ同居することを、木内氏を通じて申出た處、すぐ快諾されました。その頃先生は小石川傳通院の貞昭庵の中に寄寓されて居られた。そこへ我々三人と他にも一人置いてもらつて、朝夕御薫陶をうけたのであり

ます。かような關係があるのでこの恩誼に一言述べざるを得ないのであります。

私が先生を敬慕する點を申し上げると、第一先生の學識・趣味の廣いことである。自然科學から歴史・國文・考古學・英語は申すまでもなく獨乙語までも研究されたと聞いて居ります。即ち學問上に於て一方に偏する事がないのである。今日まで發表されたものが尨大な二千頁にも達する書物となつたのを見ても、先生の學力の旺盛でかつ廣い事を知ることが出来ます。兎角自然科學に興味を有する者は、人文科學を疎んじ勝ちであります。先生にはこの點は少しも見られない。この兩方をかね併せられてゐるので、實に學者として理想的な方であると日頃から敬服してゐる所であります。

次に先生は學問と共に教育及びそれに伴ふ人事上の實務に興味を有して居られる。これは仲々むづかしい事で學校の管理を主とすれば學問が廢り、學問に深入すれば管理がうまくゆかないものであります。先生は此の兩方を兼ね備へられたのは尋常人の及ぶところではありませぬ。これが私の日頃敬服してゐる第二であります。

されば先生は學者として理想的であり、教育者として最も理想的であると申さざるを得ないのであります。これが先生の今日あるを得たる所以であり、今日の如き盛大な宴の張られた所以でもあると思ひます。先生は若い時には瘡せて居られ、御長命が出来るかと疑はれた程でありましたが、其の後未だ大病にかゝられた事もない、至つて御健康であり精神的の御活動も少しも衰へてゐない。されば益々御壯健にて米壽の宴の開かれる日のある事を信じて疑はないのであります。ひとへに御自愛をお祈りいたします。(拍手)

川村理助氏

本日は學校講堂に於て朝野の貴顯方から幾多のお話がありましたので、私はこの上お祝を申上げる事は出来ません。たゞ本日の式で最も感服いたしましたのは、附屬小學校の子供の祝辭であります。子供は、先生が占春園のそばを通りになる時、白いひげの顔をあげてにつこりと御笑ひになり、又自動車の中にしづかにおさまつておいでのお姿を時々お見うけますといつて、具體的に申述べ、更に之を批評して誠に神々しいと結びました。

此の一言には、他の多くの祝辭も一として及ぶものはありません。他のは先生を具體的に完全に申したのでなく、唯一面を解剖したに過ぎぬものですから、人々によつて意見は違ふ筈であります。包容的な適切な批評としてこれに及ぶものは断じてありません。私はあの附屬小學校の子供の祝辭が一番よく出来たといふことを申してお祝の辭といたします。(拍手)

賀詩二首 (内堀維文氏代讀)

敬賀 三宅博士古稀之壽

獻壽南山端色濃 人生七十趁仙蹤 童顏麗日閑看菊 老

骨清秋笑撫松 考古夙欽新史眼 育英長仰舊音容 茗溪

回首多才俊 殊域何須萬戶封

己巳季秋

市島 賢拜具

敬賀 三宅博士古稀之壽

銀燭照筵仙鶴翔 玉壺春暖樂陶陶 遐齡已契南山久 盛

德偏同北斗高 擊日嶺松欽老健 傲霜籬菊憶餘豪 古稀

占得人間福 願壽今宵見俊髦

己巳季秋

市島 賢拜具

增戸鶴吉氏

祝賀會概況

九五

先刻は情熱し感きはまつた爲、寡黙なる三宅先生に對して大層愧づべき事を致した粗忽をお詫び致します。私は卒直に直觀的に感じた事を申上げて一言お祝を述べたいと存じます。今日の式場は終始感激を覺えました。まことに恩師を祝する壯嚴なる光景、慈愛深い老大家のお祝でした。式場にはあらゆる人々が揃ひました。かような祝賀會がどこにありましたらう。今後と雖も絶無であらうと存じます。これを以てお祝の詞とします。(拍手)

閉會の挨拶 峰岸委員

まだ御祝辭も澤山あることと存じますが、時刻も移りますので甚だ残念ながらこれで閉會にいたし、後は階下の控室で御話合ひ下さることを願ひします。どうぞ先生の御退席までそのまゝお待ち下さい。(拍手)

博士及び御家族には別室に御小憩の後、御機嫌よく自動車に分乗、見送りの人々に挨拶されつゝ、降りしきる雨中を歸途につかる。時に午後九時。

祝電

團體として

○北海道

盛會を祝し先生の御健康を祈る

旭川若溪會會員一同

○奥羽

三宅先生の古稀を御祝ひします

青森支部

遙に三宅先生の古稀を祝し猶御健康長く斯界の爲に盡されんことを祈る

秋田師範若溪會會員一同

御盛會を祝す

山形支部

三宅先生の御慶福を祝し御盛典を賀す

福島支部

○關東

三宅先生の壽を祝す

茨城若溪會支部

御祝ひ致します

栃木・今市中學若溪會會員

先生の千葉師範に勤められたる光榮を想ひ斯に先生の古稀を祝し奉る

千葉師範學校校友會

○中部

先生の御健康を祝し多年一日の如く我母校學界の爲に盡

されたる顯著の御功績に對し深く敬意感謝の意を表し猶一層の御自愛を祈る
靜岡若溪會支部
三宅先生の古稀を祝し御健康を祈る

岐阜師範學校若溪會會員

大垣市立高女若溪會會員

御盛會を祝し三宅先生の御健康を祈る

新潟師範學校若溪會會員一同

謹みて恩師の古稀の壽を祝し愈々御康健を祈る

富山支部

滋賀支部一同

先生の御健康を祝し御自愛を祈る

滋賀師範學校若溪會會員一同

三宅先生古稀の壽を祝し奉る

京都支部

盛會を祝し先生の健康を祈る

姫路支部

三宅先生の御健康を祝す

姫路市立高女若溪會會員一同

三宅先生の古稀の壽を祝します益々御健康ならん事を祈る

和歌山若溪會支部長有元久五郎

團體として

○北海道

盛會を祝し先生の御健康を祈る

旭川若溪會會員一同

○奥羽

三宅先生の古稀を御祝ひします

青森支部

遙に三宅先生の古稀を祝し猶御健康長く斯界の爲に盡されんことを祈る

秋田師範若溪會會員一同

御盛會を祝す

山形支部

三宅先生の御慶福を祝し御盛典を賀す

福島支部

○關東

三宅先生の壽を祝す

茨城若溪會支部

御祝ひ致します

栃木・今市中學若溪會會員

先生の千葉師範に勤められたる光榮を想ひ斯に先生の古稀を祝し奉る

千葉師範學校校友會

○中部

先生の御健康を祝し多年一日の如く我母校學界の爲に盡

されたる顯著の御功績に對し深く敬意感謝の意を表し猶一層の御自愛を祈る
靜岡若溪會支部
三宅先生の古稀を祝し御健康を祈る

岐阜師範學校若溪會會員

大垣市立高女若溪會會員

御盛會を祝し三宅先生の御健康を祈る

新潟師範學校若溪會會員一同

謹みて恩師の古稀の壽を祝し愈々御康健を祈る

富山支部

滋賀支部一同

先生の御健康を祝し御自愛を祈る

滋賀師範學校若溪會會員一同

三宅先生古稀の壽を祝し奉る

京都支部

盛會を祝し先生の健康を祈る

姫路支部

三宅先生の御健康を祝す

姫路市立高女若溪會會員一同

三宅先生の古稀の壽を祝します益々御健康ならん事を祈る

和歌山若溪會支部長有元久五郎

謹みて三宅先生の壽を賀し奉る

和歌山縣日高若溪會會員

御盛典を祝し先生の御健勝を祈る

奈良縣若溪會支部

○中國

三宅先生の古稀祝賀の盛會を祝す

岡山若溪會支部

御盛典を祝し先生の彌榮を祈る

山口縣若溪會支部長島田

○四國

遙に祝意を表す

徳島支部

○九州

先生の古稀の壽を遙に祝す

福岡縣支部

先生の御清福を祈る

長崎師範學校若溪會會員

御盛會を祝す

熊本若溪會

三宅先生の御健勝を祝福す

大分支部

宮崎支部一同

謹んで先生の御健康を賀し本日の盛典を祝す

御盛典を祝す

盛岡菅野義之助

三宅先生古稀の齡を祝し上げます

仙台北山光彦

605
38

祝電

三宅先生の古稀を祝す
謹みて先生の御榮へを祝ひ奉る

仙台 郷野 敏雄
仙台 高野 久八郎

○關東

謹みて先生の御健勝を祝福し奉る
福島平 本多 忠綱
山形酒田 太田喜太郎
横須賀 藤田 高次
横濱 齋藤 儀重
古稀の盛典を祝す
同 松浦 松雄
御盛典を祝す
埼玉浦和 嶋山 彌榮
静岡吉原 石井 午二
御盛典を祝す
東京 山田 良三
謹んで祝す
埼玉浦和 茨木 清次郎
盛典を賀し先生の御健康を祝す

埼玉浦和 海野 洋
東京 眞船 民伊
千葉銚子 小山 文太郎
群馬前橋 阿部 與作
盛典を祝す公務の爲列席し得ざるを遺憾とす

(旅行中より) 東京 武井 群嗣

○中部

御盛典を祝す
岐阜北方 吉田 梅治
岐阜關 柏木 龜藏
盛會を謹賀す
長野上諏訪 小松 武平
三宅先生の御功績と御恩徳を衷心より感謝し益々御健康を祈る
長野飯田 春日 賢一

古稀の御祝を祝す

愛知豊橋 澤 三郎
愛知岡崎 柳原 秀太郎
御盛典を祝す
同 岡田 良治
御盛典を祝す
同 新田 良勇
御盛典を祝す
同 稲石 義雄
盛典を祝す
山梨甲府 安島 弘
遙かに先生の古稀を祝す
富山 石井 逸太郎

○近畿

三宅先生古稀祝賀の盛典を賀し遙かに先生の御健康を祝し奉る
和歌山 奥 源次
先生の古稀を祝す
奈良 嶺山 榮次
三宅先生の古稀の賀を祝す
奈良 高橋 章臣
先生ほんとうに嬉しいです益々御達者で御盡し下さい
奈良高田 井上 嘉三郎
御盛典を祝し先生の御健康を祈る
神戸 三國谷 三四郎

盛典を祝す「ゆるぎなき道のしるべや古稀深し」

兵庫蘆屋 谷 本 富
御盛典を祝し先生の御健康を祈る
大阪茨木 長 沼 享

けふの盛會を祝し先生の御健康を祈る
同 奥村 幸 衛

遙かに盛會を祝し先生の御健康を祈る
大阪 齋藤 嘉 吉

古稀の賀に際し心から御祝ひ申します
京都 山根 徳太郎

遙かに御盛典を賀し先生の萬歳を祈る
同 川面 松 衛

先生の古稀を祝賀し益々御健康にまさんことを御祈り申す
三重上野 高畑 淺次郎

○中國

御盛典を祝す
岡山 山口 源 藏
御健康を祝す
廣島尾道 田邊 領一

神様の様な三宅先生の七十の賀を祝す
廣島 齋藤 鹿三郎

遙かに先生の古稀を祝し益々御健康を祈る
廣島松永 堀込 餘重

祝電

愛知岡崎 岡田 良治
御盛典を祝す
同 新田 良勇
御盛典を祝す
同 稲石 義雄
盛典を祝す
山梨甲府 安島 弘
遙かに先生の古稀を祝す
富山 石井 逸太郎

古稀の御祝を祝す

愛知豊橋 澤 三郎
愛知岡崎 柳原 秀太郎
御盛典を祝す
同 岡田 良治
御盛典を祝す
同 新田 良勇
御盛典を祝す
同 稲石 義雄
盛典を祝す
山梨甲府 安島 弘
遙かに先生の古稀を祝す
富山 石井 逸太郎

○近畿

三宅先生古稀祝賀の盛典を賀し遙かに先生の御健康を祝し奉る
和歌山 奥 源次
先生の古稀を祝す
奈良 嶺山 榮次
三宅先生の古稀の賀を祝す
奈良 高橋 章臣
先生ほんとうに嬉しいです益々御達者で御盡し下さい
奈良高田 井上 嘉三郎
御盛典を祝し先生の御健康を祈る
神戸 三國谷 三四郎

○四國

御祝ひ申し上げます
山口萩 石田 爲國
先生の益々御健康を祈る
山口 間谷 力
先生の古稀を祝す
高松 千代延 昊
御盛典を祝し先生の益々御健勝ならん事を祈り奉る
松山 林 傳次
盛典を祝し先生の御健康を祈る
高知 中村 正持
謹みて盛會を祝す
徳島日和佐 徳玉 靚吉

○九州

先生の御健康を祝し母校の發展を祈る
福岡 野上 源造
盛典を祝す三宅先生萬歳
佐賀 賀生 駒萬治
遙かに御盛典を祝す
長崎 橋本 文壽
三宅先生の御健康を祝す
大分 廣瀬 幸吉
遙かに御祝ひ申す
宮崎福島 高島 茅夫
三宅先生古稀に達せられたるを賀す
大分白杵 原澤 義太郎

御盛典を祝し先生の御健康彌榮ならん事を祈る
熊本 太田 藤一郎

祝電

今日の御祝を祝ひまつる 鹿兒島 萱場今朝治
先生の御健康を祝す 那 覇

東京會館宛(電文)

○臺灣
三宅先生の御健康を祝し御清福を祈る 臺 南 田中友二郎

御盛會を祝す 東 京 入田整三
切に三宅先生の御健康を祈る 同 伊藤長七
御盛會を祝す 同 後藤牧太

○朝鮮
御盛會を祝し御健康を祈る 釜 山 宇都宮益治
三宅先生の古稀を祝す 京 城 重田勘次郎
遙かに先生の古稀を賀し奉る

遙かに謹みて三宅先生古稀の賀を祝す 忠南公州 江頭六郎
平 壤 長谷川鮑四郎

○滿洲
年と共に榮へませ二日歸朝 新旅順 津田元徳

○その他の通信

謹んで恩師三宅博士古稀の壽を奉祝す

熊 本 出田 猛

謹みて先生の古稀の賀壽を迎へさせられたるを祝福し奉る

兵 庫 高尾 豊吉

三宅博士古稀祝賀會收支決算報告(昭和四年十二月十二日現在)

總 收 入

壹萬貳千八百五拾六圓貳拾壹錢也

◎收 入 之 部

第一項	贊 成 者 釀 金	一〇、八九五・〇〇
第二項	大塚學友會釀金	九二七・二〇
第三項	軍人講習科、研究科釀金	五二・七〇
第四項	附屬中學校生徒釀金	一二九・三〇
第五項	附屬小學校兒童釀金	一七六・二〇
第六項	茗溪會ヨリノ補助金	五〇〇・〇〇
第七項	雜 收 入	一七五・八一

三宅博士著述集刊行費

總 支 出

壹萬壹千五百九拾九圓五拾七錢也

◎支 出 之 部

第一項	祝 賀 式 費	五二・七四
第二項	賀 宴 費	五二九・六七

第三項	園遊會費	一、五五三・八〇
第四項	記念論文集別刷費	九七・八六
第五項	三宅博士著述集購入費	一、五三六・〇〇
第六項	記念論文集購入費	一、三七九・六〇
第七項	記念菓子費	三〇五・五〇
第八項	印刷費	三八三・五七
第九項	事務費	三一五・九一
第十項	通信送費	四三一・七四
第十一項	振替貯金登記料	四〇・一四
第十二項	三宅博士肖像畫製作費	二、〇七〇・〇〇
第十三項	三宅博士記念寫真調製費	九八五・〇〇
第十四項	記念誌出版費	一、一二五・〇〇
第十五項	三宅博士著述集刊行費	五〇〇・〇〇
第十六項	雜費	二九三・〇四

差引剩餘金

壹千貳百五拾六圓六拾四錢也

右剩餘金ノ處理ニ付テハ特別委員ニ委託シテ原案ヲ作製シ
實行委員會ニ於テ決定スル筈ナリ

祝賀會贊成者芳名簿

金九百貳拾七圓貳拾錢	大塚學友會	金五圓	秋山眞造氏	金參圓	秋山武太郎氏
金壹百貳拾九圓參拾錢	附屬中學校生徒一同	金參圓	秋山兵三郎氏	金參圓	秋山 幹氏
金壹百七拾六圓貳拾錢	附屬小學校兒童一同	金貳圓	秋山蓮三氏	金貳圓	秋山龍太郎氏
金四拾六圓七拾五錢	軍人講習生一同	金貳圓	秋山義男氏	金五圓	相原賢藏氏
金五圓九拾五錢	研究科乙類一年生一同	金參圓	相澤留五郎氏	金參圓	相澤英次郎氏
金拾圓	阿藤 質氏	金貳圓	相田幸維氏	金貳圓	相澤定芳氏
金五圓	阿妻利八氏	金貳圓	青柳善吾氏	金貳圓	青地忠三氏
金參圓	阿保談二氏	金貳圓	青木榮藏氏	金拾五圓	青木常雄氏
金拾五圓	阿部八代太郎氏	金貳圓	青木耕雲氏	金貳圓	青木延治氏
金五圓	阿部忠次郎氏	金貳圓	青木藤吉氏	金貳圓	青野壽郎氏
金貳圓	阿部善一氏	金貳圓	新井豐治氏	金貳圓	天谷庸三郎氏
金貳圓	阿部與作氏	金貳圓	淺海正三氏	金五圓	東辰藏氏
金五拾圓	有高 巖氏	金拾圓	淺越貫一氏	金貳圓	淺田重教氏
金五圓	有光 一氏	金五圓	淺野 廣氏	金參圓	淺岡美德氏
金參圓	有吉啓介氏	金貳圓	淺井強治氏	金拾貳圓	淺井治平氏
金參圓	有坂新助氏	金貳圓	淺賀幾之助氏	金拾圓	淺賀辰次郎氏
金五圓	近江二作氏	金貳圓	朝倉 茂氏	金貳圓	朝香四郎氏
金拾圓	雨宮新七氏	金貳圓	朝日奈泰日子氏	金貳圓	朝倉慎三氏
金五圓	會田彦一氏	金貳圓	荒川修一郎氏	金貳圓	朝比奈進氏
金五圓	秋鹿見橋氏	金五圓	荒井庸夫氏	金貳圓	荒川信吉氏
金貳圓	秋葉由郎氏	金貳圓	荒井清文氏	金參圓	荒井 尙氏
		金貳圓		金拾圓	赤羽廣志氏

祝賀會贊成者芳名簿

祝賀會贊成者芳名簿

金參圓	板倉 安平氏	金參圓	板垣 繁樹氏
金貳圓	板谷 實平氏	金拾圓	井上 一氏
金貳圓	井田 秀夫氏	金五圓	井上 宗助氏
金貳圓	井田 竹治氏	金五圓	井上 桂氏
金五圓	井上 庄三氏	金五圓	井上 忠壽氏
金五圓	井上 嘉三郎氏	金五圓	井上 敬正氏
金五圓	井東 豐彦氏	金五圓	井澤 長十郎氏
金參圓	井村 貫一郎氏	金參圓	井上 國太郎氏
金參圓	井上 正氏	金參圓	井澤 敬次氏
金參圓	井上 春雄氏	金參圓	井窪 壽雄氏
金貳圓	井深 次郎氏	金貳圓	井上 正平氏
金貳圓	井上 孝太郎氏	金貳圓	井上 宗治氏
金貳圓	井上 完爾氏	金貳圓	井上 權治氏
金五圓	一谷 源八郎氏	金五圓	市島 賢次郎氏
金參圓	一木 鐵彦氏	金五圓	市川 源三氏
金拾圓	市村 清次郎氏	金參圓	市原 哲夫氏
金參圓	市川 準一氏	金貳圓	市毛 金太郎氏
金五圓	泉 英七氏	金貳圓	出原 仁氏
金貳圓	出井 浩氏	金五圓	射手 矢貞三氏
金參拾圓	伊藤 長七氏	金拾圓	伊藤 信一郎氏
金拾圓	伊藤 武氏	金拾圓	伊勢田 春市氏
金五圓	伊藤 謙一郎氏	金五圓	伊藤 保三郎氏
金五圓	伊藤 宣一郎氏	金五圓	伊藤 源作氏
金五圓	伊藤 清一氏	金五圓	伊藤 善吉氏
金五圓	伊坂 員維氏	金參圓	伊藤 又二郎氏

金參圓	伊藤 昌庸氏	金貳圓	伊古美 郁郎氏
金參圓	伊藤 宣將氏	金貳圓	伊藤 靜氏
金參圓	伊藤 美年氏	金貳圓	伊藤 八郎氏
金貳圓	伊藤 三勇作氏	金貳圓	伊藤 榮一氏
金貳圓	伊藤 正良氏	金貳圓	伊藤 新七郎氏
金貳圓	伊藤 顯道氏	金貳圓	伊藤 千平氏
金貳圓	伊藤 英逸氏	金貳圓	伊藤 眞吾氏
金貳圓	伊賀 清男氏	金貳圓	伊井 松藏氏
金五拾圓	稻葉 彦六氏	金拾圓	稻葉 常楠氏
金五圓	稻垣 省吾氏	金五圓	稻川 遵氏
金五圓	稻垣 賢敷氏	金參圓	稻田 正次氏
金參圓	稻田 貢氏	金參圓	稻次 靜一氏
金參圓	稻荷山 資生氏	金參圓	稻葉 繁二氏
金貳圓	稻垣 芳之助氏	金貳圓	稻垣 幸市氏
金貳圓	稻崎 修平氏	金貳圓	稻田 又吉氏
金貳圓	稻生 政次氏	金參圓	茨木 清次郎氏
金拾圓	今井 嘉橋氏	金五圓	今井 三郎氏
金五圓	今井 學治氏	金參圓	今泉 七郎氏
金參圓	今村 嘉雄氏	金參圓	今村 重藏氏
金參圓	今村 孝次氏	金參圓	今村 豐明氏
金貳圓	今井 弘氏	金貳圓	今井 盛太郎氏
金貳圓	今木 一郎氏	金貳圓	今島 益造氏
金壹圓	今西 四良氏	金貳圓	今村 一郎氏
金壹圓	今井 靜子氏	金壹圓	今井 潛氏
金參圓	入田 整三氏	金貳圓	入田 利美氏

祝賀會贊成者芳名簿

金參圓	赤澤 竹治郎氏	金拾圓	赤木 萬二郎氏
金五圓	赤木 愛太郎氏	金參圓	赤木 志津子氏
金五圓	赤塚 吉次郎氏	金貳圓	赤沼 覺郎氏
金五圓	安部 彦二郎氏	金參拾圓	安東 壽郎氏
金參圓	安東 豐作氏	金參圓	安藤 則太郎氏
金貳圓	安藤 猛氏	金貳圓	安藤 基平氏
金貳圓	安藤 保氏	金貳圓	安達 茂夫氏
金參圓	足立 芳之助氏	金貳圓	足立 喜六氏
金貳圓	足立 利庸氏	金拾圓	渥美 正氏
金貳圓	渥美 眞氏	金五圓	天澤 邦彦氏
金參圓	天野 博治氏	金參圓	蘆田 伊人氏
金五圓	芦田 正喜氏	金貳圓	芦澤 博竝氏
金五圓	飯坂 勇藏氏	金五圓	飯田 恒作氏
金五圓	飯田 義夫氏	金參圓	飯山 春雄氏
金參圓	飯島 俊一郎氏	金貳圓	飯岡 正助氏
金貳圓	飯島 俊男氏	金貳圓	飯野 亥三郎氏
金貳圓	飯島 正氏	金貳圓	飯村 眞氏
金拾五圓	飯島 東太郎氏	金拾圓	池岡 直孝氏
金拾圓	池見 利夫氏	金參圓	池上 庄次郎氏
金五圓	池本 義夫氏	金參圓	池原 茂二氏
金參圓	池上 釋氏	金參圓	池袋 宗行氏
金參圓	池松 良雄氏	金四圓	池城 安伴氏
金貳圓	池田 清氏	金貳圓	池永 浩氏
金貳圓	池野 廣中氏	金貳圓	池本 靜太氏
金貳圓	庵崎 亮慶氏	金五圓	五十嵐長之丞氏

金五圓	五十嵐 米八郎氏	金參拾圓	生駒 萬治氏
金五圓	五十嵐 一郎氏	金五圓	生田 五郎氏
金壹百圓	石川 正作氏	金拾圓	石川 七五三二氏
金貳拾五圓	石川 國治氏	金拾圓	石川 弘氏
金貳拾圓	石川 林四郎氏	金拾圓	石川 清一氏
金拾圓	石井 逸太郎氏	金拾圓	石川 眞一氏
金拾圓	石井 午二氏	金五圓	石川 義次氏
金拾圓	石黑 魯平氏	金五圓	石川 重祐氏
金五圓	石川 文平氏	金五圓	石塚 好忠氏
金五圓	石田 茂作氏	金五圓	石塚 多氏
金五圓	石崎 恒次郎氏	金五圓	石野 悌氏
金五圓	石橋 幸太郎氏	金參圓	石川 利三郎氏
金五圓	石原 定孝氏	金參圓	石川 寅治氏
金五圓	石山 脩平氏	金參圓	石井 庄司氏
金參圓	石井 友幸氏	金參圓	石塚 文司氏
金參圓	石井 教氏	金參圓	石原 健二氏
金參圓	石田 利一氏	金參圓	石野 又吉氏
金貳圓	石三 次郎氏	金貳圓	石川 平司氏
金貳圓	石川 武市氏	金貳圓	石川 重一郎氏
金貳圓	石川 深氏	金貳圓	石田 岩雄氏
金貳圓	石田 久吉氏	金貳圓	石井 守氏
金貳圓	石田 爲邦氏	金貳圓	石井 キ又氏
金貳圓	石田 藤吉氏	金貳圓	磯貝 泰助氏
金貳圓	石井 信五郎氏	金五圓	磯貝 明氏
金參圓	磯田 四郎氏	金拾圓	板倉 贊治氏

祝賀會贊成者芳名簿

金貳圓	岡野 梅吉氏	金五圓	岡部 平太氏
金貳圓	岡部 金夫氏	金五圓	岡村 增太郎氏
金貳圓	岡村 英敏氏	金貳拾五圓	岡本 作次郎氏
金五圓	岡本 基氏	金貳圓	岡本 武雄氏
金壹圓	岡本 律平氏	金貳拾五圓	岡山 秀吉氏
金參圓	小川 正行氏	金貳圓	小川 肇氏
金貳圓	小川 庸三氏	金貳圓	小川 英男氏
金貳圓	小倉 隆氏	金五圓	小田 通敏氏
金貳圓	小田 佐々一氏	金貳圓	小田 四十一氏
金貳圓	小田 壽造氏	金貳圓	小田 千秋氏
金貳圓	小澤 忠造氏	金貳圓	小澤 準作氏
金貳圓	小澤 丘氏	金壹圓	小澤 忠内氏
金貳拾五圓	小野 澄之助氏	金拾圓	小野 塚喜平次氏
金七圓	小野 機太郎氏	金五圓	小野 左恭氏
金五圓	小野 久七氏	金參圓	小野 達氏
金貳圓	小野 初雄氏	金貳圓	小野 正康氏
金貳圓	小野 圭次郎氏	金貳圓	小野 三郎氏
金貳圓	小野 兼次郎氏	金貳圓	小濱 茂一氏
金參圓	尾形 藤治氏	金貳圓	緒方 勳氏
金貳圓	尾形 保五郎氏	金拾圓	尾佐竹 猛氏
金五圓	尾坂 文雄氏	金五圓	尾崎 楠馬氏
金五圓	尾崎 行雄氏	金貳圓	尾崎 信興氏
金貳圓	尾崎 虎四郎氏	金貳圓	尾崎 剛毅氏
金貳圓	尾城 丑太郎氏	金拾圓	尾留川 安彦氏
金五圓	尾見 鎌次郎氏	金參圓	沖田 武雄氏

金貳圓	沖 正次氏	金五圓	置 隆親氏
金拾圓	奥 源次氏	金參圓	奥 田愛正氏
金貳圓	奥 田隆太郎氏	金貳圓	奥 園佐吉氏
金參圓	奥 平覺治氏	金貳圓	奥 加寬氏
金參圓	大 武美德氏	金參圓	大 立忍氏
金參圓	大 瀧主一氏	金參圓	大 瀧正寬氏
金八圓	太 田滋雄氏	金貳圓	太 田順治氏
金貳圓	太 田藤一郎氏	金參圓	太 田章一氏
金貳圓	太 田匡一郎氏	金拾圓	大 谷武一氏
金五圓	大 谷德馬氏	金參圓	大 谷千尋氏
金貳圓	大 谷美登氏	金五圓	大 谷三良氏
金貳拾圓	大 塚良治氏	金五圓	大 塚會一郎氏
金參圓	大 塚岩市氏	金貳圓	大 塚恒雄氏
金貳圓	大 塚為雄氏	金五圓	大 塚重善氏
金貳圓	大 塚三七雄氏	金五圓	大 塚原寬龍氏
金五圓	大 地與四郎氏	金參圓	大 智剛三郎氏
金貳圓	大 地義治氏	金參圓	大 根田資雄氏
金七圓	大 野祥毅氏	金貳圓	大 野文也氏
金參圓	大 野唯雄氏	金參圓	大 村芳樹氏
金拾圓	大 森金五郎氏	金貳圓	大 森乙五郎氏
金貳圓	大 森榮氏	金五圓	大 類仲氏
金貳圓	大 山國一氏	金貳圓	大 山軍之助氏
金貳圓	大 脇公一氏	金貳圓	大 和田熊吉氏
金貳圓	大 和田勝氏	金貳圓	親 泊朝晋氏

ウ

金貳圓	入江 隆雄氏	金拾圓	岩井 良雄氏
金拾圓	岩崎 長思氏	金五圓	岩川 友太郎氏
金五圓	岩坂 定利氏	金五圓	岩本 茂一氏
金五圓	岩本 浩氏	金參圓	岩崎 芳昌氏
金參圓	岩月 大刀夫氏	金參圓	岩永 源作氏
金參圓	岩淵 勝郎氏	金貳圓	岩谷 英太郎氏
金貳圓	岩下 雄三氏	金貳圓	岩野 次郎氏
金貳圓	岩藤 喜宗氏	金貳圓	岩間 昌稔氏
金貳圓	岩本 義烈氏	金貳圓	岩屋 博氏
金壹圓	岩崎 一敬氏		
金五圓	裏川 寅藏氏	金五圓	卜部 岩太郎氏
金參圓	白田 德衛氏	金貳圓	浦 牛原初藏氏
金貳圓	海野 洋氏	金貳圓	牛 山傳造氏
金貳圓	牛山 喜氏	金參圓	植 村良男氏
金貳圓	植木 孝之助氏	金拾圓	宇 野哲人氏
金參圓	宇都宮 益治氏	金參圓	宇 田四郎氏
金貳圓	宇波 耕作氏	金貳圓	宇 野儀三郎氏
金貳圓	宇古 則一氏	金壹圓	宇 治信夫氏
金參圓	梅 澤繁氏	金貳圓	梅 根悟氏
金貳圓	梅村 次修氏	金貳圓	梅 津隼人氏
金貳圓	梅津 一郎氏	金貳圓	梅 野政雄氏
金參拾圓	内堀 維文氏	金拾五圓	内 野台嶺氏
金參圓	内野 彦一氏	金參圓	内 田慶三氏
金參圓	内山 數雄氏	金貳圓	内 田勇助氏
金貳圓	内田 忠一郎氏	金貳圓	内 田武氏

祝賀會贊成者芳名簿

才

金貳圓	内田 覺一氏	金貳圓	内 田與八氏
金貳圓	内 村 淵氏	金貳圓	内 野政義氏
金貳圓	内 山嘉一氏	金拾圓	上 田萬年氏
金拾圓	上 野菊爾氏	金五圓	上 野幸治郎氏
金五圓	上 野康夫氏	金參圓	上 田精一氏
金參圓	上 原龍雄氏	金貳圓	上 治寅次郎氏
金貳圓	上 原精一郎氏	金貳圓	上 野剛氏
金貳圓	上 野芳男氏	金貳圓	上 原正男氏
金貳圓	上 野退藏氏	金貳圓	蛭 原源助氏
金貳圓	海老原 象吉氏	金參圓	鹽 治庸二郎氏
金四圓	榎 本賞平氏	金貳圓	榎 本秋治氏
金參圓	遠 藤久廣氏	金貳圓	遠 藤恒信氏
金貳圓	遠 藤誠道氏	金貳拾圓	江 平林作氏
金拾圓	江 田一策氏	金拾圓	江 頭六郎氏
金貳圓	江 幡龜壽氏	金參圓	江 澤慶信氏
金四圓	江 口照造氏	金貳圓	江 見豐治氏
金五圓	江 原義平氏	金參圓	江 原玄治郎氏
金五圓	岡 磯彦氏	金貳圓	岡 平吾氏
金貳圓	岡 倉由三郎氏	金貳圓	岡 崎常太郎氏
金拾五圓	岡 倉三郎氏	金參圓	岡 崎重作氏
金拾圓	岡 田彌一郎氏	金五圓	岡 田藤十郎氏
金五圓	岡 田信一郎氏	金參圓	岡 田重治氏
金參圓	岡 田長夫氏	金貳圓	岡 田好樹氏
金貳圓	岡 田起作氏	金貳圓	岡 野章太氏

祝賀會贊成者芳名簿

金貳圓	狩野 鷹力氏	金參拾圓	嘉納 治五郎氏
金貳圓	嘉村 哲夫氏	金五圓	河野 正直氏
金五圓	河合 絹吉氏	金五圓	河瀬 半四郎氏
金五圓	河村 盛一氏	金五圓	河村 昌一氏
金參圓	河島 英夫氏	金貳圓	河杉 庸敬氏
金貳圓	河原 塚福司氏	金貳圓	河口 清之氏
金貳圓	河合 祥吾氏	金貳圓	河合 敏氏
金貳圓	河野 豐治氏	金五圓	龜高 德平氏
金貳圓	龜田 勸秀氏	金貳圓	龜川 英夫氏
金貳圓	龜山 相次氏	金貳圓	龜田 仁海氏
金參拾圓	金子 喜代太氏	金拾五圓	金子 彦二郎氏
金拾圓	金子 藤四郎氏	金五圓	金子 幸四郎氏
金貳圓	金子 伯太氏	金貳圓	金子 正雄氏
金貳圓	金築 勇逸氏	金貳圓	金澤 光濟氏
金五圓	上條 茂水氏	金五圓	上林 彌四郎氏
金五圓	上山 道造氏	金貳圓	上總 亨氏
金貳圓	上地 龜義氏	金貳圓	上林 英太氏
金壹圓	上田 信雄氏	金貳圓	神谷 怡之吉氏
金貳圓	神津 省三郎氏	金貳圓	神山 勝政氏
金拾圓	川島 庄一郎氏	金拾圓	川口 源司氏
金拾圓	川村 理助氏	金七圓	川面 松衛氏
金五圓	川口 彝雄氏	金五圓	川口 德松氏
金五圓	川島 次郎氏	金五圓	川崎 喜一氏

キ

金參圓	川井 清久氏	金參圓	川合 重太郎氏
金貳圓	川上 瀧男氏	金貳圓	川瀬 章一氏
金貳圓	川口 武男氏	金貳圓	川口 朝雄氏
金貳圓	川添 正雄氏	金貳圓	川戸 榮治氏
金貳圓	川名 萬松氏	金五圓	蟹江 虎五郎氏
金參圓	蟹江 一成氏	金拾五圓	蟹場 今朝治氏
金貳圓	萱島 榮氏	金貳圓	萱島 德氏
金貳圓	唐津 新藏氏	金貳圓	許 鉉氏
金貳圓	喜多村 理氏	金貳圓	君塚 五雄氏
金貳圓	菊池 忠吾氏	金貳圓	菊地 紋平氏
金貳圓	菊池 孝太郎氏	金貳圓	岸猪 馬雄氏
金貳圓	岸田 與一氏	金貳圓	岸 逸雄氏
金貳圓	岸 廣氏	金拾圓	北澤 種一氏
金參拾圓	北垣 恭次郎氏	金貳圓	北野 喜祥氏
金參圓	北詰 榮太郎氏	金貳圓	北川 藤吉氏
金貳圓	北山 寛氏	金貳圓	北林 市郎氏
金貳圓	北根 武次氏	金貳圓	北田 茂氏
金貳圓	北林 德次郎氏	金貳圓	北村 貞七氏
金貳圓	北 豐吉氏	金貳圓	北村 倉之助氏
金貳圓	北村 末弘氏	金拾圓	木藤 重德氏
金貳圓	北村 重敬氏	金拾圓	木塚 長次郎氏
金五圓	木原 美義氏	金參圓	木枝 增一氏
金參圓	木津和 武雄氏	金貳圓	木内 義雄氏
金貳圓	木庭 源三氏	金五圓	木代 三男氏
金十圓	木代 修一氏		

力

金壹圓	親泊 朝撰氏	金五圓	大高 常彦氏
金拾圓	奥村 幸衛氏	金貳圓	奥村 卯之助氏
金拾五圓	荻原 擴氏	金七圓	荻原 忠作氏
金五圓	荻阪 進治氏	金五圓	荻山 薰次氏
金貳圓	押田 勤氏	金貳圓	織田 信治氏
金五拾圓	乙竹 岩造氏	金參拾圓	丘 淺次郎氏
金拾五圓	落合 寅平氏	金五圓	落合 泰次郎氏
金五圓	大岩 榮吾氏	金五圓	大石 和三郎氏
金貳圓	大井 民吾氏	金貳圓	大出 正篤氏
金參圓	大上 茂喬氏	金五圓	大江 安之助氏
金五圓	大浦 留市氏	金參圓	大浦 倉之助氏
金貳圓	大内 勉氏	金五圓	大河原 欽吾氏
金參圓	大川 敏夫氏	金貳圓	大川 房吉氏
金拾五圓	大久保 介壽氏	金參圓	大久保 鹿次郎氏
金貳圓	大久保 定巳氏	金貳圓	大久保 勇市氏
金貳圓	大倉 征次郎氏	金貳圓	大倉 正三郎氏
金參圓	大越 英四氏	金八圓	大澤 和夫氏
金五圓	大幸 勇吉氏	金拾圓	大島 庄之助氏
金參圓	大島 鎮治氏	金貳圓	大島 延次郎氏
金五圓	大杉 謹一氏	金貳圓	大須賀 瑛司氏
金參拾圓	大淵 甚太郎氏	金拾五圓	大關 將一氏
金五圓	大關 増次郎氏	金拾五圓	掛谷 宗一氏
金貳拾圓	垣内 松三氏	金五圓	鹿兒島 登左氏
金拾五圓	寛 克彦氏	金五圓	海鹽 錦衛氏
金五圓	甲藤 太郎氏		

金五圓	風早 實馬氏	金參圓	數川 兵五郎氏
金貳圓	唐澤 勝太郎氏	金貳圓	辛島 太吉氏
金貳圓	籠 辰男氏	金貳圓	鴨志田 磯五郎氏
金貳圓	菅 國定氏	金貳圓	角澤 良男氏
金貳圓	粕谷 昇氏	金貳圓	柿崎 守忠氏
金貳圓	梶和 三郎氏	金五圓	笠原 英一氏
金貳圓	笠原 義平氏	金壹圓	笠原 義二氏
金拾圓	片岡 久氏	金參圓	片山 重一氏
金貳圓	片岡 濟二氏	金貳圓	片山 傳藏氏
金貳圓	春日 賢一氏	金五圓	春日 初見氏
金貳圓	春日 譽男氏	金參圓	春日 政治氏
金貳圓	柏木 龜三氏	金五圓	柏木 廣吉氏
金五圓	加藤 仁平氏	金五圓	加藤 因氏
金參圓	加藤 弘氏	金貳圓	加藤 義助氏
金參圓	加藤 轍治氏	金貳圓	加藤 ときわ氏
金貳圓	加藤 清一氏	金貳圓	加藤 三郎氏
金貳圓	加藤 邦造氏	金貳圓	加藤 木風雄氏
金貳圓	加藤 榮五郎氏	金貳圓	加藤 貞男氏
金貳圓	加藤 陸太郎氏	金貳圓	加藤 道郎氏
金貳圓	加納 鈿一氏	金貳圓	加藤 三重二氏
金壹圓	加曾利 坦氏	金貳圓	加賀美 愛三氏
金貳圓	香取 峻氏	金貳圓	香取 秀眞氏
金貳圓	勝野 和吉氏	金貳圓	勝田 重信氏
金參圓	影山 勝造氏	金五圓	狩野 直喜氏

祝賀會贊成者芳名簿

祝賀會贊成者芳名簿

金五圓	澤田 鉤義氏	金參圓	澤田 三郎氏
金貳圓	澤村 武一氏	金貳圓	澤山 榮藏氏
金五圓	酒井 忠一氏	金貳圓	酒井 泰二氏
金貳圓	酒井 峰生氏	金貳圓	酒井 恒氏
金五圓	阪谷 芳郎氏	金貳圓	阪上 隆一氏
金拾圓	坂口 樸次郎氏	金參圓	坂口 繼輔氏
金五圓	坂上一郎氏	金五圓	坂本 豐策氏
金五圓	坂田 輝夫氏	金參圓	坂田 政次郎氏
金貳圓	坂田 英夫氏	金五圓	坂井 吉助氏
金五圓	坂井 俊三郎氏	金參圓	坂井 仲太郎氏
金貳圓	坂井 清吉氏	金貳圓	坂本 秀弘氏
金壹圓	坂本 スミ氏	金五拾圓	齋藤 斐章氏
金拾圓	齋藤 鹿三郎氏	金拾圓	齋藤 藤吉氏
金五圓	齋藤 榮一氏	金五圓	齋藤 蕪雁氏
金五圓	齋藤 欽二氏	金五圓	齋藤 正氏
金參圓	齋藤 儀重氏	金貳圓	齋藤 善藏氏
金貳圓	齋藤 丈夫氏	金貳圓	齋藤 武一郎氏
金貳圓	齋藤 慎吾氏	金貳圓	齋藤 文一氏
金貳圓	齋藤 仲次氏	金貳圓	齋藤 修一氏
金貳圓	齋藤 芳吉氏	金壹圓	齋藤 與作氏
金拾圓	櫻庭 武氏	金貳拾圓	櫻井 時太郎氏
金拾圓	櫻井 寅之助氏	金五圓	櫻井 賢三氏
金五圓	櫻井 錠二氏	金參圓	櫻井 勇太郎氏
金參圓	櫻井 信郎氏	金參圓	櫻井 香織氏
金貳圓	櫻井 傳三氏	金貳圓	櫻井 正雄氏

金參圓	佐中 幸之助氏	金五圓	佐伯 梅友氏
金五圓	佐川 安治氏	金貳圓	佐野 文五氏
金貳圓	佐野 久氏	金貳圓	佐竹 直義氏
金貳圓	佐田 信人氏	金參圓	佐々田 精一氏
金壹圓	佐々野 忠雄氏	金五拾圓	佐々木 秀一氏
金貳拾圓	佐々木 三之助氏	金拾五圓	佐々木 祐太郎氏
金拾圓	佐々木 等氏	金參圓	佐々木 金久氏
金參圓	佐々木 松藏氏	金貳圓	佐々木 克己氏
金貳圓	佐々木 高一氏	金貳圓	佐々木 山子氏
金壹圓	佐々木 仁三郎氏	金參圓	佐々木 熊藏氏
金拾圓	佐々木 キヨ氏	金拾圓	佐藤 保太郎氏
金拾圓	佐藤 良一郎氏	金拾圓	佐藤 熊治郎氏
金拾圓	佐藤 修一氏	金拾圓	佐藤 哲氏
金拾圓	佐藤 龍藏氏	金七圓	佐藤 保胤氏
金五圓	佐藤 善次郎氏	金五圓	佐藤 俊夫氏
金五圓	佐藤 國二氏	金五圓	佐藤 孫四郎氏
金五圓	佐藤 正作氏	金五圓	佐藤 半平氏
金五圓	佐藤 藤治氏	金貳圓	佐藤 秀昌氏
金五圓	佐藤 輝實氏	金貳圓	佐藤 順次郎氏
金五圓	佐藤 惠氏	金五圓	佐藤 鶴吉氏
金五圓	佐藤 正範氏	金參圓	佐藤 末吉氏
金參圓	佐藤 源郎氏	金參圓	佐藤 榮藏氏
金參圓	佐藤 卯吉氏	金貳圓	佐藤 秀夫氏
金貳圓	佐藤 禮助氏	金貳圓	佐藤 秀吉氏
金貳圓	佐藤 精氏	金貳圓	佐藤 實氏

シ

金貳圓	佐藤 順太氏	金貳圓	佐藤 秀三郎氏
金貳圓	佐藤 庸男氏	金貳圓	佐藤 周吉氏
金貳圓	佐藤 太氣美氏	金貳圓	佐藤 慎一郎氏
金貳圓	佐藤 元藏氏	金貳圓	佐藤 孫六氏
金貳圓	佐藤 穗三郎氏	金貳圓	佐藤 永吉氏
金貳圓	佐藤 左内氏	金貳圓	佐藤 登氏
金貳圓	佐藤 清廣氏	金參圓	鹽谷 伴造氏
金五圓	鹽津 信男氏	金貳圓	鹽賀 莊三郎氏
金五圓	鹽谷 溫氏	金貳圓	重田 爲司氏
金五圓	重藤 利一氏	金貳圓	重田 爲司氏
金五圓	重田 勘次郎氏	金貳圓	鹽野 進氏
金貳圓	鹽澤 幹氏	金貳圓	鹽川 史郎氏
金參圓	茂山 尙文氏	金貳圓	鹿住 卓爾氏
金貳圓	鹿谷 義一氏	金貳圓	椎名 安藏氏
金參圓	椎野 佐玄氏	金貳圓	重藤 省一氏
金貳圓	下村 弘毅氏	金參圓	下泉 重吉氏
金參圓	下村 禮佐氏	金拾圓	下田 次郎氏
金貳拾圓	下村 三四吉氏	金拾圓	四角 誠一氏
金貳拾圓	清水 儀六氏	金貳圓	下山田 尙方氏
金貳圓	下條 靖氏	金貳圓	下島 統一氏
金貳圓	下河 茂嗣氏	金貳圓	下間 忠夫氏
金貳圓	清水 猪六氏	金貳圓	清水 實氏
金貳圓	清水 庄五郎氏	金五圓	清水 岬氏
金五圓	清水 喜一氏	金七圓	清水 繁氏
金五圓	島田 民治氏	金拾圓	島岡 浩一郎氏

祝賀會贊成者芳名簿

金貳拾圓	島田 鈞一氏	金貳圓	清水 清氏
金貳圓	清水 善次郎氏	金貳圓	清水 敏雄氏
金貳圓	進藤 小一郎氏	金貳圓	島田 敬愨氏
金貳圓	島津 愛三氏	金貳圓	島原 清二氏
金參圓	島田 五郎氏	金五圓	島北 三晃氏
金貳圓	志田 貞三氏	金貳圓	志崎 九五郎氏
金參圓	志賀 剛氏	金五圓	志村 鋼平氏
金貳拾圓	志保田 銚吉氏	金貳圓	進 稔氏
金五圓	柴垣 則義氏	金五圓	柴宮 八十彦氏
金拾圓	芝野 六助氏	金貳圓	澁佐 信雄氏
金貳圓	澁谷 辰氏	金五圓	澁谷 義夫氏
金參圓	白石 良五郎氏	金貳拾圓	白鳥 庫吉氏
金貳圓	柴崎 鐵吉氏	金貳圓	柴田 清一郎氏
金貳圓	柴崎 二郎氏	金五圓	柴田 常惠氏
金貳圓	白石 信一氏	金貳圓	白髭 丈雄氏
金貳圓	白田 時太氏	金貳圓	白川 良八氏
金參圓	白井 彦聖氏	金貳圓	白坂 高重氏
金貳圓	白井 錦策氏	金貳圓	新堂 文次氏
金拾五圓	新藤 甚藏氏	金貳圓	白井 光太郎氏
金貳圓	篠田 錦策氏	金貳圓	新保 磐次氏
金貳圓	篠崎 光太郎氏	金貳圓	篠原 誠氏
金五圓	篠原 助市氏	金五圓	篠原 辰次郎氏
金貳圓	篠原 賢作氏	金貳圓	篠田 利英氏
金貳圓	姜 鳳羽氏	金參圓	上甲 二郎氏
金參圓	神 英二氏	金貳圓	神 守夫氏

祝賀會贊成者芳名簿

金參圓	高田 德氏	金參圓	高野 豐文氏
金參圓	高原 秋雄氏	金參圓	高橋 茂治氏
金參圓	高橋 謙次郎氏	金參圓	高橋 榮七氏
金參圓	高柳 暉氏	金參圓	高山 潔氏
金貳圓	高尾 文八氏	金貳圓	高木 佐加枝氏
金貳圓	高木 健作氏	金貳圓	高木 佐加枝氏
金貳圓	高瀬 省三氏	金貳圓	高達 齊吉氏
金貳圓	高田 十郎氏	金貳圓	高野 善之氏
金貳圓	高橋 重夫氏	金貳圓	高野 久太郎氏
金貳圓	高野 甲子雄氏	金貳圓	高野 佐三郎氏
金貳圓	高橋 彦次郎氏	金貳圓	高野 潮露氏
金貳圓	高橋 勇氏	金貳圓	高野 良吉氏
金貳圓	高橋 彦次郎氏	金貳圓	高橋 英治氏
金壹圓	高島 茅夫氏	金貳圓	高久 一郎氏
金壹圓	高倉 正夫氏	金壹圓	高丸 靈教氏
金壹圓	高野 暢氏	金壹圓	高梨 泰男氏
金貳圓	高宮 龜喜氏	金貳圓	高山 豐太郎氏
金貳圓	高野 賢氏	金貳圓	高丸 靈教氏
金貳圓	瀧本 貞一氏	金貳圓	瀧澤 菊太郎氏
金貳圓	瀧澤 厚氏	金貳圓	瀧澤 謙治氏
金貳圓	龍澤 良吉氏	金貳圓	龍山 義亮氏
金拾五圓	竹友 虎雄氏	金貳圓	龍崎 寅雄氏
金五圓	竹田 復氏	金五圓	竹島 茂郎氏
金五圓	竹名 英一郎氏	金五圓	竹田 菊氏
金五圓	竹原 重松氏	金五圓	竹浪 友治郎氏
金五圓		金參圓	竹内 虎士氏

金貳圓	竹谷 直彌氏	金貳圓	竹林 貫一氏
金貳圓	竹村 利夫氏	金貳圓	武政 太郎氏
金拾五圓	武見 芳二氏	金拾圓	武田 忠氏
金拾圓	武原 熊吉氏	金六圓	武谷 琢美氏
金五圓	武井 勇喜氏	金五圓	武井 群嗣氏
金參圓	武居 芳成氏	金參圓	武政 房吉氏
金貳圓	武井 亮吉氏	金貳圓	武石 匡治氏
金貳圓	武田 晴雄氏	金貳圓	武田 一郎氏
金貳圓	武見 五作氏	金貳圓	武部 俊正氏
金貳圓	田口 俊夫氏	金貳圓	武山 孝助氏
金貳圓	田口 虎之助氏	金貳圓	田口 安太郎氏
金貳圓	田島 仁平氏	金貳圓	田島 繁稻氏
金貳圓	田中 文三氏	金貳圓	田中 賢太郎氏
金貳圓	田中 喜雄氏	金貳圓	田中 勝夫氏
金貳圓	田中 熊六氏	金貳圓	田中 次郎氏
金貳圓	田中 友一氏	金貳圓	田中 太郎氏
金貳圓	田中 正智氏	金貳圓	田中 順氏
金貳圓	田中 豐吉氏	金貳圓	田中 辰治氏
金貳圓	田中 健三氏	金貳圓	田中 敬一氏
金貳圓	田中 啓一氏	金貳圓	田野崎 久雄氏
金貳圓	田波 又男氏	金貳圓	田村 清保氏
金貳圓	田山 利三郎氏	金參圓	田上 倉平氏
金參圓	田口 喜三郎氏	金參圓	田口 美雄氏
金參圓	田中 増太郎氏	金參圓	田邊 榮氏

一一七

又 祝賀會贊成者芳名簿

金拾五圓	神保 格氏	金貳圓	篠原 仁三郎氏
金貳圓	末永 博氏	金拾圓	菅原 信治氏
金五圓	菅沼 松彦氏	金五圓	菅野 義之助氏
金參圓	菅原 教造氏	金貳圓	須賀 正市氏
金貳圓	須賀 田三郎氏	金貳圓	菅野 増見氏
金五圓	杉浦 良助氏	金參圓	杉浦 隆次氏
金貳圓	杉浦 正一氏	金貳圓	杉浦 初坂氏
金貳圓	杉浦 義高氏	金貳圓	杉井 孫太郎氏
金參圓	杉崎 瑤氏	金貳圓	杉野 秀二氏
金貳圓	杉野 芳郎氏	金五圓	杉本 勇三氏
金拾五圓	杉村 欣次郎氏	金貳圓	杉村 暢茂氏
金貳圓	杉村 盛茂氏	金五圓	杉山 文雄氏
金八圓	杉山 梅吉氏	金五圓	杉 敏介氏
金五圓	須甲 理喜氏	金貳拾圓	鈴木 光愛氏
金拾圓	鈴木 重雄氏	金五圓	鈴木 登氏
金五圓	鈴木 利平氏	金五圓	鈴木 德治氏
金參圓	鈴木 昇氏	金參圓	鈴木 喜代馬氏
金參圓	鈴木 理一氏	金參圓	鈴木 靜穗氏
金貳圓	鈴木 元美氏	金貳圓	鈴木 鶴吉氏
金貳圓	鈴木 敬治氏	金貳圓	鈴木 文夫氏
金貳圓	鈴木 武義氏	金貳圓	鈴木 孝英氏
金貳圓	鈴木 棟一氏	金貳圓	鈴木 儀一郎氏
金貳圓	鈴木 不二雄氏	金貳圓	鈴木 正秋氏
金貳圓	鈴木 貞一氏	金貳圓	鈴木 半三郎氏
金貳圓		金貳圓	鈴木 圭壽氏

夕 リ

金貳圓	鈴木 清一氏	金壹圓	鈴木 うめ氏
金壹圓	鈴木 かつ氏	金貳圓	杉田 勅男氏
金貳圓	須田 秋之進氏	金參圓	砂崎 徳三氏
金參圓	角谷 源之助氏	金貳圓	墨谷 勇氏
金貳圓	住谷 英之輔氏		
金貳圓	芹澤 政衛氏	金貳圓	瀬口 眞喜郎氏
金貳圓	瀬知 通太氏	金貳圓	瀬島 巖氏
金拾圓	關屋 貞三郎氏	金五圓	關口 正助氏
金五圓	關野 榮氏	金參圓	關野 幹次郎氏
金參圓	關根 忠氏	金貳圓	關根 孝三氏
金貳圓	關本 辰次郎氏	金八圓	關本 幸太郎氏
金貳圓	關 清一郎氏	金五圓	關 榮太郎氏
金貳圓	宗宮 信行氏	金參圓	十河 道之介氏
金五圓	曾我 豐吉氏	金貳圓	染谷 均一氏
金貳圓	園田 軍平氏	金參圓	園田 定太郎氏
金拾圓	園田 健自氏	金拾五圓	高倉 卯三郎氏
金拾圓	高階 順治氏	金拾圓	高瀬 代次郎氏
金拾圓	高橋 章臣氏	金拾圓	高橋 清次郎氏
金五圓	高藤 太郎氏	金五圓	高井 倭一氏
金五圓	高島 茂平氏	金五圓	高田 每吉氏
金五圓	高槻 俊一氏	金五圓	高畑 淺次郎氏
金五圓	高橋 理一郎氏	金五圓	高橋 喜藤治氏
金參圓	高尾 豐吉氏	金參圓	高木 十郎氏
金參圓	高桑 良興氏	金參圓	高田 力氏

一一六

祝賀會賛成者芳名簿

金貳圓 筒井捨次郎氏
 金貳圓 都築重雄氏
 金貳圓 堤五作氏
 金貳圓 土屋三郎氏
 金貳圓 寺澤殿男氏
 金貳圓 寺門照彦氏
 金貳圓 寺島貫二郎氏
 金貳圓 寺田佐平氏
 金拾圓 土井不羣氏
 金拾圓 土井龜之進氏
 金拾圓 土居寬暢氏
 金貳圓 土井省二氏
 金貳圓 遠峰亮氏
 金貳圓 堂東傳氏
 金貳圓 東儀文孝氏
 金貳圓 梅野他家治氏
 金貳圓 時下米太郎氏
 金貳圓 德川頼貞氏
 金四圓 德田省三氏
 金貳圓 德江勝彌氏
 金貳圓 戶倉美彰氏
 金貳圓 利光勉氏
 金拾圓 鳥羽耕治氏
 金五圓 飛松正氏

金貳圓 田野崎重五郎氏
 金貳圓 田村虎藏氏
 金四圓 田中豐太郎氏
 金五圓 田中省吾氏
 金五圓 田中俊資氏
 金五圓 田中眞次郎氏
 金八圓 田口福司郎氏
 金拾圓 田中秀作氏
 金五圓 田中寬一氏
 金貳圓 立川昇藏氏
 金五圓 橋正次氏
 金拾圓 谷本富氏
 金貳圓 谷田文雄氏
 金貳圓 谷口猛雄氏
 金貳圓 谷地清藏氏
 金五圓 玉井常人氏
 金五圓 爲藤五郎氏
 金拾圓 多見千次氏
 金貳圓 高見澤庄七氏
 金貳圓 山田時一氏
 金貳圓 段證外吉氏
 金貳圓 湛辰平氏
 金貳圓 趙慶喜氏
 金貳圓 地主彌一郎氏
 金貳圓 近池義隆氏

ト

金五圓 都築秀德氏
 金貳圓 堤庄左衛門氏
 金貳圓 土屋重德氏
 金貳圓 寺西武夫氏
 金貳圓 寺島高次氏
 金貳圓 寺內貞亮氏
 金五圓 寺田范三氏
 金五圓 土井一夫氏
 金五圓 土居光知氏
 金五圓 土佐林勇雄氏
 金拾圓 土佐林力氏
 金壹圓 遠山隆氏
 金貳圓 東條繁樹氏
 金五圓 得能文氏
 金貳圓 外上安治氏
 金貳圓 鶴田七郎氏
 金五圓 德富猪一郎氏
 金貳圓 德田基助氏
 金五圓 戶河里長康氏
 金五圓 戶澤佐明氏
 金五圓 利根川與作氏
 金五圓 鳥居勝氏
 金五圓 富岡貫一氏

祝賀會賛成者芳名簿

金五圓 富永堅吾氏
 金五圓 富田達氏
 金貳圓 富田治三郎氏
 金貳圓 富田楠男氏
 金貳圓 富田義介氏
 金五圓 富田彌三郎氏
 金五圓 富田恭敏氏
 金五圓 富田五郎氏
 金貳圓 豐島恭敏氏
 金貳圓 豐田清一郎氏
 金貳圓 友枝高彦氏
 金貳圓 直江光次氏
 金貳圓 內藤由己男氏
 金拾圓 中川一男氏
 金七圓 中川孝也氏
 金五圓 中川英一氏
 金五圓 中島久楠氏
 金五圓 中西清氏
 金五圓 中西幸四郎氏
 金五圓 中村正持氏
 金五圓 中村常雄氏
 金五圓 中山正心氏
 金五圓 中山敏行氏
 金五圓 中島盛一氏
 金五圓 中根鷺三郎氏

ツ

金貳圓 千秋穂三郎氏
 金貳圓 千葉精一氏
 金五圓 佃井久滿治氏
 金貳圓 柘植貞次氏
 金貳圓 角田隆一氏
 金拾圓 土上新作氏
 金貳圓 士林朝次郎氏
 金貳圓 土田忠二氏
 金貳圓 土田孝正氏
 金貳圓 土屋彌太郎氏
 金貳圓 土屋正令氏
 金貳圓 塚越孔四郎氏
 金貳圓 塚本靖氏
 金五圓 塚原末吉氏
 金貳圓 塚原常之助氏
 金貳圓 鶴間榮氏
 金貳圓 築山治三郎氏
 金貳圓 辻橋大吉氏
 金貳圓 辻精司氏
 金貳圓 辻助次郎氏
 金拾圓 津崎亥九生氏
 金五圓 津久井德次郎氏
 金五圓 津野久一氏
 金五圓 津田敬武氏
 金五圓 津田儀作氏

祝賀會贊成者芳名簿

金參圓	中村 修二氏	金參圓	中村 禎雄氏
金參圓	中村 三元氏	金參圓	中村 忠氏
金貳圓	仲 仁 吉氏	金貳圓	中泉 正雄氏
金貳圓	中尾 幸太郎氏	金貳圓	中川 秀松氏
金貳圓	中川 義久氏	金貳圓	中川 竹次郎氏
金貳圓	仲上 秋三郎氏	金貳圓	中澤 鴻吉氏
金貳圓	中澤 伊與吉氏	金貳圓	中里 壽彌氏
金貳圓	中島 滿洲夫氏	金貳圓	中島 久氏
金貳圓	中島 敏夫氏	金貳圓	中島 正勝氏
金貳圓	中島 晴氏	金貳圓	中島 次郎吉氏
金貳圓	中津 尹一氏	金貳圓	中西 竹藏氏
金貳圓	中山 晉彌氏	金貳圓	中西 延次氏
金貳圓	中山 繁造氏	金貳圓	中山 繁藏氏
金壹圓	仲 八重野氏	金貳圓	中山 正明氏
金貳圓	中村 五六氏	金貳圓	仲村 秀朗氏
金貳圓	中村 好氏	金貳圓	中村 久雄氏
金貳圓	中野 賢作氏	金拾圓	長尾 松三郎氏
金拾圓	長 沼 亨氏	金五圓	長崎 惣一氏
金五圓	長屋 喜一氏	金四圓	長岡 禎利氏
金參圓	長田 博氏	金貳圓	長澤 恭治氏
金貳圓	長岡 源市郎氏	金拾圓	永井 道明氏
金五圓	長畑 功氏	金五圓	永井 廣氏
金五圓	永岡 秀一氏	金貳圓	永井 眞夫氏
金貳圓	永廣 繁松氏	金貳圓	永瀨 伊一郎氏
金貳圓	永島 宗吉氏		

ネ

金貳圓	永田 勝惠氏	金四圓	永田 重隆氏
金貳圓	永野 芳夫氏	金貳圓	永野 松枝氏
金貳圓	那須 正一氏	金參拾圓	檜崎 淺太郎氏
金參圓	檜原 嘉一郎氏	金貳圓	檜原 廣雄氏
金貳圓	鍋島 信太郎氏	金八圓	成田 喜英氏
金貳圓	細田 喜助氏	金參圓	難波 磊二氏
金貳圓	南條 行造氏	金貳圓	南部 泰氏
金貳圓	南谷 善勝氏		
金五圓	丹羽 正長氏	金貳圓	苦瓜 惠三郎氏
金五圓	仁科 貞人氏	金貳圓	錦織 兵三郎氏
金貳拾圓	二宮 文右衛門氏	金參圓	二階 源市氏
金拾圓	新村 出氏	金五圓	新里 文八郎氏
金五圓	新帶 國太郎氏	金參圓	新島 百介氏
金貳圓	新田 勇氏	金貳圓	新野 庚午治郎氏
金拾五圓	西川 順之氏	金拾圓	西田 與四郎氏
金參圓	西野 辰五郎氏	金參圓	西田 南平氏
金貳圓	西牧 盛雄氏	金五圓	西村 虎之助氏
金貳圓	西村 宗一氏	金參圓	西村 尚俊氏
金五圓	西山 清澄氏	金貳圓	西山 績氏
金五圓	西山 稔氏		
金五圓	布村 安弘氏	金五圓	沼澤 龍雄氏
金貳圓	沼田 龜之助氏	金貳圓	沼尻 茂雄氏
金拾圓	沼野 一男氏	金參圓	根岸 良治氏
金拾圓	根岸 福彌氏		

ハ

金參圓	根本 政雄氏	金參圓	根本 莞爾氏
金五圓	乘杉 嘉壽氏	金參圓	能勢 賴俊氏
金貳圓	能勢 朝次氏	金五圓	野地 清學氏
金貳圓	野崎 正治氏	金貳圓	野呂 匡氏
金貳圓	野間 太郎氏	金貳拾圓	野々村 運市氏
金五圓	野々山 源治氏	金參圓	野々上 一男氏
金拾圓	野村 儀平氏	金五圓	野村 基氏
金貳圓	野村 秀雄氏	金拾圓	野原 茂六氏
金貳圓	野原 休一氏	金拾圓	野島 藤太郎氏
金貳圓	野島 忠太郎氏	金貳圓	野尻 精一氏
金五圓	野尻 新太郎氏	金五圓	野尻 貞衛氏
金五圓	野田 貞雄氏	金五圓	野田 五郎助氏
金貳圓	野田 文藏氏	金貳圓	野田 益基氏
金貳拾圓	野口 援太郎氏	金拾五圓	野口 源三郎氏
金貳圓	野口 善藏氏	金壹圓	野口 行雄氏
金拾圓	橋本 辰彦氏	金拾圓	橋本 重次郎氏
金拾圓	橋本 正次郎氏	金五圓	橋本 常彦氏
金五圓	橋本 爲次氏	金參圓	橋本 三郎氏
金參圓	橋口 幾雄氏	金參圓	橋本 五作氏
金貳圓	橋野 明氏	金貳圓	橋本 寬重氏
金貳圓	橋本 善次氏	金貳圓	橋本 遷氏
金貳圓	橋本 喬木氏	金貳圓	橋元 半次郎氏
金拾圓	原 房 孝氏	金五圓	原 安 馬氏
金五圓	原田 虎平氏	金五圓	原田 平藏氏
金五圓	原澤 義太郎氏	金參圓	原谷 四郎一氏

祝賀會贊成者芳名簿

金參圓	原田 式雄氏	金參圓	原田 親氏
金參圓	原田 隆諦氏	金參圓	原田 長松氏
金貳圓	原 了 氏	金貳圓	原 基 宜氏
金貳圓	原 吉 雄氏	金貳圓	原 基 宜氏
金五圓	原田 稔甫氏	金貳圓	原田 兵太郎氏
金五圓	梅林 寺勝三氏	金貳圓	原田 信夫氏
金參圓	萩野 伸三郎氏	金貳圓	袴田 集義氏
金貳圓	萩原 右三郎氏	金拾五圓	萩原 繁太郎氏
金五圓	長谷川 敏正氏	金參圓	長谷川 乙彦氏
金貳圓	長谷川 實氏	金貳圓	長谷川 規矩進氏
金五圓	長谷川 一興氏	金拾圓	長谷川 規矩進氏
金貳圓	進池 良太郎氏	金貳圓	進沼 靈譽氏
金貳圓	畠中 愷夫氏	金貳圓	羽會部 千代八氏
金貳圓	秦 治 義氏	金貳拾圓	秦 芳 康氏
金貳圓	服部 基一氏	金壹圓	服部 宇之吉氏
金貳拾圓	花井 重次氏	金貳圓	服部 佐氏
金貳圓	花山 信勝氏	金參圓	花田 英太郎氏
金拾五圓	濱岡 興一氏	金五圓	羽田 貞義氏
金參圓	濱田 俊吉氏	金貳圓	濱田 幸次郎氏
金貳圓	濱野 知三郎氏	金貳圓	濱田 源治氏
金貳圓	濱宮 太郎氏	金貳圓	濱島 一雄氏
金五圓	波多 巖氏	金五圓	羽室 蒼治氏
金拾圓	林 毅 陸氏	金拾圓	島山 源藏氏
金八圓	林 準 二氏	金五圓	林 光 雅氏
		金五圓	林 重 信氏

祝賀會贊成者芳名簿

木 へ

金貳圓	藤野重次郎氏	金五圓	藤村與六氏
金貳圓	藤澤敏郎氏	金貳圓	藤澤倉之助氏
金五圓	藤原咲平氏	金壹圓	藤原秀子氏
金七圓	藤森勝郎氏	金參圓	藤森朋夫氏
金拾五圓	藤岡繼平氏	金貳圓	藤岡四郎氏
金貳拾圓	藤木源吾氏	金貳圓	藤木顯久氏
金貳圓	藤井利譽氏	金五圓	藤井幸永氏
金參圓	藤井爲博氏	金貳圓	藤井友吉氏
金拾圓	藤本義平氏	金拾圓	藤本治義氏
金五圓	藤本捨助氏	金貳圓	藤本勇氏
金貳圓	藤本秀雄氏	金五圓	藤田高次氏
金貳圓	藤田巖氏	金貳圓	藤田然氏
金貳圓	藤田信雄氏	金貳圓	藤田恭一氏
金貳圓	藤田益行氏	金貳圓	藤田芳弘氏
金貳圓	福岡高氏	金貳圓	福岡力丸氏
金五拾圓	福島甲子三氏	金五圓	福島龜吉氏
金五圓	福井玉夫氏	金貳圓	福井省三氏
金拾圓	福原麟太郎氏	金貳圓	福原惣三氏
金貳圓	福澤英三郎氏	金貳圓	福澤悅三郎氏
金參圓	福山惟吉氏	金參圓	福山重吉氏
金貳圓	福山富雄氏	金拾圓	福山源藏氏
金貳圓	福田千二郎氏	金貳圓	福田源藏氏
金參圓	別所千賀照氏	金貳圓	逸見祐三氏
金五圓	本田喜八氏	金五圓	本田存氏
金五圓	本田嘉種氏	金貳圓	本間九郎治氏

マ

金貳圓	本間信一氏	金五圓	本多忠綱氏
金參圓	本多莞爾氏	金參圓	本多篤氏
金貳圓	本多厚二氏	金貳圓	本多三郎氏
金貳圓	本多龜三氏	金拾圓	堀井甚一郎氏
金拾圓	堀内美廣氏	金五圓	堀田要三郎氏
金參圓	堀尾金八郎氏	金參圓	堀口太一氏
金貳圓	堀野竹松氏	金貳圓	堀江時三氏
金貳圓	堀込餘重氏	金貳圓	堀七藏氏
金貳圓	堀幸次郎氏	金貳圓	堀義太郎氏
金貳圓	堀賢治氏	金五圓	堀一雄氏
金貳圓	堀教有氏	金參圓	星愛喜氏
金貳圓	星野正一氏	金貳圓	星一雄氏
金貳圓	星野孝一氏	金貳圓	保坂恕氏
金貳圓	保科孝一氏	金貳圓	保正角次郎氏
金拾五圓	補永茂助氏	金拾五圓	法貴慶次郎氏
金參圓	細川益之氏	金參圓	甫守謹吾氏
金參圓	北條三郎氏	金參圓	寶月勇三郎氏
金五圓	眞船民伊氏	金五圓	滿田二期氏
金拾圓	横山榮次氏	金貳圓	正木助次郎氏
金八圓	榊田一二氏	金貳圓	益田宗一氏
金拾圓	間處武夫氏	金貳圓	間之田祐一郎氏
金拾圓	馬場孝太郎氏	金拾圓	馬淵冷佑氏
金貳圓	馬杉七郎氏	金貳圓	町田則文氏
金參圓	町田文一氏	金貳圓	町田芳三氏
金參圓	前野喜代治氏	金參圓	前川慶造氏
金拾圓	前田捨松氏	金拾圓	前田元次氏

七

金五圓	林傳次氏	金五圓	林正躬氏
金參圓	林勘二氏	金參圓	林時三郎氏
金貳圓	林織衛氏	金貳圓	林均氏
金貳圓	林衛氏	金貳圓	林達也氏
金貳圓	林德次氏	金貳圓	林替透氏
金參圓	張間多聞氏	金貳圓	晴山酉松氏
金貳圓	治田久雄氏	金參圓	平田富造氏
金五圓	平田芳亮氏	金貳圓	平田俊太郎氏
金貳圓	平田巳之助氏	金貳圓	平井正武氏
金貳圓	平田義雄氏	金參圓	平井金次郎氏
金參圓	平井毅三氏	金貳圓	平井孝一氏
金貳圓	平井林氏	金拾圓	平野孝一氏
金五圓	平野芳州氏	金五圓	平野彦次郎氏
金參圓	平野孝氏	金拾圓	平尾兵吾氏
金五圓	平賀吉治氏	金五圓	平山誠寬氏
金貳圓	平峠茂一氏	金貳圓	平戸五郎氏
金貳圓	平川龍夫氏	金貳圓	平林貴邦氏
金貳圓	平木吉治郎氏	金貳圓	平澤平三氏
金貳拾五圓	日田權一氏	金參圓	日置茂治氏
金參圓	日野顯立氏	金拾圓	日高佐七氏
金貳圓	日高昂氏	金貳圓	日高勇人氏
金貳圓	日笠護氏	金拾圓	廣井家太氏
金貳圓	弘瀬時治氏	金五圓	廣瀬幸吉氏
金五圓	廣瀬政次氏	金參圓	廣瀬景氏
金貳圓	廣瀬正夫氏	金貳圓	廣瀬正雄氏

7

金五圓	檜山友藏氏	金參圓	檜山勝一氏
金貳圓	檜垣敬一氏	金五拾圓	樋口長市氏
金五圓	樋畑雪湖氏	金參圓	樋泉慶次郎氏
金貳圓	樋渡熊雄氏	金五圓	泥谷良次郎氏
金參圓	菱木岩四郎氏	金參圓	東基吉氏
金參圓	秀平都美二氏	金貳圓	水上貞子氏
金貳圓	蛭田浩一郎氏	金貳圓	久富徹氏
金貳圓	肥後盛熊氏	金參圓	肥後和男氏
金貳圓	肥留川鷺雄氏	金五圓	ブランチ氏
金六圓	二股卓爾氏	金參拾圓	富士德治郎氏
金貳圓	吹拔秀雄氏	金貳圓	布施久通氏
金貳圓	淵脇達氏	金參圓	深山忠六氏
金拾圓	深津宇八氏	金參圓	深井弘氏
金貳圓	深水重盈氏	金貳圓	船引眞造氏
金貳圓	深海菊松氏	金貳圓	船橋輝太郎氏
金貳圓	船井信一氏	金參拾圓	古山榮三郎氏
金貳圓	舟橋幾之助氏	金貳圓	古澤肥後男氏
金貳圓	古林光雄氏	金參圓	古市小金太氏
金五圓	古市利三郎氏	金參圓	古屋亮壽氏
金參圓	古屋正壽氏	金參圓	古屋亮壽氏
金五圓	古谷清氏	金參圓	古川莞示氏
金貳圓	古谷信愛氏	金貳圓	古川公平氏
金貳圓	古川義三郎氏	金貳圓	古川善四郎氏
金貳圓	古川正澄氏	金貳圓	藤見睦治氏
金參圓	藤丸吉四郎氏	金五圓	藤江喜久夫氏

祝賀會贊成者芳名簿

金五圓	三苦	正雄氏	金五圓	三田	藤吾氏
金五圓	三上	參次氏	金五圓	三井	善五郎氏
金參圓	三浦	周行氏	金參圓	三浦	佐市氏
金參圓	三屋	靜氏	金參圓	三木	末武氏
金參圓	三宅	素氏	金參圓	三戶	宣光氏
金貳圓	三村	親太郎氏	金貳圓	三浦	義雄氏
金貳圓	三浦	武治氏	金貳圓	三野	與吉氏
金貳圓	三田	村茂氏	金貳圓	三原	篤治氏
金貳圓	三井	宇一郎氏	金貳圓	三木	知一氏
金壹圓	三浦	久四郎氏	金拾圓	宮川	富次郎氏
金五圓	宮原	大彦氏	金五圓	宮本	主稅氏
金五圓	宮澤	寅雄氏	金五圓	宮澤	健作氏
金四圓	宮川	菊芳氏	金參圓	宮川	泉氏
金參圓	宮崎	博氏	金參圓	宮本	清氏
金貳圓	宮本	義雄氏	金貳圓	宮脇	甚助氏
金貳圓	宮川	造六氏	金貳圓	宮坂	芳太郎氏
金貳圓	宮地	勝二氏	金貳圓	宮地	雄吉氏
金貳圓	宮井	嘉一郎氏	金壹圓	宮川	幸二氏
金參圓	棟朝	正氏	金貳圓	室岡	孝治氏
金五圓	宗像	逸郎氏	金貳圓	宗本	昇氏
金五圓	武藤	直治氏	金貳圓	武藤	英氏
金貳圓	村井	彌六氏	金五圓	村島	理平氏
金八圓	村木	定雄氏	金拾圓	務臺	理作氏
金五圓	村地	長孝氏	金貳圓	村越	庄吉氏

七

金五圓	村山	經雄氏	金貳圓	村山	省吾氏
金參圓	村田	德次郎氏	金貳圓	村田	純一氏
金拾圓	村岡	博氏	金參圓	村岡	素一郎氏
金貳圓	村上	秀一氏	金拾圓	村上	邦夫氏
金五圓	村上	要人氏	金貳圓	村上	圭峰氏
金貳圓	目黑	甚七氏	金貳圓	目黑	藤吾氏
金參拾圓	目次	了氏	金五圓	目良	德造氏
金貳圓	本山	彦一氏	金貳拾圓	諸橋	徹次氏
金貳圓	持田	半六氏	金貳圓	望月	進氏
金貳圓	守安	壽一氏	金壹圓	桃崎	廣氏
金貳圓	茂木	元治氏	金貳圓	茂木	篤之助氏
金貳圓	門奈	五期氏	金四圓	門司	鐵氏
金參圓	森岡	常藏氏	金五圓	森下	國松氏
金參圓	森山	辰之助氏	金參圓	森脇	增雄氏
金貳圓	森川	正雄氏	金貳圓	森川	立也氏
金貳圓	森川	勉氏	金貳圓	森本	角藏氏
金拾圓	森本	六爾氏	金貳圓	森本	修氏
金貳圓	森本	清藏氏	金貳圓	森本	常吉氏
金參圓	森田	文十郎氏	金參圓	森田	新三氏
金貳圓	森田	勝氏	金貳圓	森田	虎次郎氏
金五圓	森	梯次郎氏	金參圓	森	健次郎氏
金貳圓	森	藤吉氏	金貳圓	森	慎一郎氏

祝賀會贊成者芳名簿

金五圓	前田	德次郎氏	金五圓	前田	恒治氏
金貳圓	前田	鷹衛氏	金貳圓	前岡	基市氏
金壹圓	前島	義男氏	金參圓	牧島	金三郎氏
金五圓	牧野	良平氏	金貳圓	牧野	包敏氏
金貳圓	牧野	信壽氏	金貳圓	牧野	教信氏
金貳圓	牧	千葉三氏	金貳圓	牧	野基氏
金貳圓	丸茂	貞亮氏	金貳圓	丸田	彦六氏
金五圓	丸山	林平氏	金五圓	丸山	瓦全氏
金五圓	丸山	良二氏	金貳圓	丸山	丈作氏
金貳圓	丸山	正雄氏	金參圓	增井	太郎氏
金參圓	增戶	鶴吉氏	金參圓	增谷	義雄氏
金貳圓	增田	綱夫氏	金貳圓	增田	彌太郎氏
金貳圓	增子	久三郎氏	金貳圓	增本	郁夫氏
金拾圓	增澤	淑氏	金貳圓	增澤	協氏
金拾圓	松橋	達生氏	金五圓	松阪	富之助氏
金拾圓	松田	金五郎氏	金五圓	松田	俊英氏
金五圓	松崎	繁衛氏	金參圓	松野	仁左衛門氏
金拾圓	松岡	萬次郎氏	金參圓	松岡	誠氏
金五圓	松岡	辰三郎氏	金貳圓	松戶	梅治郎氏
金參圓	松宮	助之丞氏	金貳圓	松宮	信四郎氏
金參圓	松下	清雄氏	金貳圓	松下	律太郎氏
金參圓	松浦	俊吉氏	金參圓	松浦	松男氏
金參圓	松裏	律雄氏	金貳圓	松浦	男氏
金七圓	松尾	正夫氏	金貳圓	松尾	義男氏
金拾圓	松本	亦太郎氏	金參圓	松本	才一氏
金參圓	松元	義祐氏	金參圓	松本	從之氏

三

金參圓	松本	藤八氏	金貳圓	松本	義玄氏
金貳圓	松元	真一氏	金貳圓	松本	薰雄氏
金貳圓	松本	武夫氏	金貳圓	松本	英三氏
金貳圓	松本	幸兵衛氏	金貳圓	松本	健之助氏
金貳圓	松本	正氏	金貳圓	松本	次三郎氏
金五圓	松尾	重壽氏	金貳圓	松尾	源作氏
金貳圓	松井	潔氏	金貳圓	松井	秀男氏
金拾圓	松原	益太氏	金五圓	松原	行一氏
金參圓	松原	久安氏	金貳圓	松原	兼助氏
金貳圓	松村	象一郎氏	金壹圓	松川	昇太郎氏
金貳圓	松井	潔氏	金壹圓	松村	正氏
金參圓	皆川	新作氏	金貳圓	美齋	津三善氏
金拾五圓	嶺	鍊二郎氏	金貳圓	光崎	熙氏
金貳圓	光本	光治氏	金壹百圓	峰岸	米造氏
金貳拾圓	峰間	信吉氏	金拾圓	水野	彌作氏
金五圓	水口	民次郎氏	金五圓	水野	國太郎氏
金參圓	水上	正廣氏	金參圓	水田	清惠氏
金貳圓	水野	周藏氏	金貳圓	水足	準喜氏
金貳圓	水越	實美氏	金貳圓	水池	梶四郎氏
金五圓	溝淵	進馬氏	金五圓	溝口	鹿次郎氏
金參圓	溝口	禎次郎氏	金貳圓	溝口	秀次氏
金貳圓	溝口	傳氏	金拾五圓	三上	節造氏
金拾圓	三井	政善氏	金五圓	三木	英太郎氏
金五圓	三國谷	三四郎氏	金五圓	三輪	知雄氏

金貳圓 森 源太郎氏
 金壹圓 安田 敏雄氏
 金拾圓 山極 二郎氏
 金五圓 山岸 貫治氏
 金貳圓 山岸 五平氏
 金拾圓 山崎 進氏
 金參圓 山崎 織治郎氏
 金壹圓 山崎 迪雄氏
 金五圓 山田 喜三郎氏
 金參圓 山田 丈夫氏
 金參圓 山田 良三氏
 金拾五圓 山内 佐太郎氏
 金五圓 山内 得立氏
 金貳圓 山内 勤氏
 金參圓 山内 愛助氏
 金五圓 山下 與三吉氏
 金參圓 山下 重輔氏
 金貳圓 山下 勝太郎氏
 金貳圓 山下 享志氏
 金貳圓 山下 毅一郎氏
 金貳圓 山下 市平氏
 金拾圓 山口 俊策氏
 金五圓 山口 泰平氏
 金參圓 山口 鏡之助氏
 金貳圓 山口 鎌次郎氏

金貳圓 山口 隆貫氏
 金拾圓 山口 德三郎氏
 金貳拾圓 山本 慶治氏
 金拾五圓 山本 隆一氏
 金拾圓 山本 政治氏
 金五圓 山本 梅雄氏
 金五圓 山本 昇氏
 金參圓 山本 金平氏
 金參圓 山本 俊一氏
 金參圓 山本 松市氏
 金貳圓 山本 盛太郎氏
 金貳圓 山本 源之丞氏
 金貳圓 山本 忠親氏
 金貳圓 山本 洋一氏
 金壹圓 山本 信夫氏
 金五圓 安川 伊三氏
 金參圓 安岡 德之助氏
 金五圓 安田 弘嗣氏
 金參圓 八木 昌平氏
 金五圓 安武 磯喜氏
 金貳圓 安里 源秀氏
 金拾圓 屋代 熊太郎氏
 金五圓 山根 德太郎氏
 金五圓 山川 健次郎氏
 金貳圓 山北 清次氏

ユ

金貳圓 山 萬一海氏
 金貳圓 山形 寛氏
 金參圓 矢島 晋次氏
 金貳圓 矢袋 喜一氏
 金拾五圓 矢部 吉禎氏
 金拾圓 矢野 續藏氏
 金參圓 柳原 秀太郎氏
 金貳圓 柳下 儀平氏
 金貳圓 柳澤 久太郎氏
 金參圓 柳澤 正直氏
 金貳圓 八劍 織太郎氏
 金貳圓 八雲 善龍氏
 金貳圓 湯澤 幸吉郎氏
 金貳圓 湯田 圭一氏
 金貳圓 湯本 喜一郎氏
 金五圓 湯本 素明氏
 金拾圓 湯原 元一氏
 金參圓 湯川 征吉氏
 金貳圓 吉岡 郷甫氏
 金貳圓 吉岡 啓三氏
 金壹百圓 吉田 彌平氏
 金五圓 吉田 熊次氏
 金五圓 吉田 橋莊氏
 金五圓 吉田 信夫氏
 金參圓 吉田 彌三氏
 金貳圓 吉田 幾次郎氏

金貳圓 山村 能久氏
 金貳圓 山田 忠山氏
 金貳圓 矢頭 常雄氏
 金貳圓 矢崎 信一氏
 金五圓 矢部 彌太郎氏
 金貳圓 矢野 速吉氏
 金貳圓 柳本 トクノ氏
 金貳圓 柳町 榮次氏
 金貳圓 柳澤 正直氏
 金貳圓 八尋 昇氏
 金貳圓 八木 四郎氏
 金貳圓 湯淺 友信氏
 金貳圓 湯本 倉之助氏
 金拾圓 由良 哲次氏
 金四圓 結城 權兵衛氏
 金拾圓 湯村 惣太郎氏
 金貳圓 吉岡 義雄氏
 金貳圓 吉岡 喜四郎氏
 金拾圓 吉田 靜致氏
 金五圓 吉田 保治氏
 金五圓 吉田 賢龍氏
 金貳圓 吉田 寅雄氏
 金貳圓 吉田 基藏氏

ワレリ

金貳圓 吉田 益治氏
 金貳圓 吉田 敏夫氏
 金貳圓 吉田 清氏
 金參圓 吉村 源之助氏
 金貳圓 横井 廣保氏
 金貳圓 横井 曹一氏
 金五圓 横尾 真太郎氏
 金貳圓 横尾 亮次郎氏
 金貳圓 横田 武信氏
 金貳圓 横山 賀前氏
 金貳圓 横山 藤吾氏
 金貳圓 横山 傳四郎氏
 金貳圓 吉川 久信氏
 金貳圓 吉川 種清氏
 金貳圓 吉野 益見氏
 金參圓 吉澤 吉司氏
 金參圓 吉浦 祐全氏
 金貳圓 吉中 吾郎一氏
 金貳圓 吉原 登氏
 金拾圓 依田 操氏
 金貳圓 米地 武雄氏
 金貳圓 料治 武雄氏
 金貳圓 蓮花寺 則孝氏
 金拾圓 綿貫 哲雄氏
 金貳圓 鷺尾 幾子氏

金貳圓 吉田 俊夫氏
 金貳圓 吉田 可成氏
 金貳圓 吉田 次郎氏
 金壹圓 吉村 秀子氏
 金貳圓 横井 良和氏
 金貳圓 横倉 爲治氏
 金四圓 横尾 安夫氏
 金貳圓 横田 慎治氏
 金貳圓 横田 惟精氏
 金貳圓 横山 貞裕氏
 金貳圓 横山 巖氏
 金五圓 吉川 準治郎氏
 金貳圓 吉野 平藏氏
 金五圓 吉本 克己氏
 金貳圓 吉木 利光氏
 金貳圓 吉井 悅郎氏
 金貳圓 吉成 翁助氏
 金拾圓 依田 豐氏
 金貳圓 米澤 武平氏
 金壹圓 米山 喜代造氏

金貳圓 協屋 督氏
 金參拾圓 互理 章三郎氏

祝賀會賛成者芳名録

- | | | | | | | | |
|------|----------|------|----------|-----|---------|-----|---------|
| 金貳圓 | 脇田 順一氏 | 金五圓 | 若月 秀吉氏 | 金五圓 | 渡部 平治郎氏 | 金五圓 | 渡部 連藏氏 |
| 金五圓 | 若林 壬一氏 | 金五圓 | 若月 岩吉氏 | 金參圓 | 渡邊 伊藤氏 | 金參圓 | 渡邊 貞雄氏 |
| 金貳圓 | 若林 一穂氏 | 金參拾圓 | 和田 猪三郎氏 | 金參圓 | 渡邊 毅氏 | 金參圓 | 渡部 竹三郎氏 |
| 金拾圓 | 和 田 豐氏 | 金七圓 | 和 田 邦五郎氏 | 金參圓 | 渡邊 年氏 | 金參圓 | 渡邊 昌司氏 |
| 金參圓 | 和 田 喜八郎氏 | 金參圓 | 和 田 宗太郎氏 | 金貳圓 | 渡邊 富久治氏 | 金貳圓 | 渡邊 千治郎氏 |
| 金貳圓 | 和 田 數雄氏 | 金貳圓 | 和 田 眞氏 | 金貳圓 | 渡邊 融氏 | 金貳圓 | 渡邊 毅夫氏 |
| 金貳圓 | 和 田 彰氏 | 金貳圓 | 和 田 繁太郎氏 | 金貳圓 | 渡邊 正男氏 | 金貳圓 | 渡邊 弘氏 |
| 金貳圓 | 和 栗 愛壽氏 | 金貳圓 | 和 田 乙治氏 | 金貳圓 | 渡邊 剛藏氏 | 金貳圓 | 渡邊 平三郎氏 |
| 金拾五圓 | 渡邊 半次郎氏 | 金拾圓 | 渡邊 信治氏 | 金貳圓 | 渡邊 敏夫氏 | 金貳圓 | 渡邊 盛治氏 |
| 金五圓 | 渡部 善次氏 | 金五圓 | 渡邊 信夫氏 | 金貳圓 | 渡邊 謙吉氏 | 金貳圓 | 渡邊 周太郎氏 |
| 金五圓 | 渡邊 操氏 | 金五圓 | 渡邊 義治氏 | 金貳圓 | 渡邊 末吾氏 | 金壹圓 | 渡邊 義明氏 |

去る五月上旬より半歳の長きに亘りまして、北は樺太南は臺灣の津々浦々より翕然として起る三宅博士古稀祝賀の聲、中にも熱誠こもる祝賀の意を寄せらるゝもの實に貳千參百有五人、釀金壹萬八百九拾五圓の多きに達しました。これに東京文理科大学、東京高等師範學校、同校附屬中學校、附屬小學校、第一臨時教員養成所學生生徒兒童を加へますれば釀金壹萬貳千壹百七拾圓四拾錢となります。是に其の結果を御報告するに當りまして衷心感謝の念に堪へませぬ。厚く御禮申し上げます。

(編輯餘録) 一、祝賀會記念誌の發行が意外に延引したことはまことに御申譯ないが、これは三宅先生が突然薨去せられたため御葬儀に拘はり一時事務を中止するの止むなきに至つたことを御諒承願ひます。

一、會計事務については伊勢田春市君が殆ど晝夜兼行で芳名簿の整理や出納の後始末をせられたことは特に感謝に堪へない次第である。

一、記念事業の中、論文集の刊行は困難事の一つであつた。始め約三十名の執筆諸氏が果して期日迄に脱稿せらるるかどうかは頗る疑問としてゐたのであつたが執筆諸氏の熱烈なる御努力によつて權威ある論文を期日前に送達せられたことは深く感謝に堪へない。殊に大塚史學會の大高常昌君等は夏期休業中に拘らず滯京して原稿の蒐集整理と校正とに當られたことも豫定の期日に出版し得た一つの原因である。其の間執筆諸氏並びに賛成者諸氏に御無禮をいたしたことも少くなくつたが、青年の熱心の迸りと御寛恕あらんことを切に請ふ次第である。

一、記念論文集の編纂並びに校正に當つた委員は次の

通りである。(昭和四年十一月十日)

- | | | |
|-------|-------|-------|
| 齋藤 斐章 | 中山久四郎 | 淺海 正三 |
| 木代 修一 | 相 葉 仲 | 石田 義男 |
| 大高 常昌 | 小澤 榮一 | 白濱 兵三 |
| 武田 俊介 | 西村 精三 | 古田 正男 |
| 山本 英雄 | 坂本 致治 | |

一、記念誌の出席者氏名録中で各地茗溪會支部代表として御出席下さいました方々の所に支部名を缺記しました點は悪しからず御寛恕下さい。

正誤表

頁	位置	誤	正
各時代(御寫真(口繪三頁))	右 上	十七歳	十八歳
(二十五頁(小傳))	十六行	四十三歳	四十二歳

605

38

編纂者兼
發行者

三宅博士古稀祝賀會
東京高等師範學校大塚史學會內

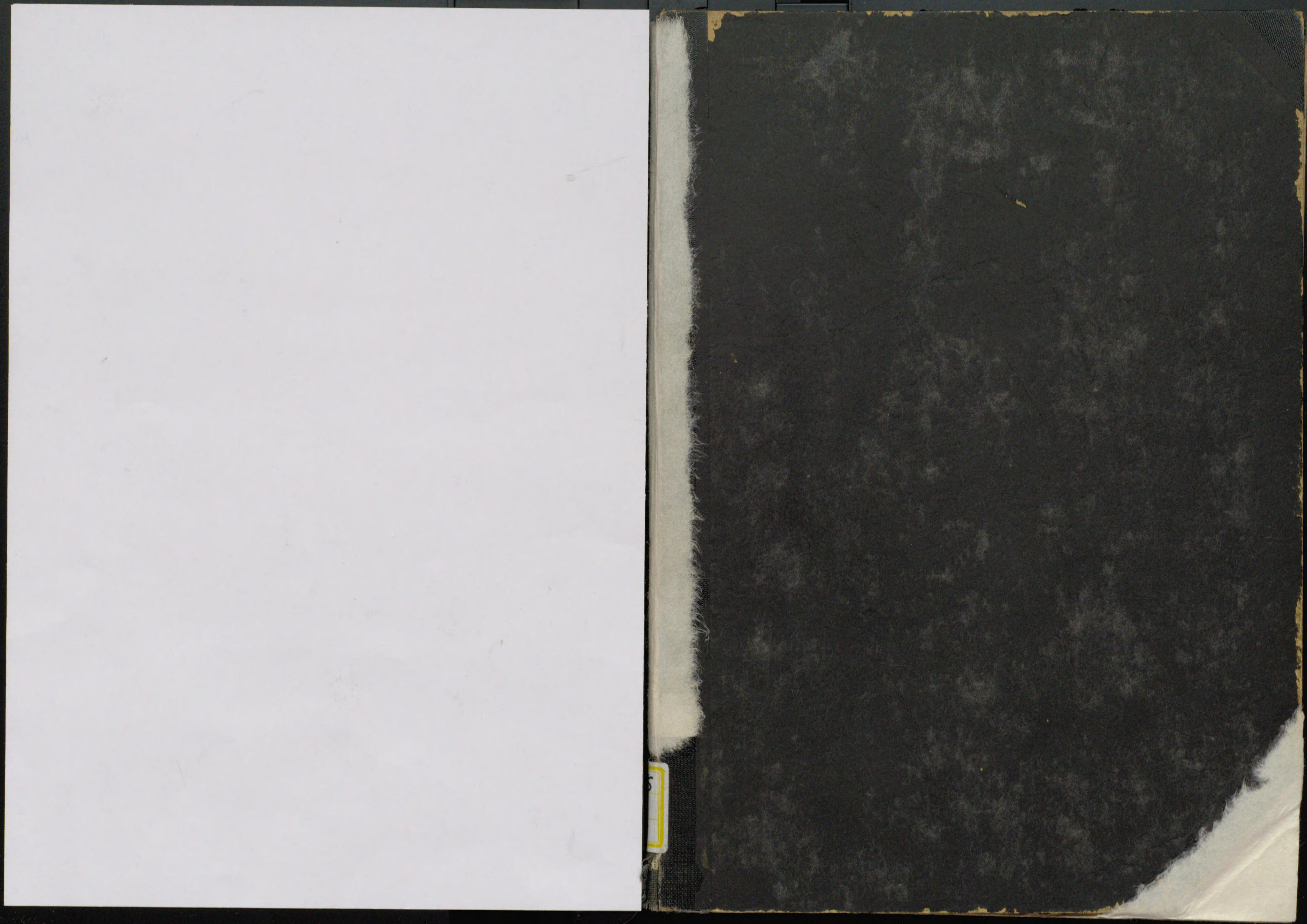
印刷所

本社印刷

東京市牛込區改代町二十四番地

605

38



5